

県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

つき やま い せき に
築 山 遺 跡 Ⅱ



2007年3月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

つき やま い せき に
築山遺跡Ⅱ

2007年3月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

序

出雲市上塩治町には、史跡上塩治築山古墳を筆頭に、上塩治横穴墓群、築山遺跡など数多くの埋蔵文化財が存在しており、出雲市内でも遺跡の研究においては重要な地域であります。しかし、一方で土地区画整理事業や県道改良事業などの開発が進められつつある地域であります。

県道今市古志線改良事業は、島根県出雲県土整備事務所によって計画されている道路事業でありますが、予定地が周知の遺跡である築山遺跡内を横断する路線であります。このため島根県出雲県土整備事務所と当方で協議を重ね、平成15年度から遺跡保護のため発掘調査を実施しております。本書はこの発掘調査結果を報告するために作成したものです。

今回の調査成果が、さらなるこの地域における歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いであります。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡が伝えられることを期待するとともに、発掘調査や本書の刊行にあたって、ご指導、ご協力賜りました島根県出雲県土整備事務所をはじめ、関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成19年(2007)3月

出雲市教育委員会
教育長 黒目俊策

例　　言

1. 本書は、島根県出雲県土整備事務所の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成15年度(2003)に実施した、県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で取り扱う遺跡は築山遺跡(島根県遺跡番号:W24、出雲市遺跡番号:F23)である。

3. 調査地の所在及び面積は次のとおりである。

出雲市上塩冶町1685ほか、1,600m²

4. 現地の発掘調査期間は次のとおりである。

平成15年(2003)12月1日から平成16年3月31日まで

5. 調査工程及び調査体制は次のとおりである。

調査工程

平成15年度　　現地発掘調査及び室内整理作業

平成16~18年度　室内整理作業及び報告書作成

調査主体　出雲市教育委員会

平成15年度(2003)

調査指導　田中義昭(島根考古学会会長)、原田敏照(島根県教育庁文化財保護主事)

事務局　板倉 優(出雲市芸術文化振興課長)、川上 稔(同文化財室長)

調査員　三原一将(出雲市文化財室副主任主事)、米田美江子(同主任嘱託員)

調査補助　伊藤晶子、錦田充子、宮崎 紗(以上同臨時職員)

平成16年度(2004)・平成17年度(2005)

事務局　板倉 優(出雲市芸術文化振興課長:合併前)

神門 勉(同文化財課長:合併後)、川上 稔(同主査)、三原一将(同主任)

*出雲市ほか1市4町は平成17年(2005)3月22日に合併した。

平成18年度(2006)

事務局　石飛幸治(出雲市文化財課長)、花谷 浩(同学芸調整官)、川上 稔(同主査)、三原一将(同主事)

編集補助　高橋誠二(同臨時職員)

6. 発掘調査、室内整理及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関からご指導、ご協力を賜った。

記して謝意を表しておきたい。(順不同・敬称略)

井上晃孝(元鳥取大学医学部助教授)、中村唯史(三瓶自然観サヒメル指導員)、岸隆太郎(出雲市築山土地地区画整理組合)、大國 勝(同)

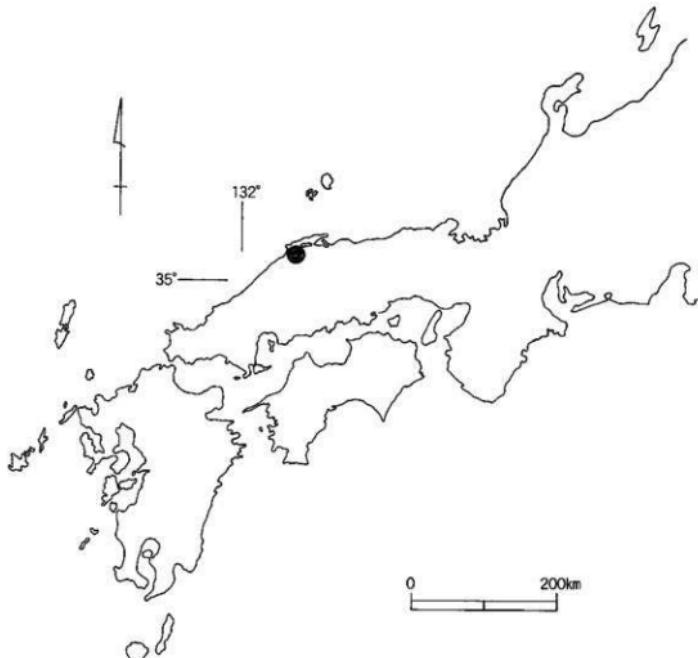
7. 本書の執筆、編集は米田・三原・高橋が協議して行った。

8. 遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。

SD:溝状遺構 SK:土坑 SE:戸井跡 P:柱穴 SX:その他の遺構

9. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナはL540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋はL380mm×W260mmのものである。

- 本書で使用した測地系は世界測地系(改正後)で、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。
- 築山遺跡2区の自然科学分析については、株式会社文化財調査コンサルタントに委託した。また、築山遺跡1区で出土した縄文土器について、岡山理科大学自然科学研究所の白石 純氏に胎土分析をお願いし玉稿を賜った。これらの分析結果は第4章に掲載している。
- 本書で掲載した写真的撮影については、航空写真を株式会社藤井基礎設計事務所に委託し、その他は調査員が行った。
- 発掘調査、遺物整理については、次の者が従事した。
青木 孝、飯国美代子、今岡 実、奥田利晃、勝部初子、川上靖夫、岸 邦夫、坂本 進、三部 進、上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、曾田利夫、高根常代、富田 勉、長島節子、成相吉隆、花田和子、藤原一男、古川八郎、松本エミ子、吉川善美、吉田 栄、米山清司(以上 発掘調査)
荒木恵理子、飯國陽子、鶴口令子、永田節子、吹野初子(以上、遺物整理)
- 遺物実測については、調査員、調査補助員のほか、次の者が従事した。
井上喜代女、藤原 舞、村田利恵(以上 いなか舎)
- 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。



島根県出雲市の位置

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査に至る経緯 ······ (三原) ····· 1

第2章 位置と環境 ······ (高橋) ····· 2

第3章 調査の結果 ······ (米田・三原・高橋) ····· 6

第4章 自然科学分析結果 ······ (渡辺・白石) ····· 59

第5章 火葬骨について ······ (米田) ····· 67

遺物観察表

写 真 図 版

報告書抄録

第1章 調査に至る経緯

都市計画道路である県道今市古志線は、出雲市街地の環状道路の一部をなす4車線の主要幹線街路であり、山陰自動車道とリンクし、出雲市の骨格となる街路として山陰自動車道の整備及び市街地内の他道路の整備に合わせ、当時の島根県出雲土木建築事務所(現在の島根県出雲県土整備事務所。以下、県土木事務所という。)によって新設を計画された道路である。

延長1.15kmを測るこの道路は上塩治町から今市町に及ぶ間で計画されているが、特に上塩治町地内は史跡上塩治築山古墳(以下、築山古墳という。)などが存在する遺跡の密集地である。このため県土木事務所は平成14年(2002)7月23日付けで、当該事業予定地内の埋蔵文化財について出雲市あて協議書を提出し、出雲市はこれに対し7月30日付けで試掘調査が必要な旨を回答した。その後、出雲市は11月25日、26日に試掘調査を行い事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地を概ね確定し、この調査結果を11月28日付で県土木事務所あて報告した。

これを受けた県土木事務所は平成15年(2003)4月1日付けで、県道今市古志線と同時に計画されていた県道出雲三刀屋線の両事業予定地のうち、用地買収などが済んでおり発掘調査可能な範囲について、出雲市あてに埋蔵文化財発掘調査を依頼し、同日付けで委託契約を交わした。

これに基づき、出雲市は同年6月4日から11月30日まで県道出雲三刀屋線予定地内の現地発掘調査(1区、11号区画道路部)を実施した後の、12月1日から平成16年(2004)3月31日まで県道今市古志線予定地内の発掘調査(2区)を実施した。

なお、主な文書の送付収受については下記のとおりである。

- 平成15年4月1日 「(主)出雲三刀屋線新世紀道路(改良)事業に係る平成15年度発掘調査について(依頼)」及び
「同(回答)」県土木事務所と出雲市
- 同年 4月1日 「(主)出雲三刀屋線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査委託契約」県土木事務所と出雲市
- 同年 4月30日 「埋蔵文化財発掘の通知について」県土木事務所から出雲市教委へ
- 同年 5月16日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について(通知)」島根県教委から出雲市教委へ
- 同年 9月25日 「埋蔵文化財の調査について(依頼)」県土木事務所から出雲市へ
- 平成16年3月31日 「築山遺跡2区発掘調査概報の提出について」出雲市教委から島根県教委へ
- 同年 3月31日 「築山遺跡2区の取り扱いについて(意見書)」出雲市教委から島根県教委へ
- 同年 4月1日 「築山遺跡の取り扱いについて(回答)」島根県教委から出雲市教委へ
- 同年 4月6日 「埋蔵文化財発見届」出雲市教委から出雲警察署へ
- 同年 4月6日 「埋蔵文化財保管証の提出について」出雲市教委から島根県教委へ
- 同年 4月8日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について(通知)」島根県教委から出雲市教委へ

第2章 位置と環境

出雲平野は、北に島根半島北山山系、南に中国山地がそびえ、後者より流れ出る斐伊川と神戸川の沖積作用と三瓶山の噴火活動などにより形成されている。築山遺跡はこの平野の南部に位置し縄文時代後期以降、一時期分断するものの脈々と人間活動の痕跡を残している。以下出雲平野を中心に各時代の遺跡概要を述べる。

縄文時代

出雲平野近辺では旧石器時代の遺跡が発見されていないため、出雲平野西部の砂丘上に立地し早期末の織維土器や前期の轟B式土器などを出土した上長浜貝塚(55)と、北西の山麓にあり織維土器などを出土した菱根遺跡(8)が、現段階で確認されている遺跡では最古のものとなる。

前・中期の遺跡も、南側丘陵に位置し前期末の大歳Ⅲ式土器や中期の里木Ⅱ式土器などが出土した三田谷Ⅲ遺跡と、南東側丘陵谷部に位置し中期の船本Ⅰ式B類に酷似した土器が出土した上ヶ谷遺跡(23)などが確認されている程度である。

後・晚期の遺跡としては、南東側丘陵に位置し板状土偶や丸木船を出土した三田谷Ⅰ遺跡(38)、南西側の丘陵裾部に位置し出雲平野では数少ない方形の竪穴住居跡を検出した御領田遺跡(58)、南西側の丘陵谷部に位置し大量の土器を検出した三部竹崎遺跡(57)などが代表的な遺跡である。その他、数点の土器ではあるが後谷遺跡(24)、保知石遺跡(52)、善行寺遺跡(41)、五反配遺跡(10)などからも出土している。また、築山遺跡からは後期初頭の中津式土器が出土している。

弥生時代

前期に出現した遺跡は、板付Ⅰ・Ⅱ式に併行する「原山式」を確立した原山遺跡(9)程度で、ほとんどが縄文晩期から継続しており、火処といった遺構周辺から石器や土器が出土している藏小路西遺跡(16)や、土坑状の落ちこみより土器を出土した浅柄遺跡(51)などある。しかし、依然として遺構の数は少ない。

中期の中葉になると矢野遺跡(18)、古志本郷遺跡(45)、天神遺跡(43)、下古志遺跡(48)などからは環濠の可能性をもつ溝や多数の居住遺構が検出された。これらの遺跡は自然堤防状の微高地に営まれ古墳前期まで継続する大規模集落である。この他に、居住遺構は少ないものの当時の生活を伺い知ることができる遺跡も多く、大量の木製品を出土した海上遺跡(42)や、絵画土器や分銅形土製品などを出土した白枝荒神遺跡(20)などがある。

後期は、中期に形成された大規模集落が引き続き平野の大勢を占める一方で、定住域が平野部全体へと拡がりをみせる。門前遺跡(4)や山持遺跡(5)からは大量の土器と住居遺構が、姫原西遺跡からは大量の木製品と掘立柱建物跡を検出、中野清水遺跡(12)からは大量の土器と共に生産関連の遺物も出土している。また、当時の出雲平野を考えるうえで鉄橋脚柱穴より土器を出土した斐伊川鉄橋遺跡(26)は貴重な遺跡といえる。

弥生時代の首長墓といえば、以前は西谷墳墓群(29)だけだったが、中期後葉の四隅突出墓が青木遺跡(3)で確認されたり、中野美保遺跡(14)では中期中葉の方形貼石墓の上に後期後葉の四隅突出墓が築造されたり、山陰地方では類例が少ない後期中葉の方形周溝墓が三田谷Ⅰ遺跡(38)で検出されたりと、当時の社会構造が明らかになりつつある。

古墳時代

前期は前代までの列島規模から見ても大型な首長墳は造られなくなり、鉄鋤・鉄斧などを出土した

大寺古墳(1)（墳長約50m 前方後円墳）、青銅鏡や筒形銅器などが副葬されていた山地古墳(56)（墳長24m 円墳）の他に、西谷7号墳(29)（墳長23×15m 突出部をもつ方墳）、権現山古墳(28)（墳長19×17m 方墳）などが存在する。

中期は、小型仿製鏡やガラス玉などを出土した池田古墳(36)（墳長約15m 方墳）や、鉄劍や鉄斧、U字形鍬先を出土した西谷16号墳(29)（墳長11m 円墳）、直刀・勾玉・管玉などが出土した軍原古墳(21)（墳長約50m 前方後円墳？）の他に、北光寺古墳(54)（墳長65m 前方後円墳）、神庭岩舟古墳(22)（墳長約50m 前方後円墳）、西谷15号墳(29)（墳長約15m 方墳）などが確認されている。

後期になると全国的には規模も小さくなり前方後円墳を作らなくなる傾向にあるのに対し、出雲ではこの時期に大規模化している。その代表的な古墳が、今市大念寺古墳(32)（墳長約92m 前方後円墳）である。この古墳のある神戸川東岸地域には、上塙治築山古墳(34)（墳長約45m 円墳）や上塙治地藏山古墳(35)（不明）などが継続的に築造されるのに対し、神戸川西岸地域でも、妙蓮寺山古墳(47)（墳長49m 前方後円墳）、放れ山古墳(46)（墳長13m 円墳）、宝塚古墳(49)（不明）などが連続して築造されている。

7世紀になると、神戸川東岸地域では180穴以上を数える上塙治横穴墓群(37)が営まれる一方で、三田谷2・3号墳、光明寺4号墳、大井谷古墳、狐廻谷古墳などの終末期古墳も築造されている。また、神戸川西岸地域でも100穴を超す神門横穴墓群(53)が営まれている。しかし、東岸に比べ今のところ終末期古墳の数は少ないが、井上横穴墓群(44)などのような中小規模の横穴墓群が多数形成されている。

奈良時代

奈良時代の官衙関連遺跡としては、神門郡家の郡庁に比定され大型掘立柱建物跡が検出された古志本郷遺跡(45)や、墨書き土器や木簡などから神門郡の役所跡と考えられる三田谷I遺跡(38)、出雲郡家の正倉に比定され大型倉庫群を検出した後谷遺跡(24)などが代表的な遺跡である。また、その他にも明確な比定はされていないものの、神門郡八野郷周辺に比定される小山遺跡(17)からは文字資料を出土し、天神遺跡(43)からも大型の掘立柱建物跡が検出されている。

古代寺院であるが、伽藍配置は不明だが心礎と版築された基壇土が検出された神門寺境内廢寺(40)は神門郡古志郷新造院に、長者原廢寺跡(30)は神門郡朝山郷新造院に、天寺平廢寺(25)は出雲郡河内郷新造院にそれぞれ推定されている。

墓は、マウンドに石製骨臓器を納めた光明寺3号墓(59)や石室内に石櫃を置く小坂古墳などが知られているが、築山遺跡からは火葬骨を須恵器の蓋内に納めたものが出土している。

平安時代

貝塚から漁労活動を窺い知ることのできる上長浜貝塚(55)や、遺構は伴わないものの鉄鉢形須恵器など宗教色の強い遺物が出土し、周辺に古代寺院が存在した可能性のある大井谷II遺跡(31)などが挙げられる。また集落遺跡としては、丹塗りの土器や漆が付着した須恵器が出土した高浜II遺跡(7)の他に、数点の土器を出土した大寺三藏遺跡(2)や里方八石原遺跡(6)などがある。

中世以降

住居遺構は、角田遺跡(33)では12～13世紀頃に築かれた建物の区画溝などが検出され、蔵小路西遺跡(16)からは12世紀後半～15世紀前半にかけての大溝に囲まれた国人領主朝山氏のものと考えられる方形居館を検出、渡橋沖遺跡(19)からは13世紀前半～14世紀にかけての掘立柱建物跡やほぼ同時期の

石製五輪塔が見つかっており、欠野遺跡(18)からは14~15世紀の溝で区画された掘立柱建物跡が検出されている。

墓としては龍泉窯の青磁碗と青磁皿が副葬され塙治氏の墓と推定される荻籽古墓(13)や、良好な状態の古墓を検出した姫原西遺跡(15)などがある。

参考文献

- 島根県教育委員会『出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年
西尾克己・大國晴雄『出雲平野の古墳』1991年
島根県古代文化センター『島根県発掘調査一覧 第一集』2000年
村上勇・川原和人『出雲・原山遺跡の再検討－前期弥生土器を中心にして－』『島根県立博物館調査報告 第2冊』1979年
勝部昭『出雲国風土記と古代遺跡』 山川出版社 2002年
斐川町教育委員会『斐川町誌 調査報告第1集』
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報I』1993年
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報II』1994年
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報III』1995年
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報IV』1996年
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報V』1997年
島根県埋蔵文化財調査センター『島根県埋蔵文化財調査センター年報VI』1998年
出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996年
島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書X 三田谷Ⅲ遺跡』2000年
島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 三田谷Ⅰ遺跡(vol. 1)』1999年
湖陵町教育委員会『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告(三部竹崎遺跡・御領田遺跡)』1994年
斐川町教育委員会『斐川町文化財調査報告15 後谷V遺跡』1996年
田中義昭ほか『出雲市矢野遺跡の発掘調査』『昭和63年度科学的研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書』1989年
出雲市教育委員会『県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 築山遺跡I』2005年
島根県教育委員会『蔵小路西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』1999年
島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告XⅦ 古志本郷遺跡VI - k区の調査-』2003年
出雲市教育委員会『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財調査報告書 天神遺跡(第10次発掘調査)』2002年
出雲市教育委員会『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下古志遺跡』2001年
島根県教育委員会『姫原西遺跡 一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』1999年



1. 大方古墳2. 大寺3. 三輪山4. 三輪山5. 丹前山6. 里八山7. 高牟見山8. 常根山9. 梶山10. 五反田山11. 山手人柱塚12. 鹿野山13. 佐野古墓
 14. 中村美保塚15. 稲原塚16. 萩原塚17. 大谷塚18. 小山塚19. 浅井塚20. 白坂塚21. 神庭岩船古墳22. 上ヶ谷塚23. 上ヶ谷塚24. 大寺平塚25. 大寺平塚26. 舟
 伊川塚27. 石上塚28. 植山古墳29. 西谷塚30. 長者原塚31. 大井谷32. 今市人塚古墳33. 朝田塚34. 上塚治塚35. 上塚治塚36. 淀田塚37. 上塚
 治塚38. 三田谷1. 逆山39. 三田谷2. 逆山43. 天神塚44. 井上塚45. 六足大塚46. 鮎川古墳47. 幸運寺山古墳48. 下古志遺
 墓49. 木原古墳50. 多聞院塚51. 浅井塚52. 保知石塚53. 神門塚穴塚54. 北光寺山55. 金屋貝塚56. 山地古塚57. 三部竹林塚58. 那須田塚59. 光野寺3号塚

図1 出雲平原の主要遺跡 (1:75,000)

第3章 調査の結果

調査の概要

今回の発掘調査地は、築山遺跡の2区と名付けた場所である。この2区は「県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の1区¹⁾と11号区画道路部²⁾に隣接している。平成15年度は6月4日から11月30日まで1区と11号区画道路部の発掘調査を実施した後に、調査体制を変えずに12月1日から3月31日まで2区の発掘調査を行った。

この2区は幅25mの県道出雲三刀屋線と県道今市古志線がT字状に接続する箇所に、鉤状に設定した調査区と、ここから北へ25m離れた場所に三角形に設定した調査区の2箇所の総称で、面積は計1600m²である。

現地発掘調査にあたっては、まず遺物包含層や遺構面に影響のない現在の耕作土を主とする表土約20~50cmを重機で除去した後に、基準杭設置を行った。2区は1区の西に同じ幅で隣接する調査区であるため、基準点も道路軸を用いた1区のそれを踏襲することとし、同じ基準点ライン上に5m間隔で延長して設置していく。ただし、重複を避けるため基準点の名称はアルファベットの小文字を使用し、区画されるグリッドについては、南東角の基準点の名称を用いることとした。なお、今後の1区と2区の図面合成などを容易にする目的で、2区の基準点a1は1区の基準点E18と同じ点としている。結果として、2区の1ライン(a1-i1ライン)は1区のEライン(E1-E18ライン)と同一直線上にのり、2区のa2、a3、a4、a5と1区のD18、C18、B18、A18はそれぞれ同一点となっている。

基準点設置後は、手掘りで遺物包含層を徐々に掘削し、出土した遺物はグリッド毎に取り上げていった。この結果、土器を中心とする遺物がコンテナ10箱分出土した。

次に掘削が地表面(第1ハイカ上面)³⁾に至ったグリッドから隨時遺構検出を行った結果、土坑墓、土坑、井戸、溝、小ビットなど多数の遺構を検出した。これらのうち、主要なものは後述するが、小ビットは建物跡や欄列などを形成するものが確認できず、遺物もほとんど出土しないものであったため、報告は割愛している。また、これら遺構は調査区の西寄りで密に確認できたが、東寄りでは少なかった。これは、調査区付近を境に、西側に微高地、東側に谷が形成されていたためと考えられる。

なお、遺構内からは土器を中心とする遺物がコンテナ18箱分出土している。先の遺構外出土遺物を合わせると、2区で出土した遺物の総量はコンテナ28箱分である。

調査の終盤には調査区西壁際のh7~h9grにおいて入力による深掘りを行った。1区では基盤層が隆起した箇所で、地山と考えていた第1ハイカ相当層の下で、第2黒色土⁴⁾相当層が局的に確認されここから縄文土器が出土している。今回の深掘りは2区においても同様の第2黒色土相当層の有無確認のために行ったが、詳細は後述する。

調査終了間際の平成16年3月20日には市民を対象とした現地説明会を開催した。2区では発見例が少ない骨蔵器が出土しており、新聞などでも取り上げられ注目を集めていたが、当日の参加者は30名程度にとどまった。

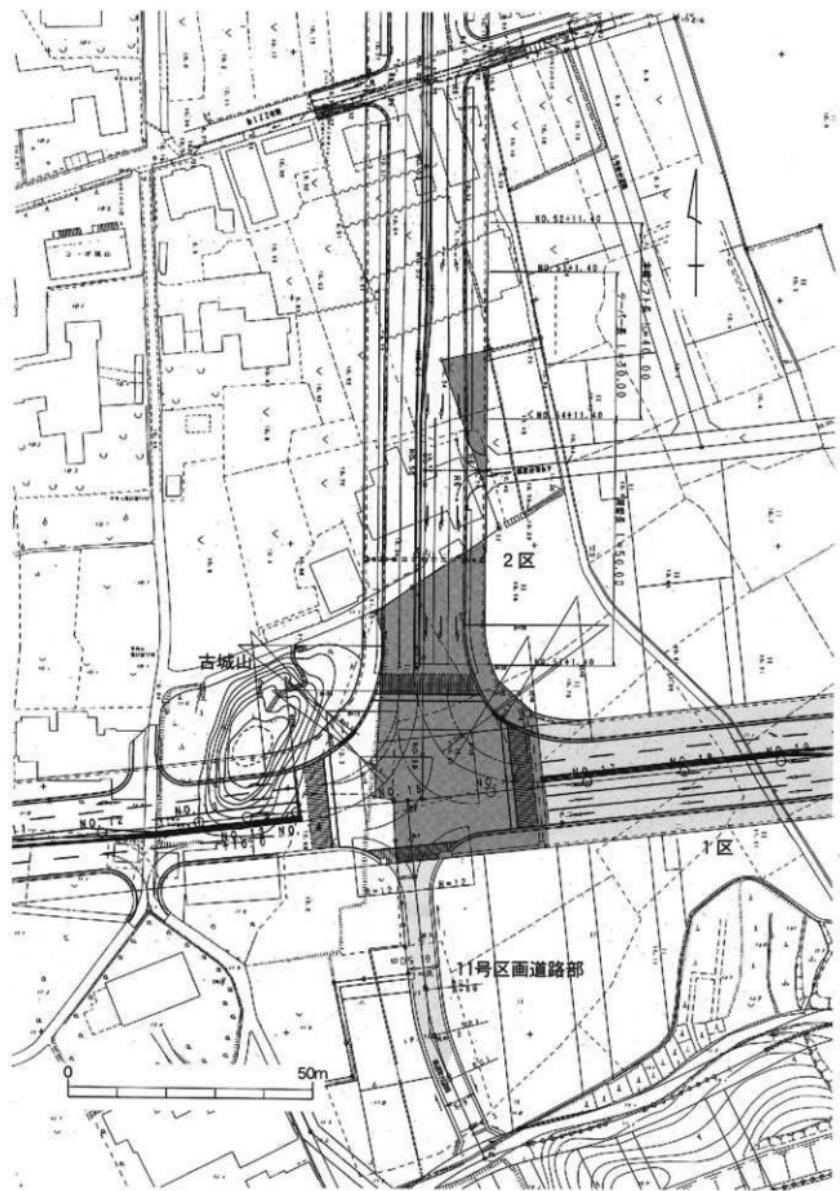


図2 調査区配置図 (1:1,000)

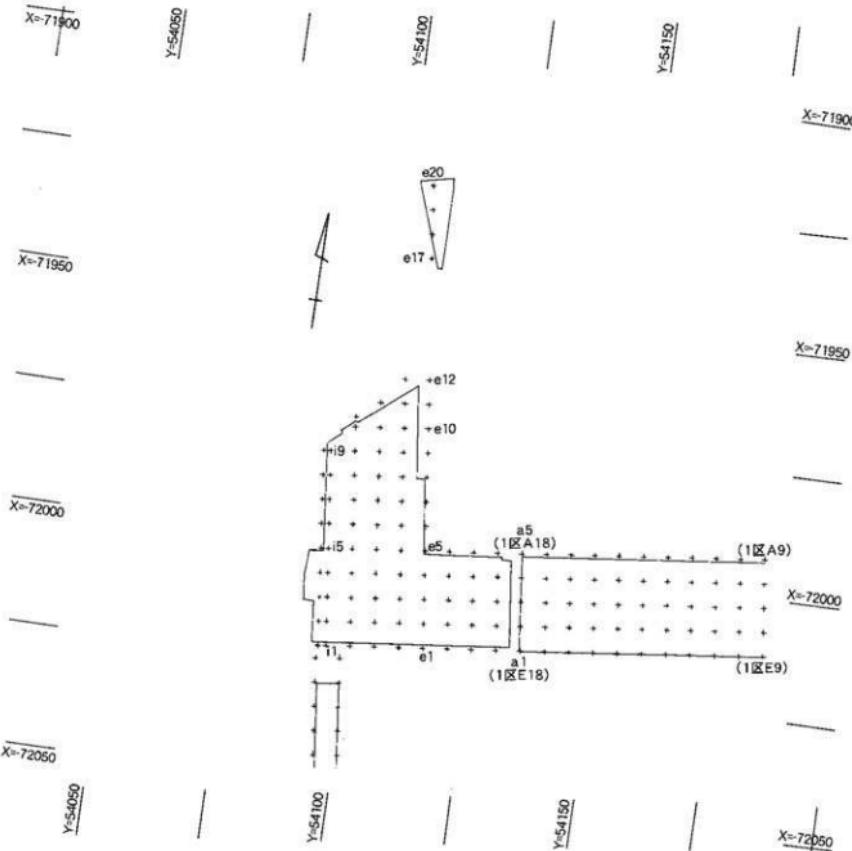


図3 基準坑配置図 (1 : 1,000)

表1 主要基準坑座標一覧

測点	X	Y
b1	-72017.941	54130.347
b5	-71998.065	54128.182
d1	-72019.02	54120.407
d5	-71999.148	54118.246
e1	-72019.562	54115.446
e5	-71999.684	54113.262
e8	-71984.779	54111.639
e12	-71964.886	54109.467
e17	-71940.016	54106.781
e18	-71935.048	54106.244

測点	X	Y
e19	-71930.075	54105.702
e20	-71925.098	54105.152
f1	-72020.102	54110.46
f5	-72020.222	54108.286
g1	-72020.652	54105.487
g5	-72000.762	54103.311
g8	-71985.861	54101.694
g11	-71970.949	54100.025
h1	-72021.195	54100.517

測点	X	Y
h5	-72001.306	54098.347
h7	-71991.366	54097.262
h9	-71981.43	54096.18
11	-72021.734	54095.541
13	-72011.795	54094.457
15	-72001.86	54093.37
110	-71977.002	54090.656
13	-72012.343	54089.475
15	-72002.405	54088.395

* 築山遺跡2区のa1は1区のE18と同じ点である。

* 築山遺跡2区の1ライン(a1—1ライン)は1区のEライン(E1—E18ライン)と同一直線である。



図4 遺構配置図 (1:200)

層序

旧地形(図5)

2区は調査前まで主に田園として利用されていた耕作地である。2区のすぐ西には地元で古城山と呼ばれている小さな山があり、さらに西には築山古墳が築かれた微高地が広がっている。一方、東は大井谷という地名が残る土地で、約3600年前に神戸川の沖積作用による土砂である第1ハイカ層で埋まるまでは、深い谷が形成されていたと考えられる地域である。このように2区はちょうど微高地と低地の境に位置している。2区の調査ではこの第1ハイカ層を地山とみなし、上面で遺構検出を行っている。

この地山面は2区の範囲では、標高9.6mから10.5mで変化するのであるが、これは先の旧地形を反映していると考えられ、b4、c4、d4gr付近で最も低くなり、西壁や北壁付近では高くなっている。また、遺構は地山の標高が高い箇所では多く、低い箇所では少なかった。

土層(図6~10)

2区の層序は、上から順に大きく1~3層に分類した。1層は現在の盛土や耕作土など、2層は中世から現代までの堆積土あるいは盛土、3層は中世の遺物包含層とし、各層がさらに細分できる場合はアルファベットの大文字を付け足し、例えば「2B層」というように層名を付した。

なお、3層は中世の遺物包含層であ

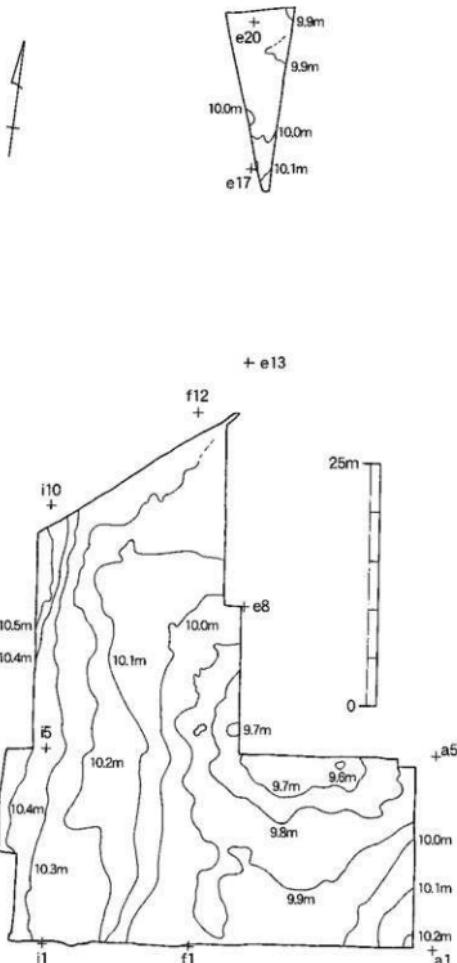


図5 地山面コンタ図 (1 : 500)

るが、弥生土器や古墳時代の土器なども若干混入している。また、今回の調査で最も古い検出遺構は古墳時代後期のものであるが、古墳時代以前の遺物だけを出土する遺物包含層は存在しない。

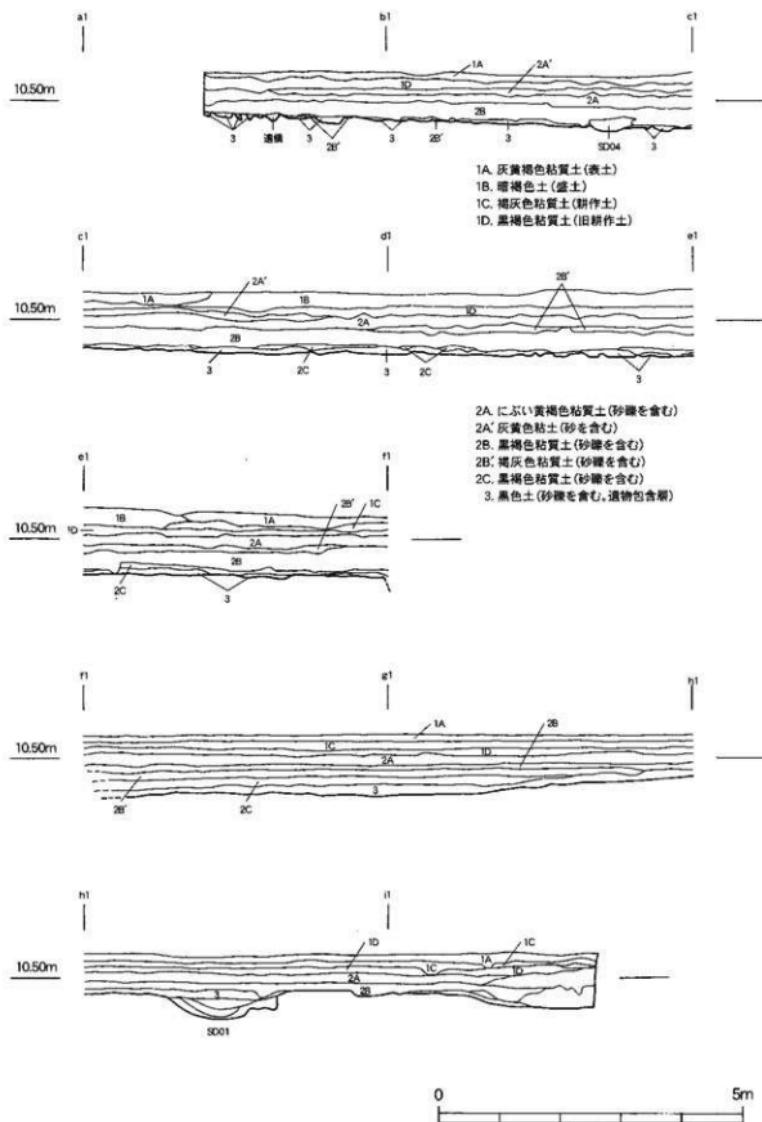


図6 a1-i1ライン土層断面図 (1:80)

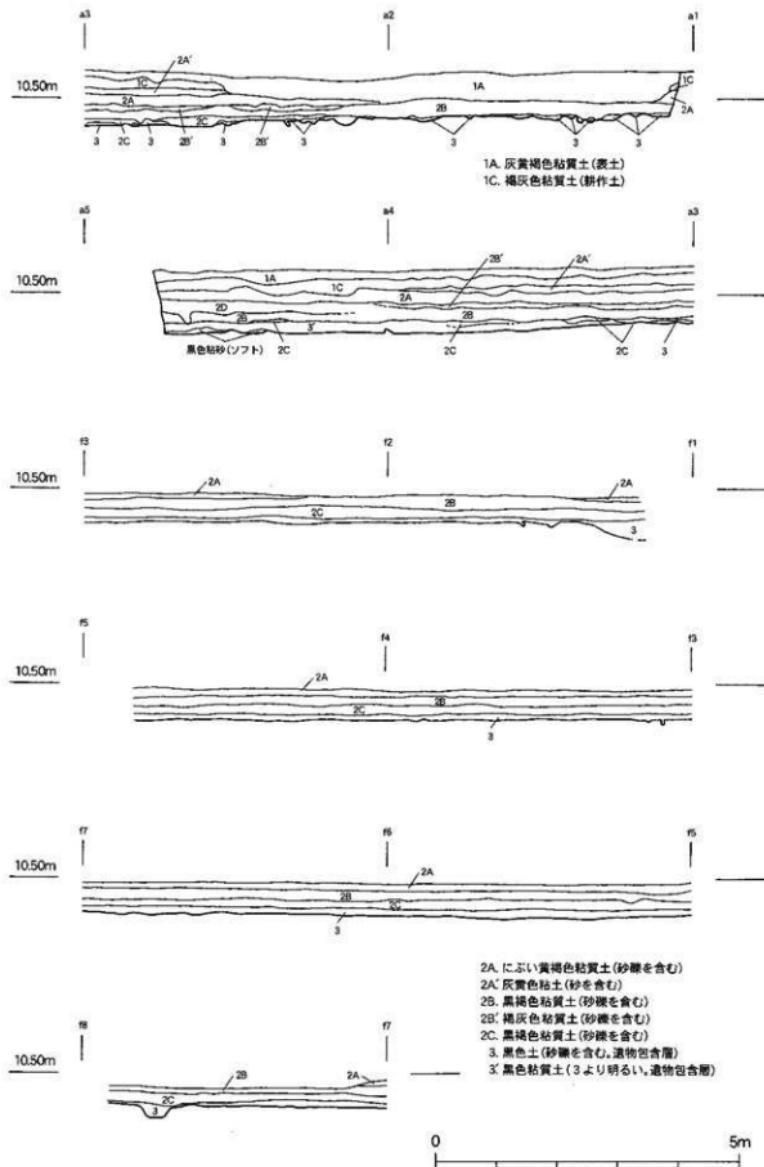


図7 a1-a5・f1-f5ライン土層断面図 (1 : 80)

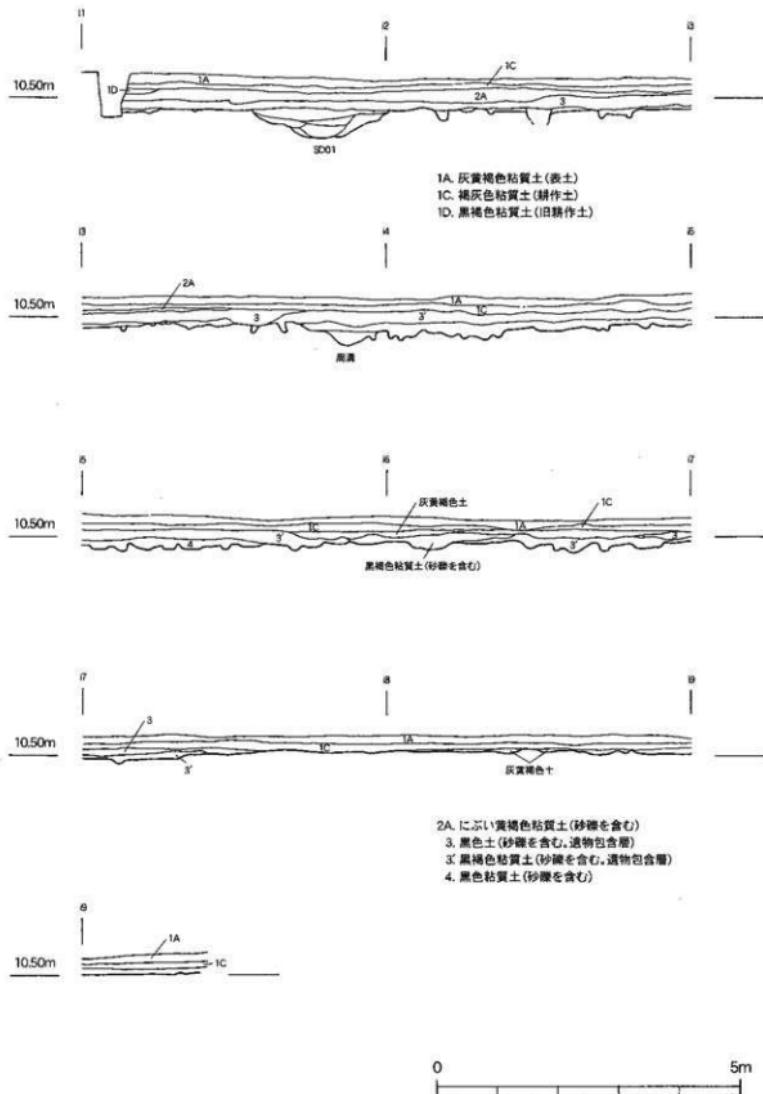


図8 i1-i10ライン土層断面図 (1 : 80)

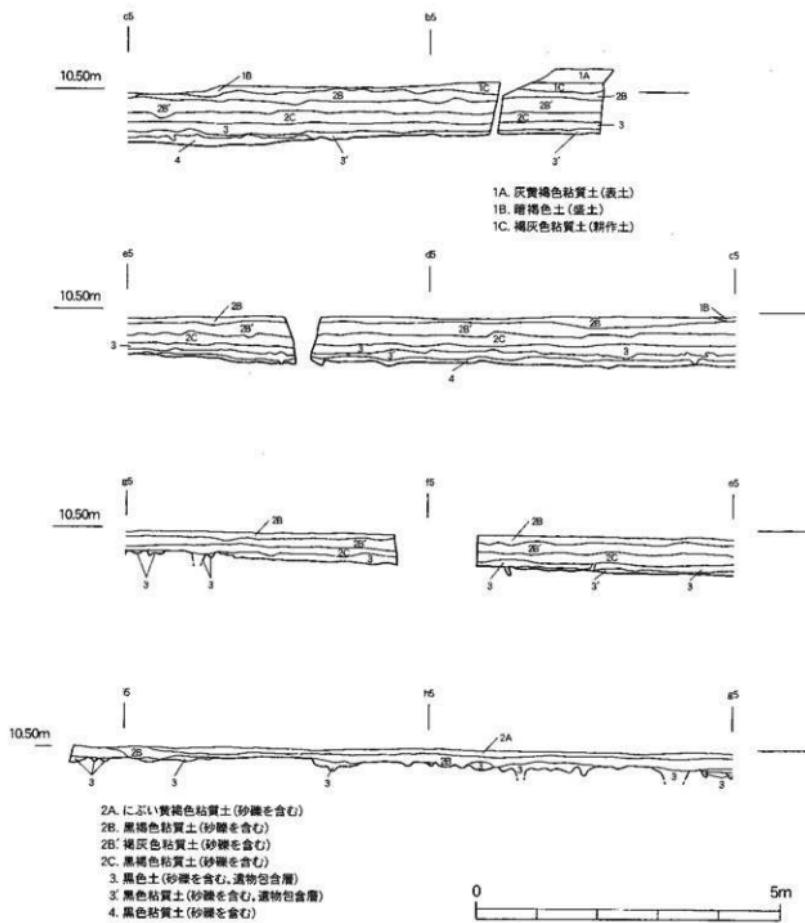


図9 a5-i5ライン土層断面図 (1:80)

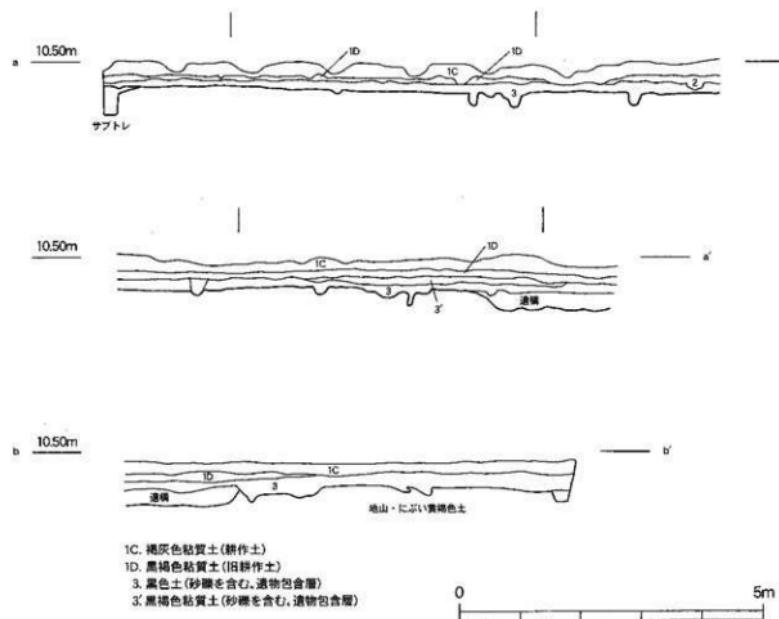


図10 a-a'及びb-b'土層断面図 (1:80)

第2黒色土の確認(図11)

1区では局地的ではあるが、第1ハイカ層の下から第2黒色土層を確認し、ここから縄文時代後期初頭の土器が出土⁵⁾した。2区においてもこの第2黒色土の有無確認のため、最も検出できる可能性の高い古城山山裾のh7-h9grで深掘りを行った。その結果、古城山形成層である布志名層⁶⁾(図11の6層)の上位からの地盤を追っかけて第2黒色土層(図11の4層)を確認した。ここから土器は出土しなかったが、4-2に示す全面使用した磨石及び木根・木切れ等植物質が出土した。

また、これら土層の花粉分析や出土木片の年代測定も同時にを行い、詳細を第4章に掲載しているが、ここでは結果を簡単にまとめておく。

花粉分析による縄文時代後期の古環境復元としては、背後の丘陵にカシ類を要素とする照葉樹林が分布し、丘陵縁辺など開けた場所にはアカマツやナラ類を要素とする遷移林が分布し、特に調査地点近辺ではナラ類が生育していた可能性が高く、ガマ類・カヤツリグサ科・イネ科などの繁茂する湿地が広がっていたと考えられ、1区の縄文時代後期の古環境復元とも矛盾しないものである。

木片の年代測定結果は、 $3770 \pm 45yBP$ (補正¹⁴C) : 2310-2035calBC(暦年代)であった。これは1区縄文集中地10層で得た木材の年代測定結果⁷⁾とほぼ同様の結果であり、図11の4層は1区の第2黒色土層と同じであることが判明した。

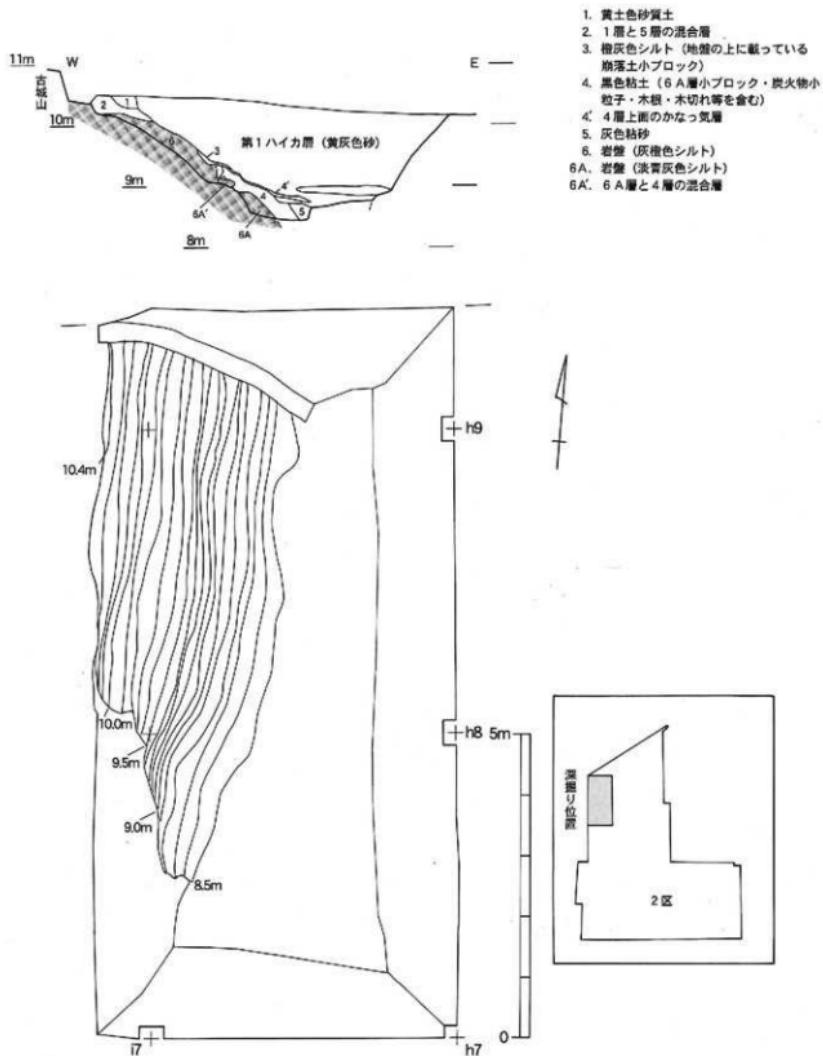
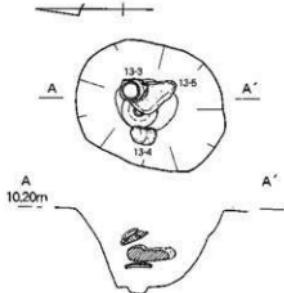


図11 h7-h9gr深掘り状況図 (1 : 80)

遺構と遺物

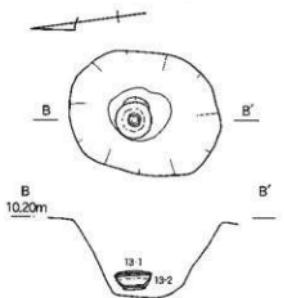


築山遺跡2区では地表面(第1ハイカ層上面)で土壙墓、土坑、井戸、溝、小ピットなどの遺構を検出した。これら遺構は調査区の西寄りで密に確認できたが、東寄りでは少なかった。これは、調査区付近を境に西側に微高地、東側に谷が形成されていたためと考えられる。

以下、遺物が出土した遺構を中心に報告する。なお、小ピットは建物跡や構列などを形成するものが確認できず、遺物もほとんど出土しないことから報告を割愛する。

土壙墓

SK19(図12~14)



SK19はf9gr内標高10.2mで検出した土壙墓で、底面には火葬した骨片を埋納した骨蔵器が埋置してあった。掘方の平面形は梢円形で、断面形は擂鉢状を呈する。長軸63cm、短軸50cm、深さ35cmを測り、底面には直径10~8cm、深さ2cmの小穴を穿ち、長軸の方向はN-18°-Eである。検出時、この遺構の埋め土は周辺の遺構に比べると黒々としていた。土層は骨蔵器を境に2層に分層されるが、全体に骨粉と思われる白色粒子を含んでいる。骨蔵器に埋納されていた骨は一部であることから、この骨粉は残りのものを埋め土に混ぜた可能性が考えられる。

遺物の出土状況は、まず、骨蔵器である須恵器蓋坏(13-1・13-2)は底面に埋置され、その直上に蓋を押さえるように磨石・敲石(13-4)と碟(13-5)が置かれ、その若干上に土師器坏の底部(13-3)が逆位に置かれていた。

13-1は須恵器蓋坏の輪状つまみの付く蓋である。つまみは形骸化した低いもので、口唇部は垂下する。13-2は須恵器蓋坏の高台付坏身である。外反する高台部から内湾して体部は立ち上がる。13-3は土師器高台付坏の底部である。13-4は磨石・敲石として使用されたものと思われる。13-5は碟であるが、若干の磨滅痕が観察される。

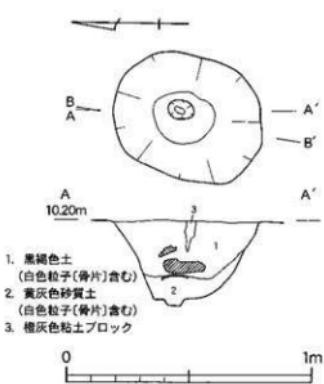


図12 SK19実測図 (1:20)

これら出土遺物から、骨蔵器は8世紀前半に埋納されたと思われる。

骨蔵器の蓋は壺身に密着して出土しており、元位置を保っているものと思われる。骨片は壺身に満杯状態で埋納されたようだが、現状では壺身の口縁部より若干上に出ているものがあるため、また、南側に空間があるため、埋置する際に北側へずれ動いたものと考えられる。骨片の中には数点の木炭が混入していたが、重量は $182\text{g} + \alpha$ （骨粉と化した物）である。骨片を取り除いた壺身底面には砂が敷

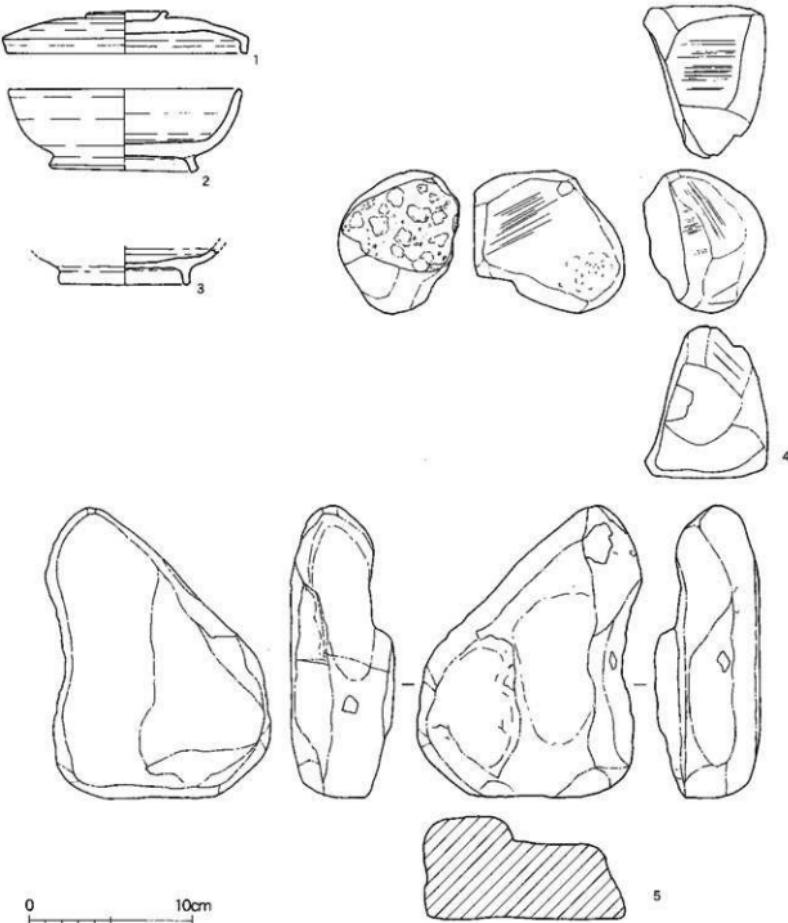


図13 SK19出土遺物 (1 : 3)

かれていた。この砂を地質の専門家である三瓶自然館サヒメルの中村唯史氏に実見していただいた。遺構が掘られている周辺の地山砂とは違い粒子の粒がそろっているので、大井谷川⁸⁾の砂の可能性が考えられるとの所見であった。

骨片は実測後、元鳥取大学医学部助教授の井上晃孝氏に、上にあるものから部位を確認しながら順次取り上げていただいた。この結果、骨片は89番まで個別に番号をふり部位を確認したが、このうち部位が確定したものは76点であった。その中には1000度以上で焼成した時にできるヒビ割れが生じたもの、不完全燃焼のためにコゲが付着したものなどがあった。以下は、井上氏による所見を掲載するが、米田がとりまとめたため、表現において若干ニュアンスの違いが生じている可能性もある。ご了承願いたい。

表2 火葬骨内訳

頭蓋骨	頭骨	11点	前頭骨後面(前頭稜部の一部)、側頭骨の一部、後頭骨、頭蓋底面、頭骨片
	下顎骨	1点	頬棘(オトガイキョク)
	歯牙	1点	右下顎第2大臼歯
脊椎骨	頸椎骨	1点	No.不明の頸椎体の一部
胸郭骨	鎖骨	1点	鎖骨片
	肩甲骨	2点	上角の一部、肩峰付近
	肋骨	10点	右肋骨頭付近、左肋骨頭(No.不明)、肋骨片
上肢骨	上腕骨	1点	左右不明の骨体中央部
	尺骨	4点	右骨体上部、左右不明の骨体上部、左右不明の骨体中央部、左右不明の尺骨下端関節面
	桡骨	3点	左桡骨頭部(関節面)、左右不明の骨体中央部、左右不明の骨体下部の一部
	手骨	8点	左右第1基節骨(親指)、左第2基節骨、左第2 or 3中節骨、左第2 or 3 or 4中節骨、右部位不明の中節骨、左右不明の第2 or 3の中節骨、左右不明の手根骨
下肢骨	寛骨	2点	腸骨片
	大腿骨	3点	左右不明の大腿骨頭、左右不明の上部付近、左右不明の膝窩平面の一部
	脛骨	8点	左骨体の一部、左右不明の骨体中央部上面、左右不明の下端関節面、左右不明の骨体の一部(うち2点は接合する)
	腓骨	3点	左右不明の骨体中央部前面、左右不明の骨体中央部、左右不明の骨体の一部
	足骨	6点	右距骨、左第1未節骨、左右不明の未節骨No.(1-5)、部位不明の未節骨、左右不明の足根骨
四肢骨	不明	5点	上下左右不明の長管骨片
	不明	6点	左右不明の下肢骨片、上下左右不明の骨片

1) 推定性別

- ①歯牙の大きさ：本屍骨の唯一の遺残歯牙である右下顎第2大臼歯の歯冠の大きさは、女性域の大きさである。
 - ②下顎骨：下顎正面部のみ遺残し、後面の頤棘（オトガイキヨク）の突出が弱い。火葬骨とはいえ突出の程度が弱い。
 - ③検出された火葬骨は全体的に細い。
- 以上から当該火葬骨は、女性である可能性が大である。

2) 推定年齢

本屍骨の唯一の遺残歯牙である右下顎第2大臼歯の萌出：一般的には12歳以上（第2大臼歯の歯冠部の摩耗（咬耗）は火傷の為、剥離して咬耗度は不詳）
以上から火葬骨全般的な考察により、一般的には成人域である。

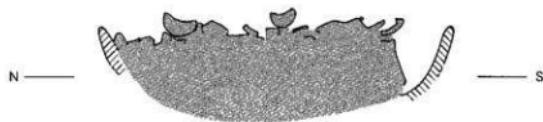


図14 火葬骨実測図 (1 : 2)

土 坑

SK02(図15)

SK02はh2grの標高10.23mの地山面において、SD02やSD03に切られ周溝を切った状態で検出した土坑である。平面形は不整な隅丸方形を呈しており、検出規模は長さと幅ともに100cm程度、深さ46cmで、しっかり掘り込まれた土坑である。

覆土は2層確認でき、ここから須恵器や中世土師器の小片が数点出土している。これら遺物と他の遺構との切り合い関係を勘案し、この遺構の時期は中世と考えられる。

SK04(図15・16)

SK04はh10gr内標高10.3mで検出した土坑である。北側を調査区壁沿いの排水溝を掘削中に上半を壊しており、詳細は不明となってしまっているが、排水溝内でも遺構の凹凸が確認できたので、図15のような平面図が作成できた。

長軸1.6m以上、短軸80cm以上、深さ40cmを測り、長軸はほぼ東西指向する。また、その北寄りに直径65cm以上を測る中心となる落ち込みが存在する。

出土遺物は、土師器の坏身破片1点(16-1)のみで、内外面とも朱塗りが施され、外面下半にケズリ調整が行われており、古墳時代中期～後期の範疇の土器と思われる。ただしこれ1点で遺構の時期決定をするには根拠が乏しいため、時期は不明とする。

SK09(図15)

SK09はh7grの標高10.34mの地山面で検出した土坑である。平面形は径110cm程度の不整な円形で、深さは21cmである。底に明確な下端ではなく曲面を呈しており、中央には径10cmの浅い落ち込みがある。

覆土は2層確認でき、ここから土師質土器の小片が1点出土している。

SK10・11(図15・16)

SK10はf9gr内標高10.1mで、SK11はf8Gr内標高10.1m弱で検出した土坑である。SX03・04などを壊して作られ、覆土も灰色を基調とする当該調査区では新しい遺構である。SK10は長軸95cm、短軸65cm、最深35cmを測り、長軸はN-13°-E方向である。平面形は梢円形を呈するピットである。SK11は長軸1.3m、短軸70cm、深さ20cm強で、長軸はN-6°-E方向である。平面形は瓢箪状を呈し、底面は平坦である。

SK10の出土遺物は皆無であるが、SK11からは須恵器小片1点、中世須恵器小片1点が出土している。16-2は須恵器長頸壺の口縁部である。16-3は亀山系の中世須恵器壺の胴部破片で、外面に格子タタキ目、内面にナデを施している。

以上よりSK11は、16-3がSK06出土25-9と同じ亀山系の中世須恵器であるため、13～14世紀の範疇と考えられ、前記した当該調査区で覆土を灰色を基調とする新しい遺構はほぼ同時期と考えられる。

SK12(図15)

SK12は飛び地のe19grの標高9.97m前後の地山面で検出した土坑である。調査区壁際の検出であり、全容はつかめていないが、平面形は径110cm程度の円形と推定される。深さは16cmと浅く、側壁の立ち上がりも緩く、しっかり掘り込まれた遺構ではない。

覆土は1層で、ここから中世土師器の小片が僅かに出土している。

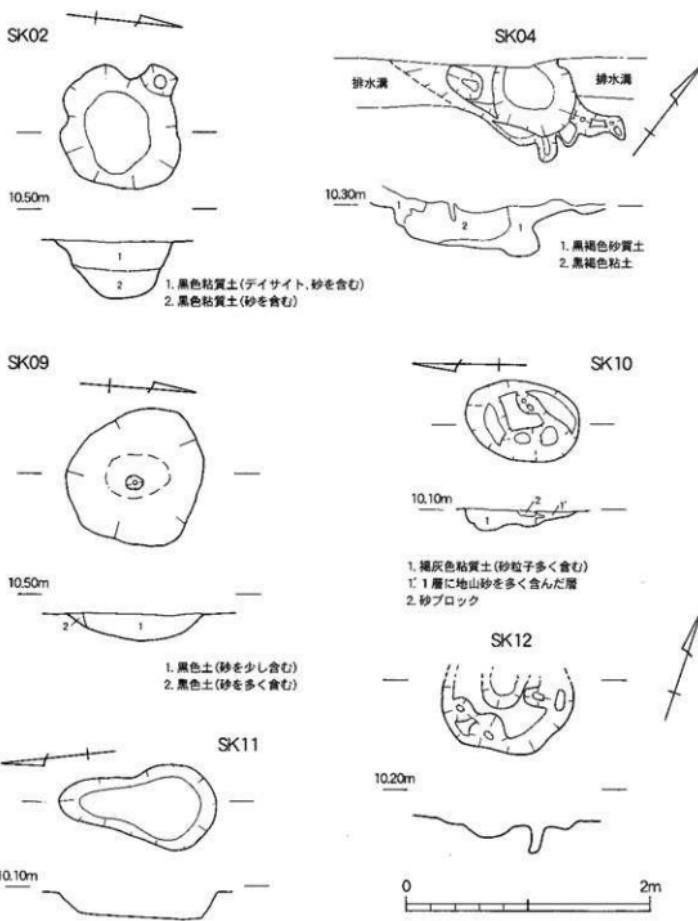


図15 主要土坑実測図 1 (1 : 40)

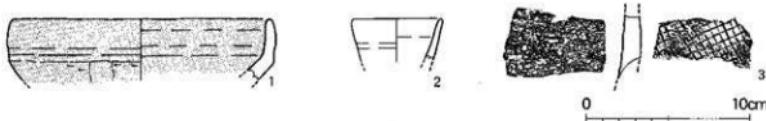


図16 SK04・SK11出土遺物 (1 : 3)

SK13(図17・18)

SK13はi7grの標高10.39mの地山面で検出した遺構である。調査区西壁際の検出であったため一部の検出にとどまった。平面形は不整形で、検出規模は長さ86cmである。平坦な底までの深さは12cmと浅いが、2所でさらに10cm程度掘り込まれた箇所が認められる。

覆土は1層確認でき、ここから18-1に示す土師器の壺が完形で出土している。この壺は内外面とも赤色塗彩が施されており、意図的に遺構中央付近で口縁を上にした状態で供えられた可能性もあるので、SK13は祭祀遺構の可能性もある。この土器は9世紀頃のものであり、遺構の時期を示すと考えられる。

SK14(図17)

SK14はi6grの標高10.35mの地山面で検出した土坑である。調査区西壁際の検出であり一部の検出にとどまったが、平面形は不整形ではあるが長さ200cm、幅100cm前後の方形を呈すると思われ、主軸はN-23°-Eを指向する。また、深さは20~25cmを測り、側壁の立ち上がりは急でしっかりと掘り込まれた土坑である。なお、覆土から遺物は全く出土しなかった。

SK14の1m東には同規模のSK15があるが、これらは形状から墓坑の可能性がある。

SK15(図17)

SK15はh6grの標高10.28mの地山面で検出した土坑である。平面形は長軸がN-5°-Eを指向する長方形で、検出規模は長さ192cm、幅54~72cmである。底は曲面を呈しており、深さは12cmと浅い。

覆土は1層で、ここから須恵器や土師器の小片が少量出土している。これらから遺構の時期は断定できないが、遺構の規模や形状からSK14と同様に墓坑の可能性が考えられる。

SK17(図17)

g8gr内標高10.1mで検出したピット状の土坑である。土層は整然と堆積しておりSK05の土層と似た灰色を基調とするもので当該調査区では新しい遺構のひとつである。平面形はほぼ円形、断面形は逆台形を呈し、直径70cm、深さ50cmを測る。

出土遺物は、土師器壺小片2点、須恵器壺小片2点のみで実測に基えるものは皆無であり、時期決定するには根拠の乏しい状況である。

SK21(図17)

SK21はh1grの標高10.28mの地山面で検出した遺構である。平面形は不整形ではあるがN-2°-W方向に長く、検出規模は長さ165cm、幅60cm前後で、深さは10cm程度の浅い遺構である。

覆土は1層のみ確認でき、ここから須恵器壺の胴部片が1点出土している。

SK22(図17・18)

SK22は飛び地のd18grからd19grにおいて、SD13に切られた状態で確認した遺構である。標高9.85mの地山面での検出で、平面形は不整形であるがN-30°-W方向に長く、検出規模は長さ212cm、幅150cm前後、深さ23cmである。底は中央に向かい緩やかに落ち込み、側壁の立ち上がりも緩やかである。

覆土は2層確認でき、ここから18-2に示す6世紀後半の須恵器の壺身が1点出土している。比較的大きな破片であり他の遺物が混じっていないことから、遺構の時期を示すと思われる。

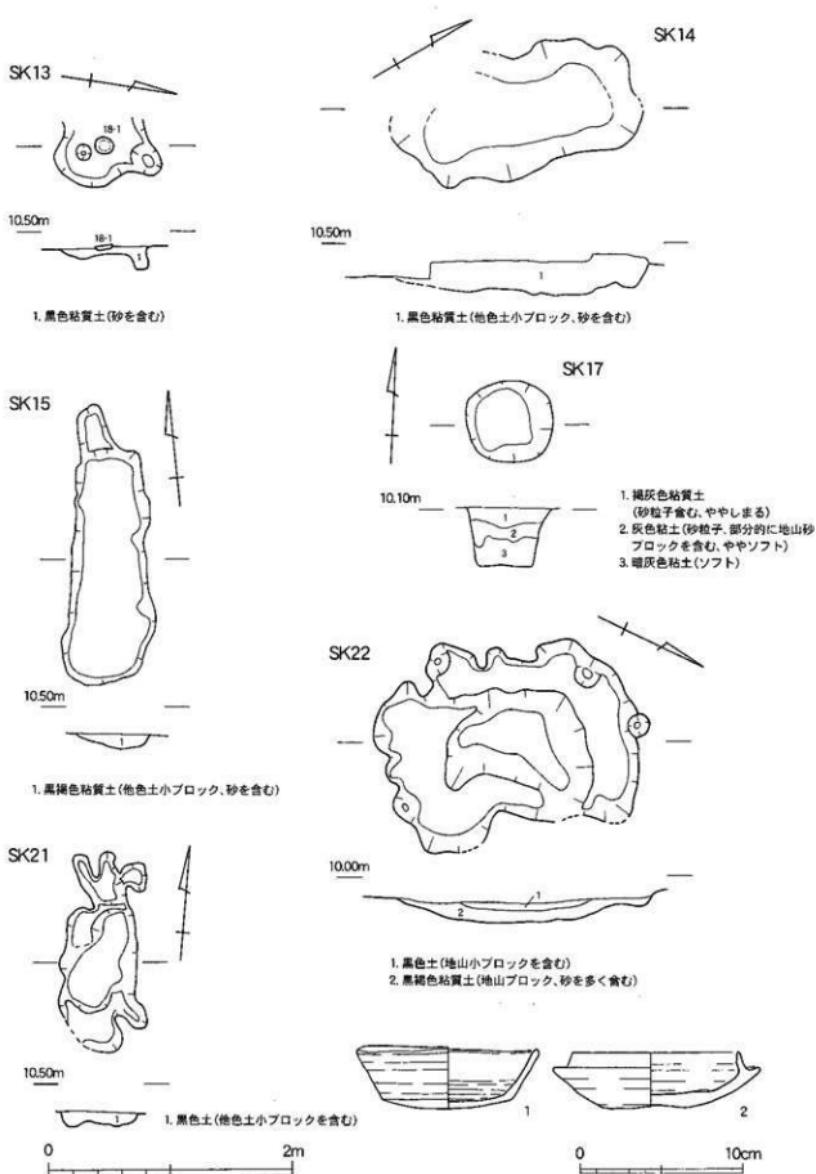


図17 主要土坑実測図 2 (1:40)

図18 SK13・SK22出土遺物 (1:3)

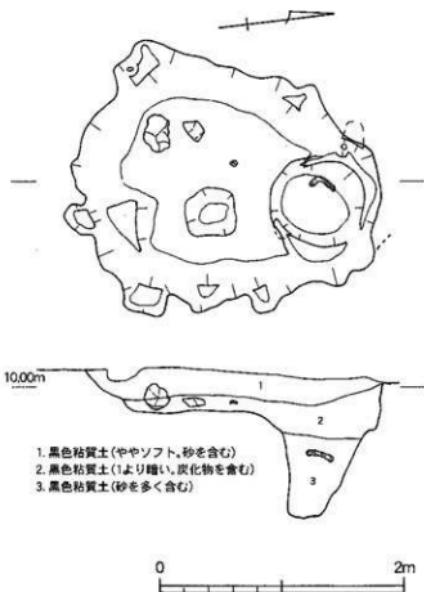


図19 SE01実測図 (1 : 40)

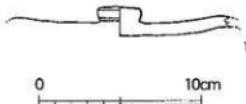


図20 SE01出土遺物 (1 : 3)

井戸

SE01(図19・20)

SE01はg4grからh4grにかけての標高10.16mの地山面で検出した井戸である。平面形はN-18°-E方向に長軸をとる楕円形で、検出規模は長径250cm、短径200cmである。底は遺構の中央から南寄りにかけては標高10.30m付近で概ね平坦で、ステップ状になっているが、遺構の北寄りではさらに90cm程度掘り込まれ、水溜部を形成しているようである。

なお、調査時に20~30cmの自然石が上層で数点出土したが、SE01は素掘りの井戸であった可能性が高い。

覆土は3層確認でき、ここから20-1に示す蓋のほか、須恵器、土師器、中世土師器の小片がビニール袋半分程度出土したことからこの井戸の時期は中世と考えられる。

SE02(図21)

SE02はh3grの標高10.17mの地山面において、周溝を切った状態で検出した井戸である。平面形は長径320cm、短径220cmの楕円形でN-8°-W方向に長軸をとる。掘り進めると北寄りと南寄りの2箇所で円形の落ち込みが確認できた。北寄りの落ち込みは上端径90cmで、下端径60cmを測り、標高9.54mで平坦な底に至る。南寄りの落ち込みは上端径130cm、下端径65cmを測り、平坦な底の標高は8.90mである。

調査時にこれら二つの落ち込みの切り合いは観察出来なかったことから、一体の遺構と考えられる。なお、石や板などが出土しないことから、SE02は素掘りの井戸であった可能性が高い。

覆土からは須恵器や中世土師器の小片が少量出土している。これら出土遺物から、この井戸の時期は中世と考えられる。

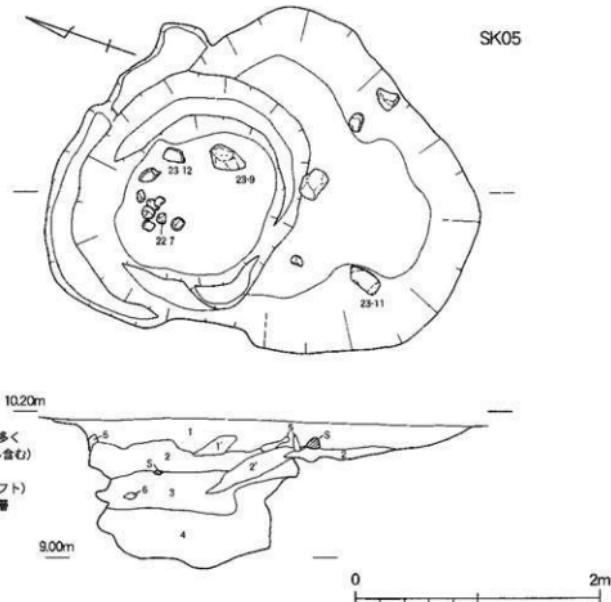
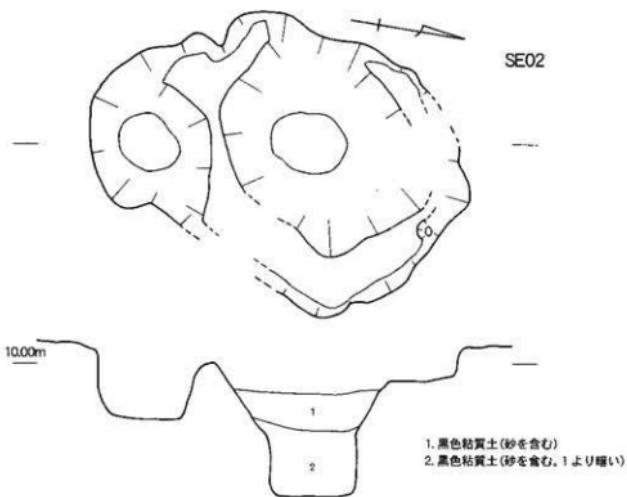


図21 SE02・SK05実測図 (1 : 40)

SK05(図21~23)

SK05はf 8-9gr内標高10.1mで検出した素掘りの井戸である。SD15・SX03・04などを壊して作られ、覆土も灰色を基調とする当該調査区では新しい造構のひとつである。全体の掘方は長楕円形を呈し、長軸3.55m、短軸2.85m、南側のステップ上深さ30cmを測り、長軸はN-20°-Wを指向する。井戸本体は掘方の北寄りにあり、直径2×1.7mの楕円形を呈し深さ1.2mを測る。幅広の底面から直立気味に壁面が立ち上がっている。

土層は整然と自然堆積しており、出土遺物は、土師器・須恵器・青磁碗の破片が中袋(25×15cm)1袋分、10~30cm大の碟及び石器が20点近く1層から4層にかけて出土している。3・4層からは板状木製品・角材・角杭なども出土している。

22-1は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行タタキ目、内面は同心円タタキ目が施されている。22-2~22-6は土師器である。2~5は坏であるが、2は内外面とも朱塗りの施された器壁は薄く堅緻なもので、3は風化が著しいが器壁から底部の境の稜は明瞭である。4は口縁部が開き、5は体部が湾曲するが、口縁部はあまり開かないで、底部は回転糸切りを施す。6は器壁がやや厚めの小皿で、口唇部は矩形を呈する。

22-7~23-12は石製器で、7~9は砥石、10は磨石、11・12は台石である。7は弥生時代の打製石斧を後世に再利用したものと思われ、研磨痕、刃傷痕が観察される。8・9・12は熱を受けている。

22-13~22-15は木製品で、13は板材、14は角材、15は角杭である。

以上よりこの造構は、土師器の年代から井戸が機能していたのは13~14世紀、廃棄されたのは15世紀の範疇と考えられる。また、1層から唯一出土した青磁碗破片はSK06の2層出土の破片(25-7)と接合した。

SK06(図24~26)

g8gr内標高10.1mで検出した造構である。SD09などを壊して作られ、覆土も灰色を基調とする当該調査区では新しい造構のひとつである。平面形は細長い小判形を呈し、南側では若干袋状を呈するようであるが、他の3辺は底面から直立気味に立ち上がる。長軸3.7m、短軸2.1m、深さ1.15mを測り、長軸はN-10°-Eを指向する。

西側の鉤の手状の平面部分は同時に検出され、1層が堆積しており、同時期に掘られたピット群である。付近には同様な覆土をもつSK17及びg8gr-P1があり、何らかの関連が想定される。

土層は整然と自然堆積している。3層中位から下層には、木の枝が集中して出土する箇所、ワラ状の植物質、木切れ・木の葉の植物質を薄く敷き詰めた箇所などが検出された。

出土遺物は、土師器・土師質土器・須恵器・中世須恵器・白磁・青磁が大袋(38×26cm)2/3袋分、石製品(砥石・台石)・木製品(曲物・丸杭・薄板材・生木片)・松ぼっくりなどである。

25-1は須恵器高台付坏の底部で、低い高台が周縁に付く。25-2~25-6は土師器である。2~5は坏の底部で、底径がやや小さく回転糸切りを施し、体部の立ち上がりは開くようである。6は小皿であり、底部から体部への稜はあまくなっている。25-7は龍泉窯系の青磁碗で、内面に飛雲文が描かれている。25-8は土師質土器で高台付鉢かと思われる底部破片である。25-9は亀山系の中世須恵器甕の胴部で、外面に格子タタキ目、内面に丁寧なナデを施す。25-10は白磁碗の底部の削り出し高台部である。

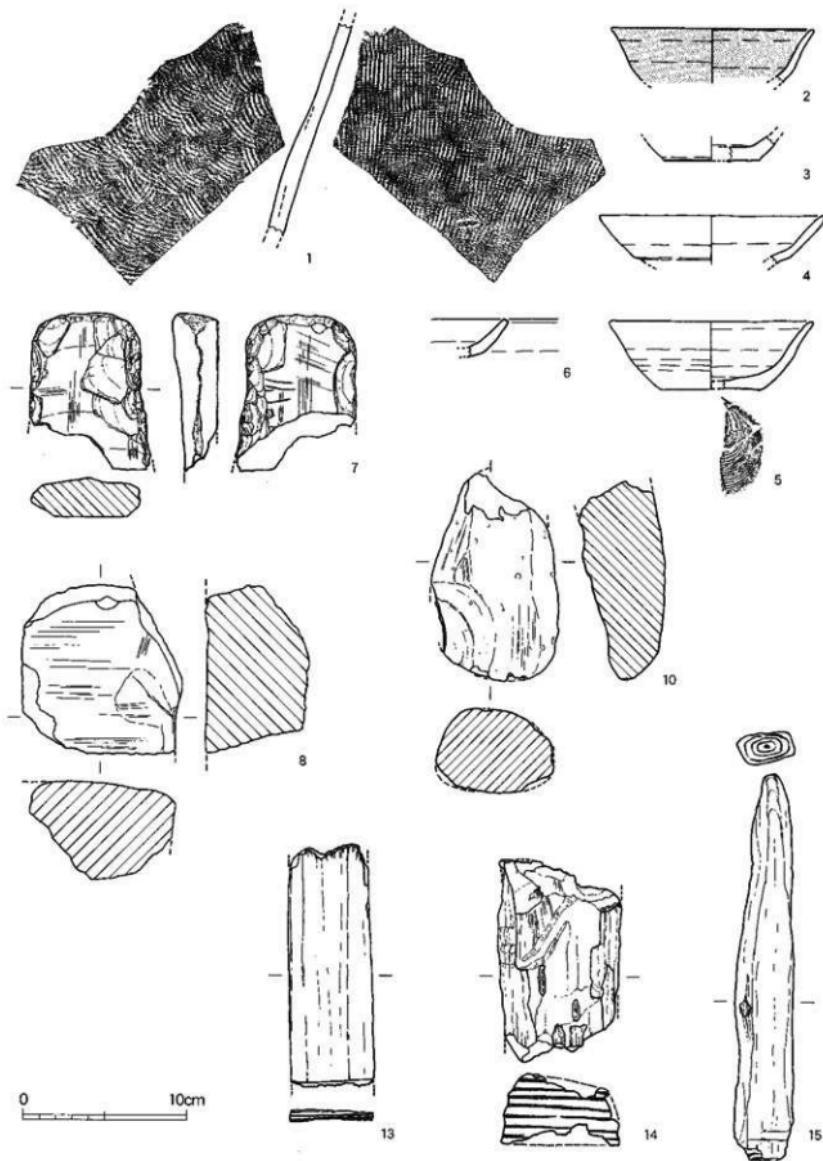


图22 SK05出土遗物 1 (1 : 3)

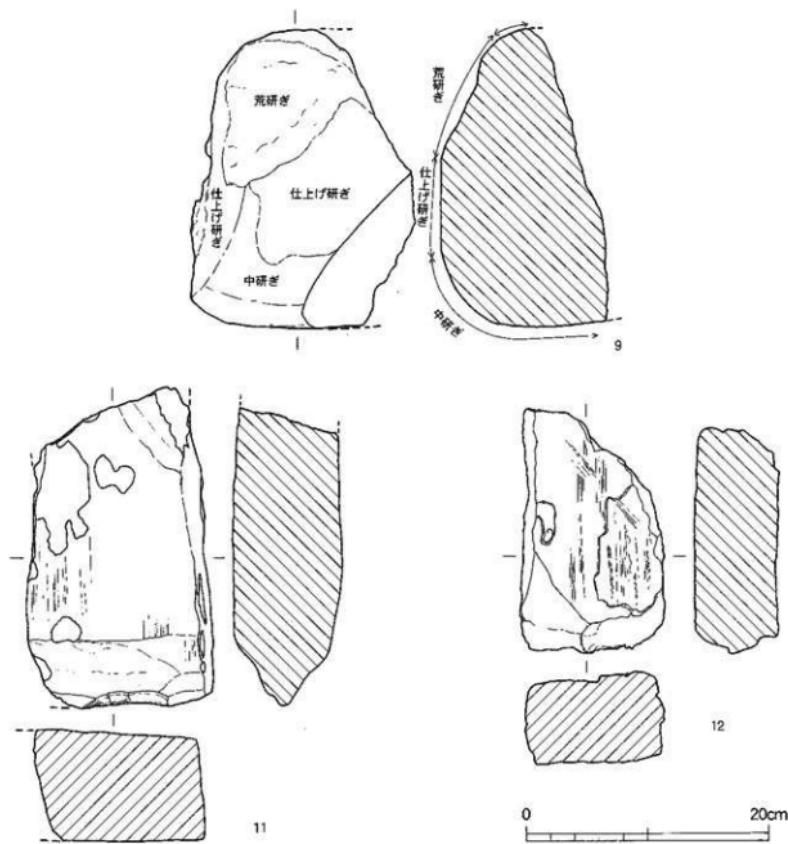


図23 SK05出土遺物 2 (1 : 4)

25-11～26-15は石製品で、11は砥石、12～15は台石で、13は熱を受けている。

25-16～25-18は木製品である。16は曲物の底板で側壁を留める木釘が1点残存している。内面の黒色塗りは漆と思われる。17は薄い板材、18は丸杭である。

以上より当該遺構は、井戸状の遺構と考えられ、12世紀後半～14世紀の範疇に機能し廃棄されたものであろう。また青磁碗(25-7)はSK05との接合資料である。

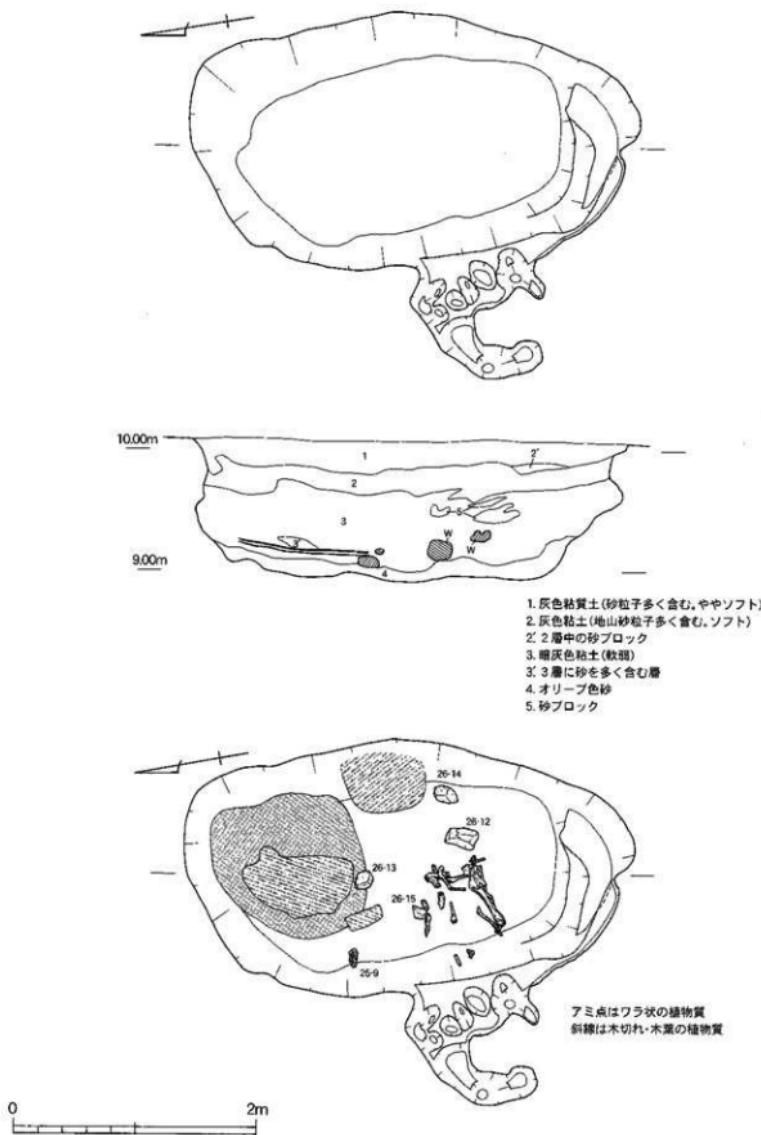


図24 SK06実測図 (1 : 40)

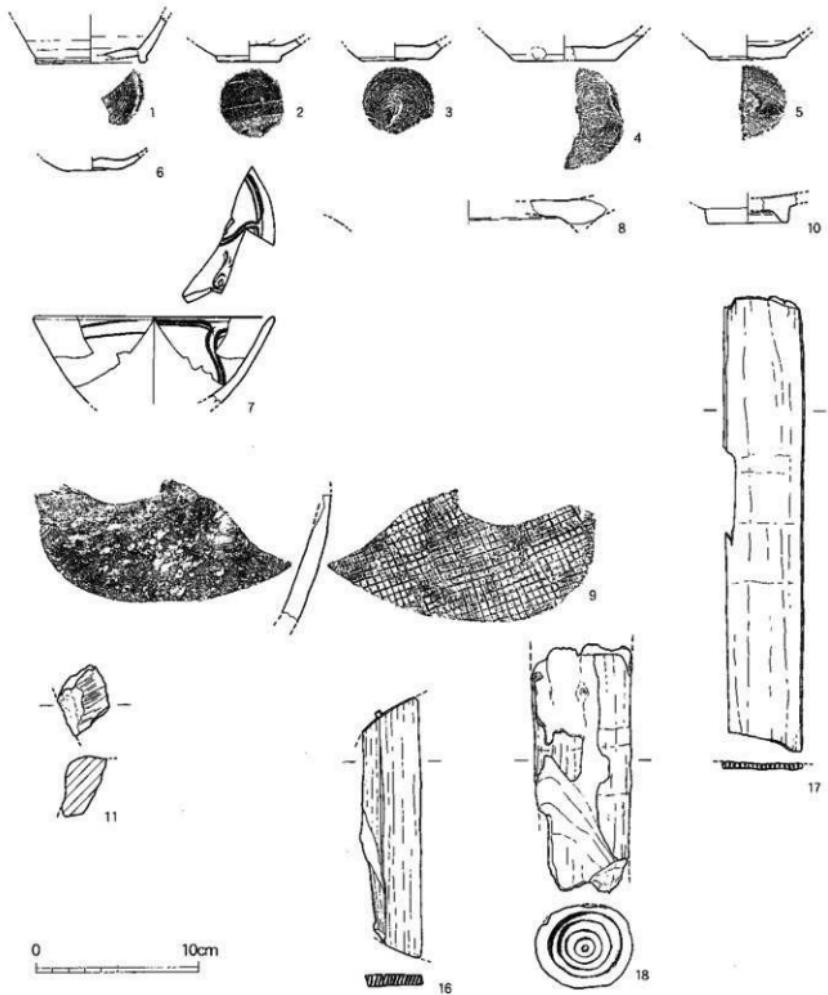


図25 SK06出土遺物1 (1:3)

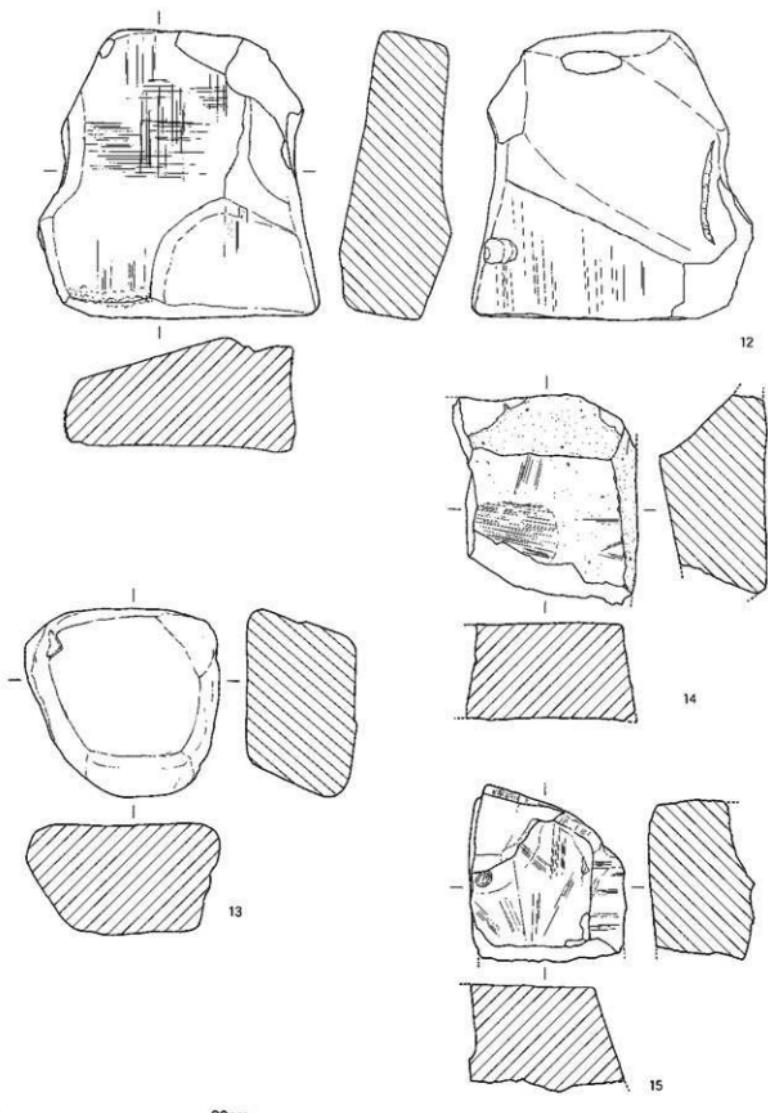


図26 SK06出土遺物2 (1:4)

SK07(図27~29)

SK07はg6grの標高10.11mの地山面で、SD09を切った状態で検出した井戸と思われる遺構である。調査時はSD09との位置関係から一連の遺構である可能性も考えたが、他に積極的な根拠もないためここでは単独遺構として報告する。

この遺構の平面形はN-10°-E方向に長軸をとる橢円形であり、検出規模は長径280cm、短径215cmである。底は標高9.30m付近で平坦で、湧水が著しい。また、側壁はしっかりと掘り込まれているため勾配が急で、一部に水の侵食によってえぐられた箇所も認められる。検出時の観察では不明瞭であったが、断面を観察すると、遺構の西の縁に下端径60cmの土坑が本体遺構を切っている様子が確認できた。この土坑の底も平坦で標高は9.60mである。

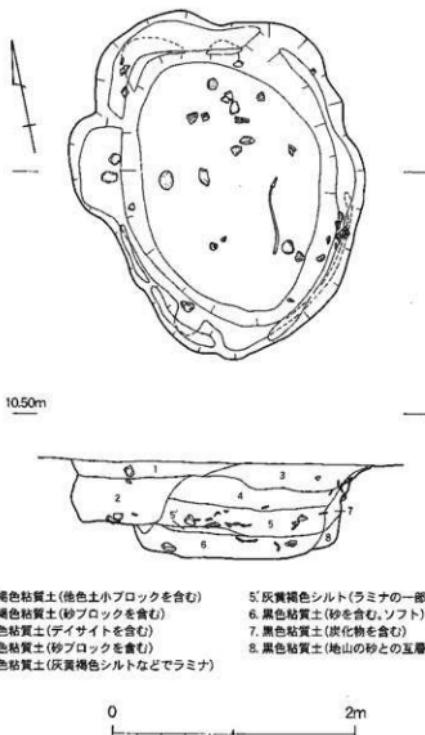


図27 SK07実測図 (1:40)

覆土からの出土遺物は2区内の遺構としては比較的多く、ビニール袋3袋分の量であった。これらの内訳は須恵器、中世土師器、陶磁器、土製品、石製品、鉄滓などであるが、中世土師器片が大半を占め、その他のものは少量の出土にとどまった。これらのうち、実測に堪えるものを28-1~29-5に図示した。

28-1~28-7は皿で28-8~28-15は壺である。これらは底部をやや絞り、器壁は体部でやや膨らんでいる。また、底部の切り離しはいずれも回転糸切りであり、その痕跡が底面に残っている。これら皿と壺は、いずれも13世紀のものと考えられる。28-16は土錘、28-17は砥石、29-1は羽口、29-2~29-5は鉄滓である。

以上、出土遺物からこの遺構の時期は13世紀と考えられる。また、羽口や鉄滓が出土していることから、この遺構が鍛冶関連で使用されたことや、付近で鍛冶が行われていたことが推定できる。

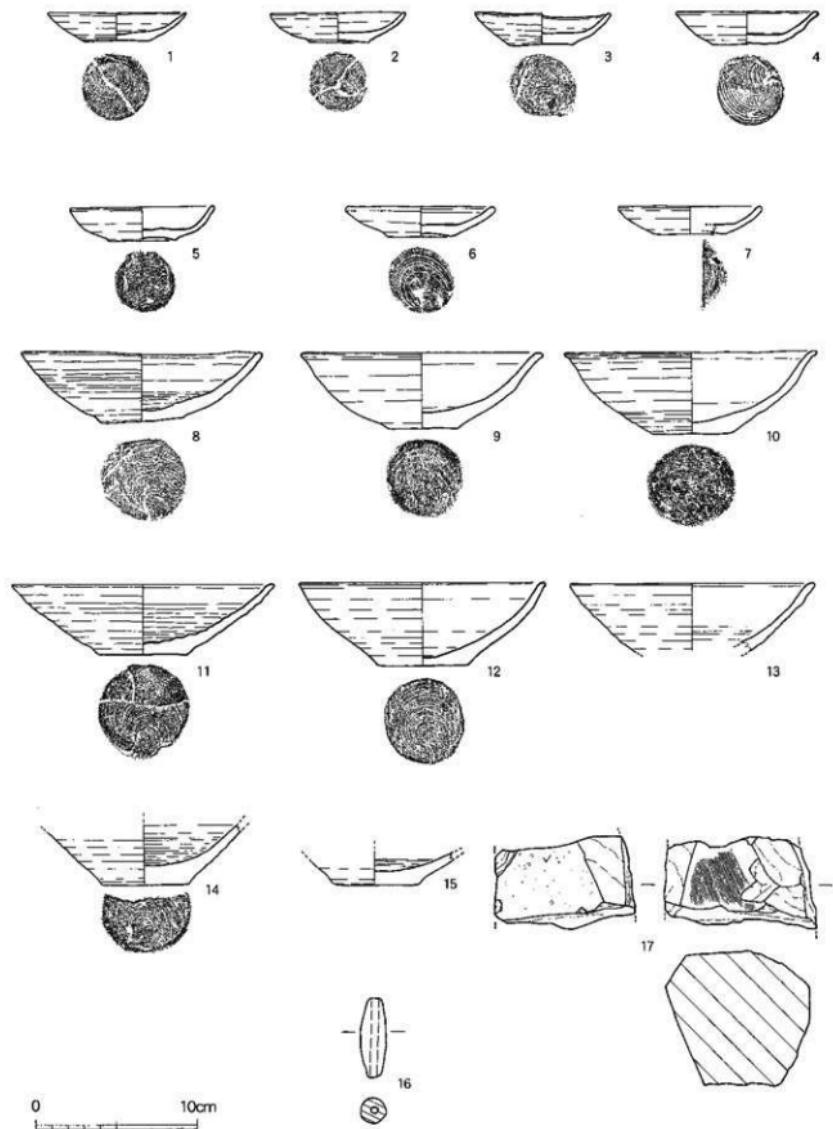


図28 SK07出土遺物1 (1:3)

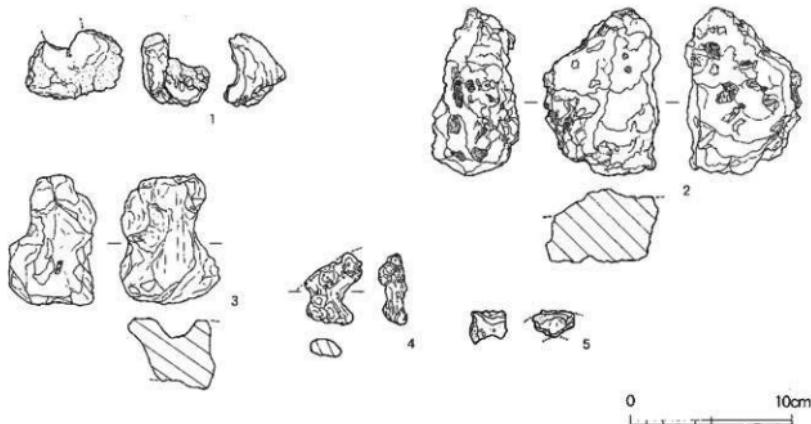


図29 SK07出土遺物2 (1:3)

SK08(図30・31)

SK08はf7grの標高10.05mの地山面で検出した井戸である。平面形はN-66°-W方向に長軸をとる梢円形で、検出規模は長径145cm、短径130cm、深さ97cmである。平坦な底は径約80cmの円形を呈し、涌水も多いが、水溜の施設は見つからなかった。また、側壁の立ち上がりは急で、一部に浸食でえぐられた部分も観察できた。

覆土からは土師器や須恵器の小片が少量出土し、実測に堪えるものを30-1に示した。これは土師器の口縁部と思われるが器種や時期は不明である。また、35cm大の自然石も出土したが、この井戸が石組みなどの地下施設を有していたとは考えにくく、素掘り井戸の可能性が高い。なお、時期については中世土師器が出土しないことから、これより古い可能性がある。

SK20(図30・31)

SK20はi2grの標高10.41mの地山面において、周溝を切った状態で検出した井戸と考えられる遺構である。一部が調査区西壁にかかっているが、平面形は径125cm程度の円形と思われ、深さは85cm以上である。側壁の立ち上がりは急であるが、部分的にステップ状に勾配を緩める箇所も認められる。

覆土は3層観察でき、ここから須恵器、土師器、中世土師器の小片が少量出土し、実測に堪えるも



図30 SK08・SK20出土遺物 (1:3)

のを30-2に示した。13世紀の皿で遺構の時期を示すと考えられる。なお、この遺構は部分的な調査にとどまっているが、素掘り井戸の可能性が高いと思われる。

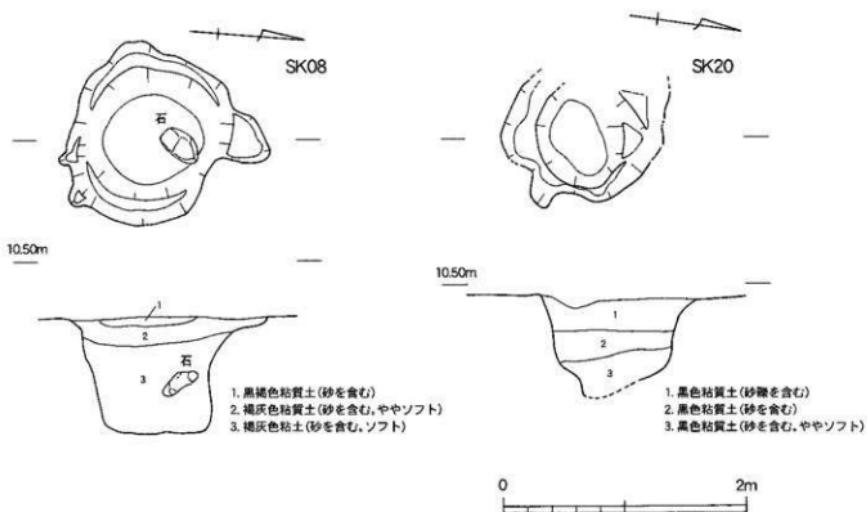


図31 SK08・SK20実測図 (1 : 40)

溝状遺構

周溝(図32・33)

この遺構はh2~h4gr及びi2~i4grの標高10.23~10.38mの地山面で検出した溝状遺構で、径約8mの円形に巡っていることから周溝と名付けた。また、SK02、SE02、SK20、SD02、SD03に切られていることから検出段階で、当調査区内でも比較的古い遺構であることが分かっていた。

検出規模は上幅40~130cm、下幅15~60cm、深さ10~30cmの溝が円形に巡り、内径6.8m、外径8.0mの円形の遺構を形成している。遺構の東側では溝が途切れ、30cm幅で陸橋状になっている箇所が認められる。調査時にはこの遺構が古墳である可能性も考慮し、円の内外部で精査を行った。その結果、内部で主体部などの痕跡は認められなかった。また、外部であるh4grの西寄りで須恵器の壺胴部片が地山直上の遺物包含層から集中して出土したが、遺構を覆う包含層中の出土であることから、この遺構との関連は不明である。

周溝の覆土からは、特にi3grにおいて完形に近い須恵器が出土したほか、土師器の小片が僅かに出土しており、実測に堪えるものを33-1から33-12に示した。33-1~33-12はすべて須恵器である。33-1~33-3は高坏で、いずれも脚部に2段2方スカシが入る。33-4~33-7は蓋で、33-4は輪状つまみが付き、33-5~33-7は坏の蓋である。また、33-8は坏身、33-9は瓶、33-10は直口壺、33-11は長頸壺である。33-12は壺底部と思われ高台が付く。これらはいずれも7世紀頃のものであり、遺構の時期を示

すと考えられる。

以上のことから、この造構は古墳時代後期末の小円墳である可能性は残るもの、石室の痕跡など積極的な根拠は確認できていないので断定は避けたい。

なお、この周溝の覆土については、花粉分析や種実分析を委託で行い古環境復元を試みた。その結果、造構周辺にはキク科やイネ科の草本が茂り、ソバが栽培されていた可能性があることが分かった。

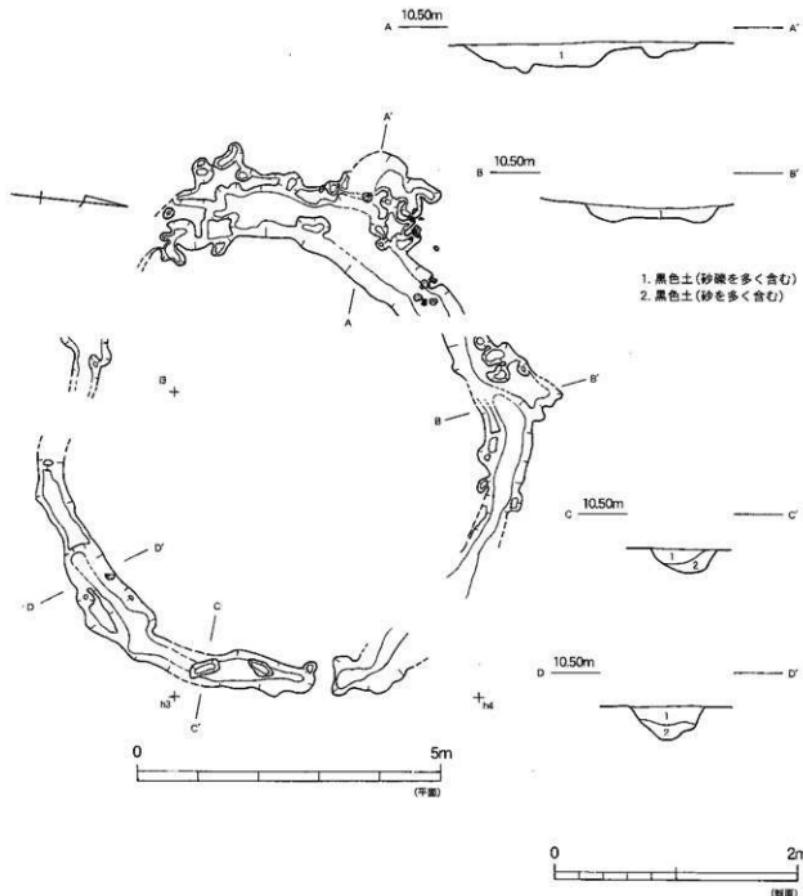


図32 周溝実測図 (1:80, 1:40)

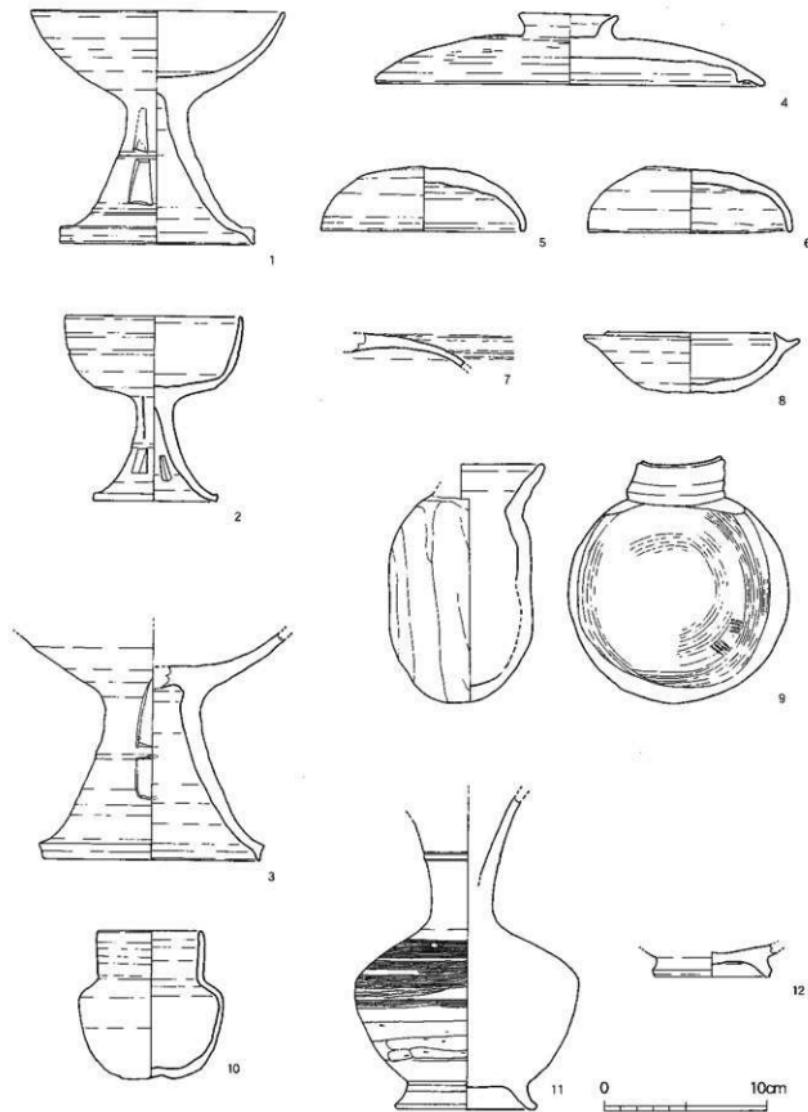


図33 周溝出土遺物 (1 : 3)

SD01(図34・35)

SD01はhlgrからilgrにかけての標高10.39mの地山面で検出した溝である。調査区南西隅での検出であったため長さ7mの検出にとどまったが、この範囲では上幅165～215cm、下幅40～75cm、深さ45cmを測る規模であり、しっかりと掘り込まれた断面U字形を呈する。また、概ねN-58°-W方向に延びているのであるが、僅かに湾曲が認められ北東に振らむ。

覆土は5層観察でき、堆積の様子から何度も掘り返しが行われたと考えられる。

なお、遺物は須恵器と土師器の破片が少量出土しており、実測に堪えるものを35-1に示した。須恵器の口縁部であるが器種や時期ははっきりしない。

しかし、覆土が周溝のものと類似し距離も3mと近いため、同時期頃に何らかの関連をもつて掘削された遺構である可能性はある。

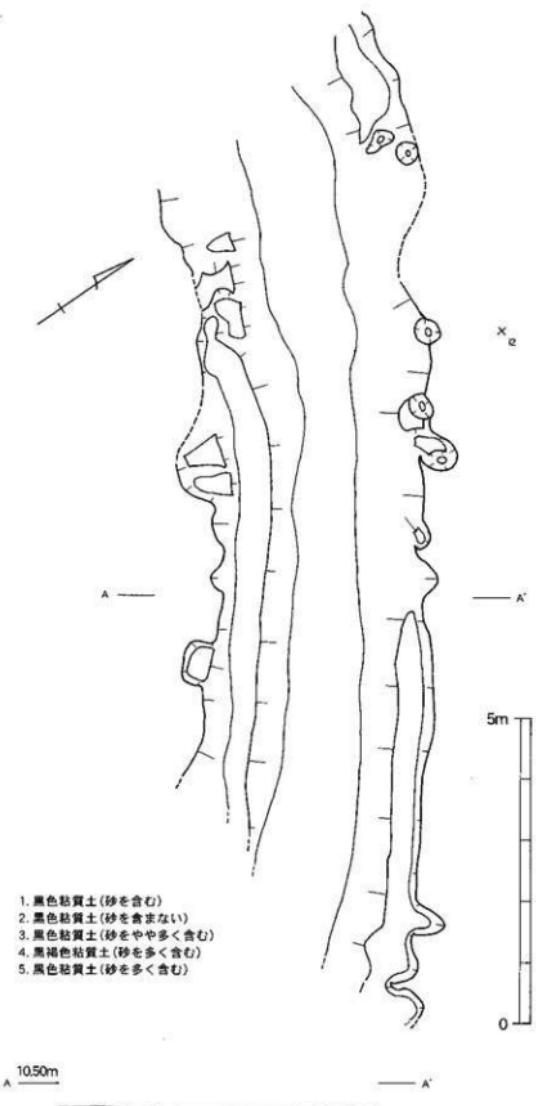
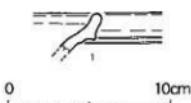


図34 SD01実測図 (1:80)

図35 SD01出土遺物 (1:3)



SD02・SD03(図4)

SD02はh3・h4grで、SD03はh2gr及びh4～h6grの地山面で検出した溝状遺構である。両者は共に周溝を切っており、さらにSD02がSD03を切っている。また、SD02は上幅70～100cm、SD03は上幅50cm前後で、共に概ねN-5°-Eを指向しいずれも深さが10cm前後と浅い。

SD02の覆土は灰色がかった新しい印象を受けるものであり、ここから土師器、須恵器、中世土師器の小片が少量出土している。また、SD03の覆土は暗褐色を呈しており、ここから中世土師器などの小片が僅かに出土している。これら出土遺物から、いずれの遺構も時期は中世以降と考えられる。

SD04(図36)

SD04はa1・a2・b1gr内標高10.1mで検出した溝状遺構である。SD04に直角に位置する溝状遺構3条を壊して作られている。南壁土層断面図(図6)では2B層中から検出されており、覆土も灰色を基調とする当該調査区では新しい遺構のひとつである。両端は調査区外へと延び、現存長9.3m、幅40cm、深さ10cmを測り、軸はN-35°-Eを指向する。断面はゆるいU字状を呈する。出土遺物は皆無である。

SD05(図36)

SD05はc2～c4gr及びd1・d2gr内標高9.8～10mで検出した溝状遺構である。長さ15m、幅15～45cm、深さ5cmを測り、軸はN-30°-Eを指向する。断面はゆるいV字状を呈し、浅く調査区内で完結するが、北北東へ地形が下がる付近で北側は収束しているようである。出土遺物は皆無である。

SD06(図36)

SD06はd3・d4gr、e1～e4gr、f1gr内標高9.7～9.9mで検出した溝状遺構である。現存長18.4m、幅80～110cm、深さ5～25cmを測り、軸はN-15°-Eを指向する。北側は北北東へ地形が下がる付近で収束し、南側は調査区外へと延びている。底面はほぼフラットで壁面は直立気味に立ち上がる。出土遺物は皆無である。

SD07(図4)

SD07はf3・g4・g5・f6・f7grなどの地山面で検出した大きく湾曲する溝である。調査区内で長さ31mにわたり検出しておらず、上幅40cm前後、下幅30cm程度、深さ30cm前後を測る。断面はU字形で側壁は垂直に近く、しっかり掘り込まれた溝である。覆土は2層確認でき、須恵器の小片が僅かに出土しているが、遺構の時期決定には至っていない。

このSD07の性格は不明であるが、低地と微高地(図5参照)の境に巡らされていることから、何らかの区画溝である可能性は指摘できる。

SD08(図36)

e9・e10gr内標高10.15～10.2mで検出したゆるやかに湾曲する溝状遺構である。覆土が灰色を基調とする当該調査区では新しい遺構のひとつである。現存長4.8m、幅30～80cm、深さ5～15cmを測り、軸は南でN-10°-Eから東へ湾曲してN-30°-Eを指向し、調査区外へと延びていく。断面はゆるやかなU字状を呈する。収束地点から延長1.2m南に位置するe9gr-P1はSD08と同じ覆土であり、何らかの関連がある遺構と考えられる。

出土遺物は、土師器の小片が9点のみで実測に堪えるものは皆無であり、時期決定するには根拠の乏しい状況である。

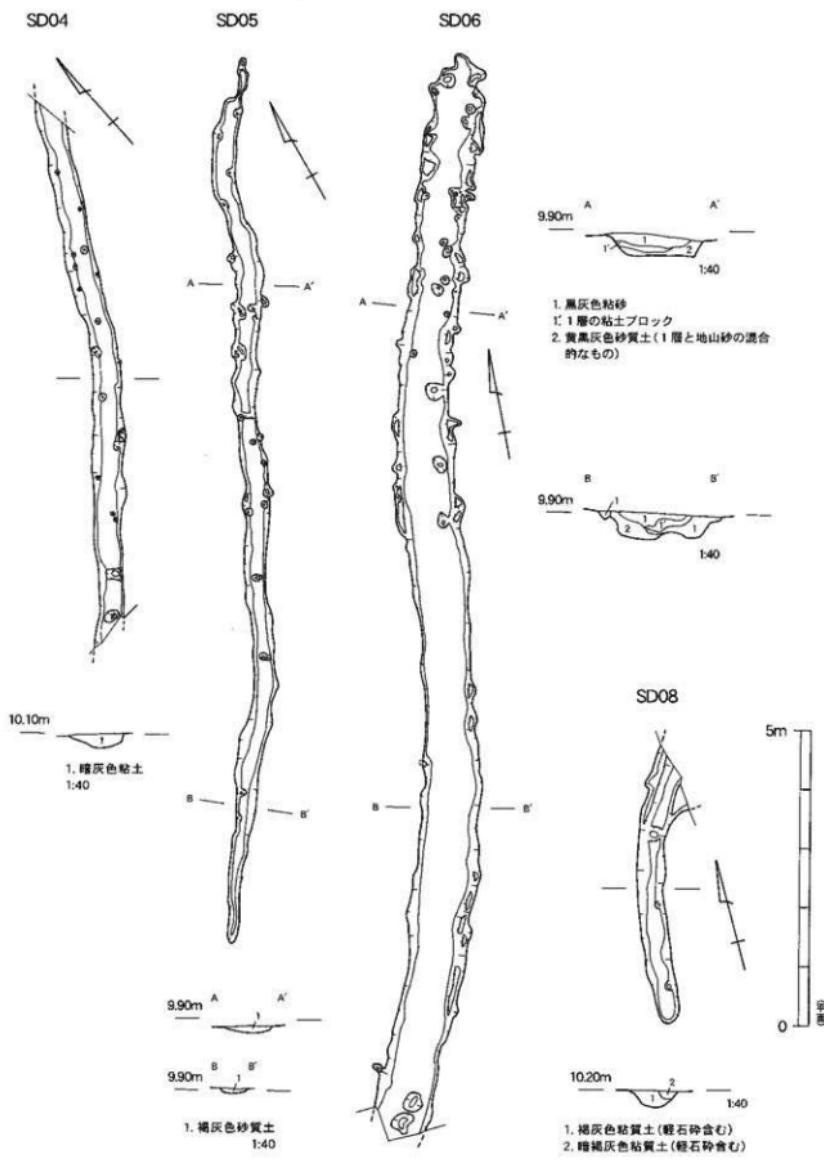


図36 SD04・SD05・SD06・SD08実測図 (1:80、1:40)

SD09(図37・38)

SD09はg6～g9grの標高10.14mの地山面でSK06・SK07などに切られた状態で検出した溝状を呈する遺構である。g6・g7grでは方形に巡り、N-8°-Eを指向する西側の辺にあたる溝はg9grまで延びている。検出規模は概ね上幅約50cm、下幅約30cmであるが、SK06やSK07と切り合う箇所では上幅が大きく広がっている。また、深さは10cm前後と浅く、底には凹凸を有している。

覆土は1層のみ確認でき、ここから須恵器や土師器の小片が少量出土しており、実測に堪えるものを38-1・38-2に示した。38-1は須恵器蓋坏の坏身であり、38-2は土師器壺の口縁部である。このように古い遺物が出土し、切り合い関係にあるSK06やSK07が13世紀頃の遺構と考えられるため、SD09の時期はこれ以前と推定できる。なお、遺構の性格については不明である。

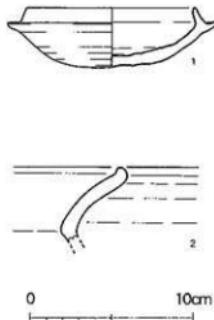


図38 SD09出土遺物 (1:3)

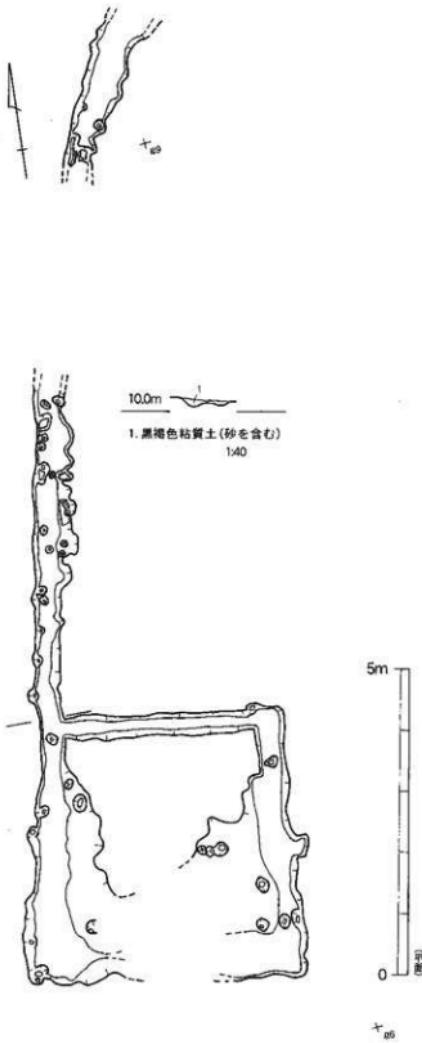


図37 SD09実測図 (1:80, 1:40)

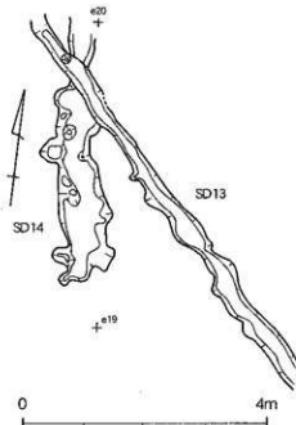


図39 SD13・SD14実測図 (1 : 80)

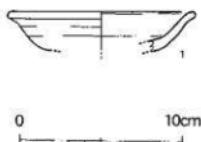


図40 SD13出土遺物 (1 : 3)

SD13・SD14(図39・40)

SD13とSD14はd18・d19・e19grの標高9.94mの地山面で検出した溝であり、SD13がSD14とSK22を切っている。

SD13は長さ7mにわたりN-43°-W方向に直線的に延びている。検出規模は上幅20-50cm、下幅10-30cmを測り、深さは7cm前後と浅い。

SD13の覆土は1層のみ確認でき、ここから40-1に示す土師器の壊が1点のみ出土しているが、遺構の時期は推定できない。なお、遺構の性格は不明である。

SD14は長さ4mの検出にとどまつたが、N-7°-Wを指向し南へは延びないことが確認できた。検出規模は上幅40-90cm、下幅20-60cmを測り、深さは5cm前後と浅い。

SD14の覆土は1層のみ確認できたが、ここから遺物は全く出土しなかった。よって、遺構の時期・性格とも不明である。

SD15(図41)

SD15はe9・g9・g8・h8gr内の標高10.1-10.25mで検出した溝状遺構である。後世に上面を削平されてピット状を呈する箇所もあるが、基本的に連続している。SK05とSD09に切られ、現存長13.1m、幅40-60cm、深さ5-20cmを測り、軸は東でN-75°-Wから北へ屈曲してN-45°-Wを指向し、調査区外へと延びていく。底面はピットが連続したような凹凸の著しい状況を呈している。

ほとんどの溝状遺構が南北方位を指向しているのと反して、当該遺構は東西方向を指向していることと南北方向の溝状遺構に切られているため、前者より古い遺構の可能性が高い。

出土遺物は、土師器の小片が5点のみで実測に堪えるものは皆無であり、時期決定するには根拠の乏しい状況である。

性格不明遺構

SX01(図42)

i8-i9gr内標高10.5mで検出した性格不明の遺構である。当該調査区で最も標高の高い古城山の裾野に位置する。覆土が灰色を基調とする当該調査区では新しい遺構のひとつで、歪な平面形を呈し、調査区外山側へ延びている。周辺に同じ覆土をもつ2基のピットが存在し、何らかの関連が考えられる。南北長4.1m、現存幅70cm、深さ2-5cmを測る浅くて底面のフラットな遺構である。出土遺物は皆無である。

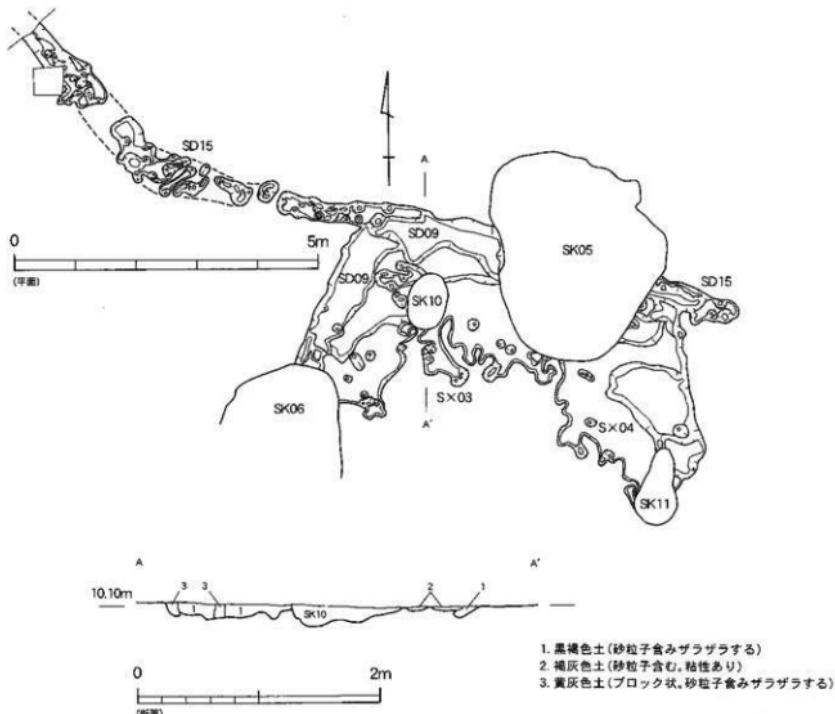


図41 SD15・SX03・SX04等実測図 (1:80、1:40)

SX02(図42・43)

SX02はe10・e11・f11gr内調査区コーナーの標高10.2mで検出した性格不明の遺構である。現存南北長2.8m、現存東西長3.15m、深さ2~8cmを測るが、底面には西側で側溝状の落ち込み、東側で土坑状・ピット状の落ち込みが穿たれ床面から5~10cmの深さを測る。西辺はN-20°-Wを指向する。

出土遺物は、土器器小片(甕・壺)と須恵器甕小片が小袋(14×10cm)1袋分と砥石が1点(43-1)である。土器器壺には朱塗りの施されたものもある。43-2は整形された砥石で、粗研ぎ面、仕上げ研ぎ面を有す。

SX03・SX04(図41)

SX03はf8・f9・e9gr内の、SX04はe8・f8・f9gr内の標高10.1mで検出した性格不明の遺構である。SX03とSX04一連の遺構の可能性もあるが、SK05に切られて分断しており一応別の遺構として扱っている。これらはSK05の他にSK10・SK11・SD09に切られ、SD15とは新旧関係が不明瞭ではあるが、遺構プラン検出の際に若干SD15のプランの軸が通っているように観察されるので、SD15に切られていると思われる。

共に歪な平面形態を呈しており、深さ2~5cmを測る浅くて底面は凹凸の著しいものである。

出土遺物は、SX03が須恵器小片3点、朱塗りの施された土師器坏小片6点で、SX04が須恵器小片1点のみで、実測に耐えるものは皆無であったが、当該遺構は8～9世紀の範疇と考えられる。

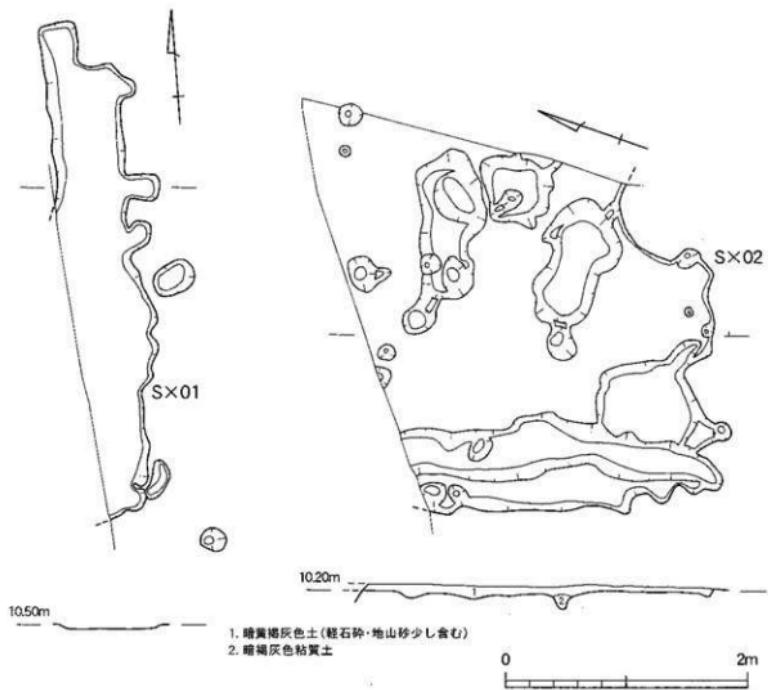


図42 SX01・SX02実測図 (1 : 40)

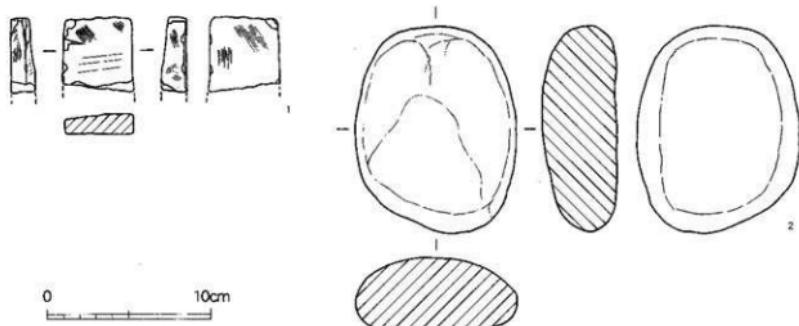


図43 SX02及び深掘り箇所の出土遺物 (1 : 3)

遺構外出土遺物

築山跡2区の遺構外出土遺物は、遺物包含層である2層と3層からの出土を主として、コンテナ10箱分出土している。これらを列挙すると弥生土器、古式土師器、須恵器、円筒埴輪、土製品、土師器、土師質土器(中世土師器)、陶磁器、瓦、石製品、鍛冶関連遺物などである。出土量が最も多いのは土師質土器であり、次いで須恵器である。その他のものは少量の出土で、弥生土器などは数点の出土にとどまる。

以下、実測に堪える遺物を中心に図示し詳細を個別に報告する。

弥生土器・古式土師器(図44)

44-1・2は弥生土器、3～5は古式土師器である。44-1は遠賀川系の壺の肩部破片で、1条の沈線状の段が施されている。44-2は弥生中期の壺の口縁部片と考えられる。44-3は古式土師器の低脚環脚柱部で、全体に風化の著しいものである。44-4の壺は口縁端部がやや外反し丸くおさまる。

44-5は高壺の壺で、底部と体部の境に段を有している。

須恵器(図45～47)

45-1～28は蓋壺である。45-1は蓋で口縁端部を段状に仕上げ、肩部に稜をもっている。45-2は蓋で口縁端部に沈線を1条めぐらせている。45-3・4は壺で、前者のたちあがりは内傾し、後者はほぼ直立する。45-5の蓋の体部は「ハ」の字状に大きく開き、わずかに肥厚し丸味があり内湾気味の端部へと続く。かえり部は内傾する。45-6の蓋はかえりが付く輪状つまみ。45-7の蓋は径が大きく、口縁端部は垂下せず体部から「ハ」の字状に開く。45-8の蓋は天井部と体部との境界がやや角張り、内面の口縁部に1条の沈線状の凹みがある。口縁端部はやや外反して下方へ屈曲する。45-9の蓋は天井部に丸みを有し、内面に1条の沈線状の凹みがあり、口縁端部は下方へ屈曲する。45-10の蓋は天井部に丸みを有し、体部から口縁部に向けて下方に屈曲し段をなす。口縁端部は下方へ屈曲する。45-11の蓋の天井部はほぼ水平に近く、体部から口縁部に向けて「ハ」の字状に開く。45-12の壺身の口縁部はやや外反し、端部は丸い。45-13の壺身の口縁部はほぼ直立し端部は丸い。45-14の壺身の口縁部は外反し、端部は丸い。45-15の壺身は底部から直線的に外傾して立ち上がる。底部は回転糸切り。45-16の壺身は底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は外方につまみ出している。底部は回転糸切り。45-17は鉢の底部の可能性をもつ。45-18の高台付壺身の口縁はやや内湾して立ち上がり、底端部に比較的高い高台を付し「ハ」の字状に開く、端部は丸い。45-19の高台付壺身は口縁端部でやや外反し、高台は底端部より内面に付され「ハ」の字状に開く。45-20は底端部に高台を付している。底部は焼成時の歪み。45-21は底端部に短い高台を付している。45-22は底端部よりやや内面に高台を付し、底部

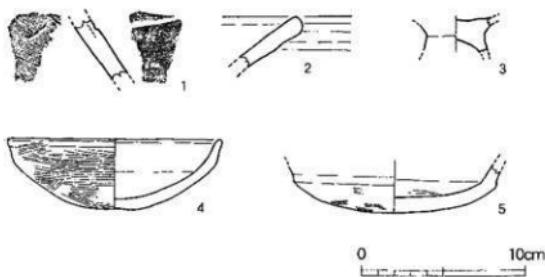


図44 遺構外出土弥生土器・古式土師器 (1 : 3)

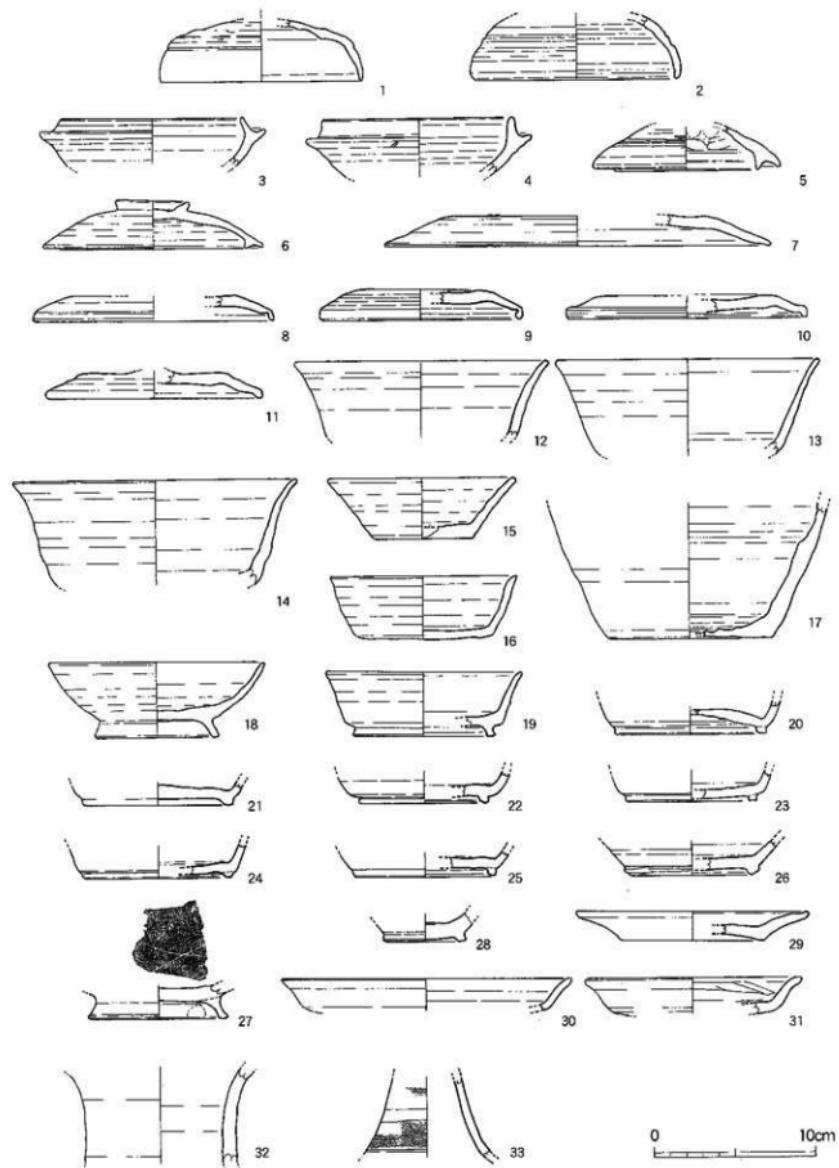


図45 遺構外出土須恵器1 (1 : 3)

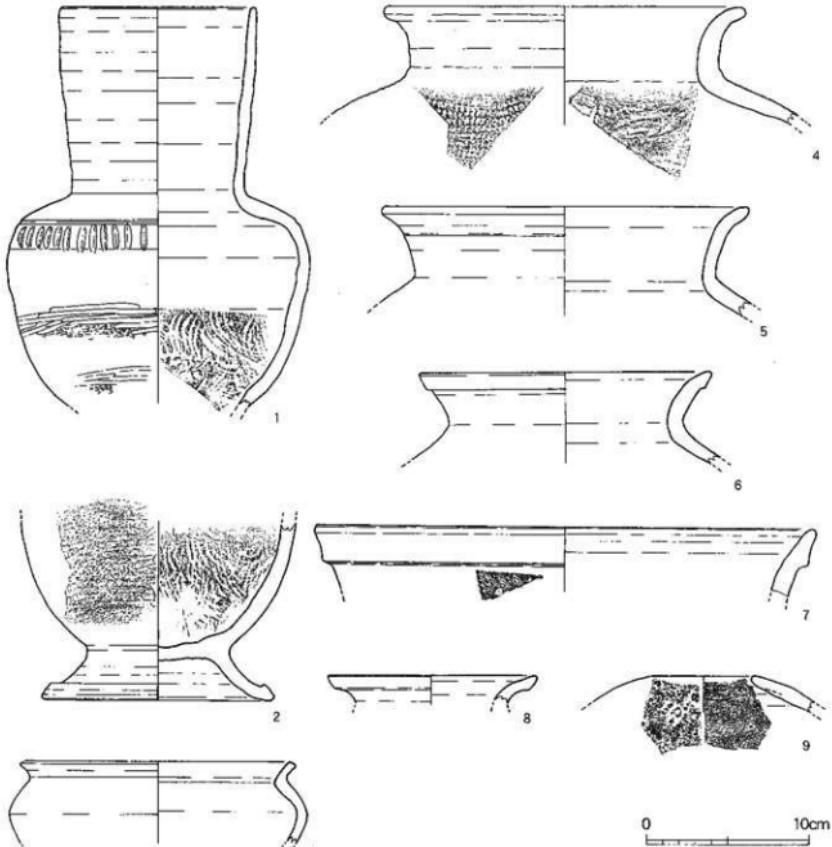


図46 遺構外出土須恵器2 (1:3)

と体部の境は丸く仕上げている。45-23の高台は底端部より内面に付されている。45-24・25の高台は底端部より若干内に付している。45-26の高台は底端部に付し「ハ」の字状に開く。45-27の高台は底端部に高く「ハ」の字状に開く高台を付し、底部内面には「X」印の線刻がある。45-29~31は皿とみられ、45-30は若干内湾して逆「ハ」の字状に立ち上がり口縁端部はやや先細りとなる。45-32は壺の頸部、45-33は脚部である。

46-1の長頸壺は、頸部がほぼ直立し、肩部に1条の沈線文と列点文を施す。46-2は長頸壺の高台部と思われる。46-3は短頸壺で、口縁部は短く外反している。46-4~7は壺の口縁部で、46-4・5の口縁端部は丸く仕上げ、46-6・7は口縁端部を屈曲させて肥厚している。46-8・9はそれぞれ複合口縁状の口縁部を有する壺と無頸壺である。47-1・2は大型の壺で、口頸部に波状文が施されている。

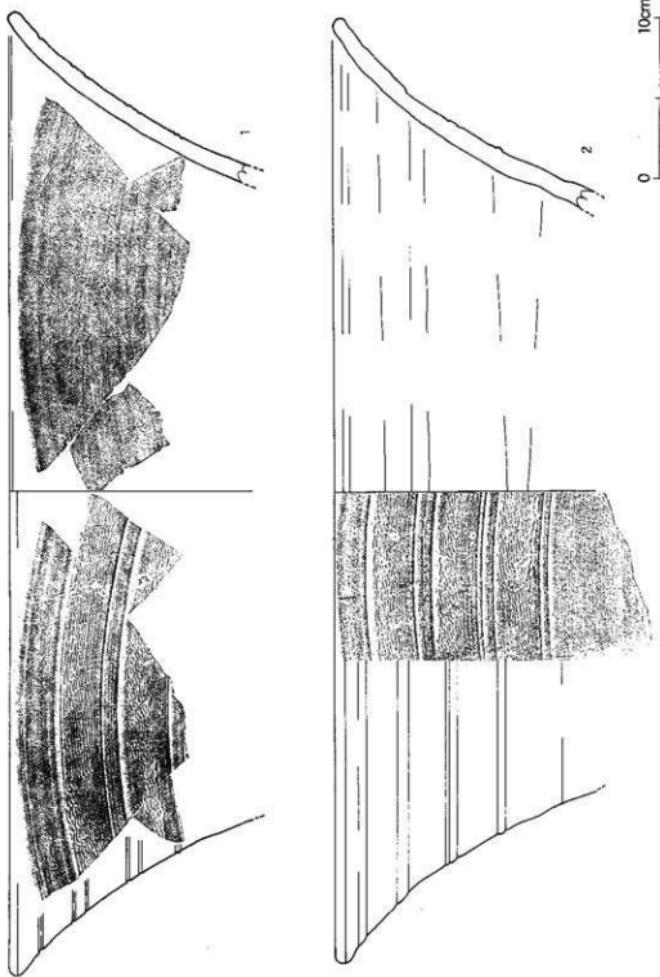


図47 邊機外出土須懸器3 (1 : 3)

円筒埴輪（図48）

48-1~14は円筒埴輪片、48-15は子持壺片である。48-1のタガはやや下向き。48-2のタガは真横に出ており、端部は平坦で突出長は15mm。48-3のタガはやや下向き、端部は平坦。48-4のタガは真横に出ていている。48-5のタガは真横に出ており、端部はほぼ平坦であまり突出していない。48-6のタガは真横に出ており、端部は凹み突出長は16mm。48-7は断面矩形を呈するタガを有する箇所で、タガは10mm長を測る。48-8のタガは真横に出て、端部は平坦。48-9のタガは真横に出て、端部は平坦。48-10

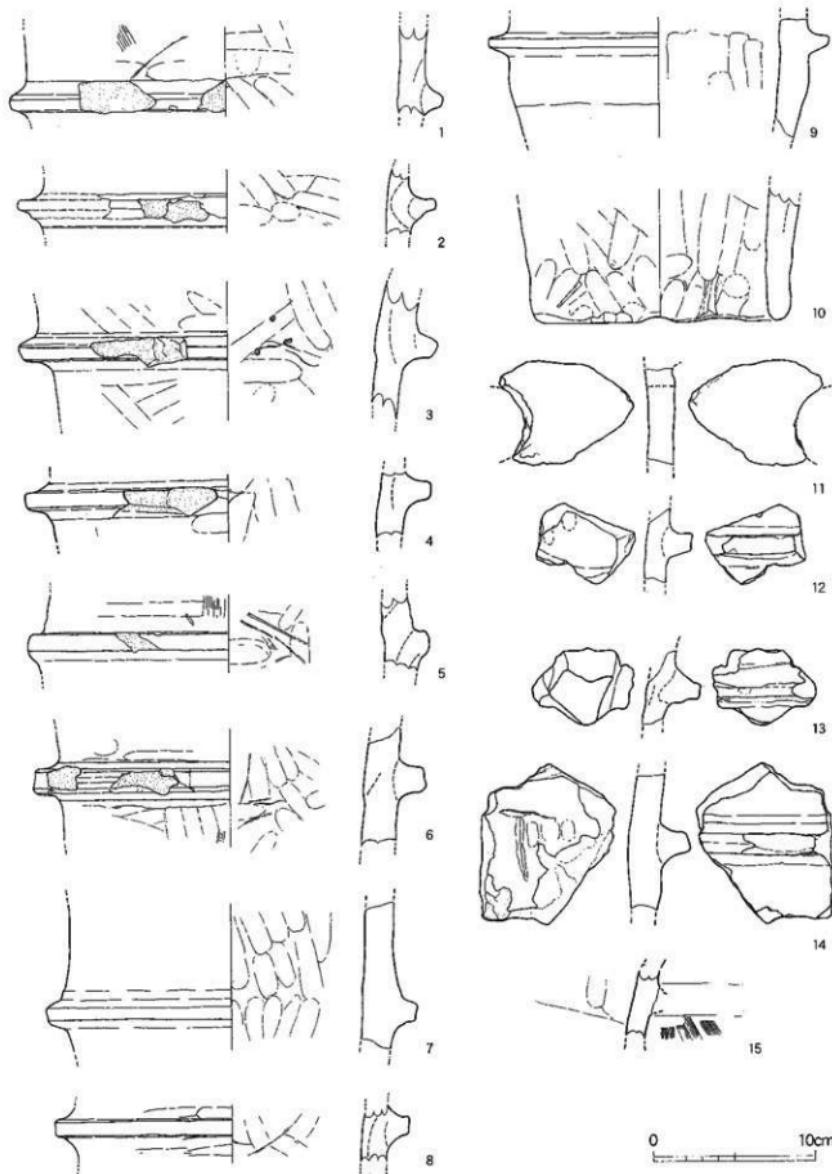


图48 遗構外出土円筒埴輪 (1 : 3)

は基底部で内外面とも強いナデで基底端部の断面はU字形。48-11は円形透かしが欠損した部分の破片である。48-12~14はタガ部の破片である。48-15は出雲型子持壺の胴部と脚部の境界にあるタガ状突起部片と思われる。

土製品（図49）

49-1~4は土錘で49-3は中央がやや膨らむ紡錘形を呈している。49-5は土製紡錘車である。

土器（図50・51）

50-1~7は単純口縁の壺である。50-1の口縁内面はハケメで体部内面はケズリ。50-2は口縁端部に内傾面をもっている。50-3は短めの外反する口縁部から体部は寸胴気味で膨らみをもたない。50-4は薄手で口縁部は内外面ともに横ナデ。50-5の口縁端部は外反して丸くおさまる。50-6の口縁端部はナデによって平坦面を作っている。50-7の口縁端部は段を有している。

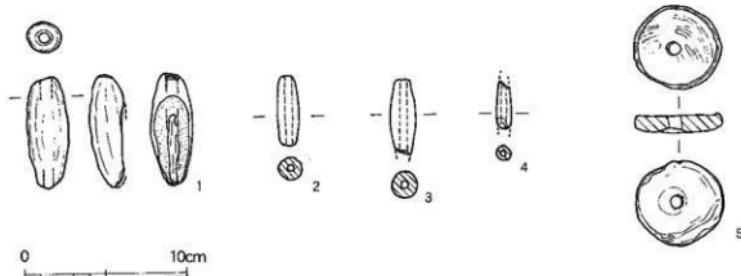


図49 遺構外出土土製品 (1 : 3)

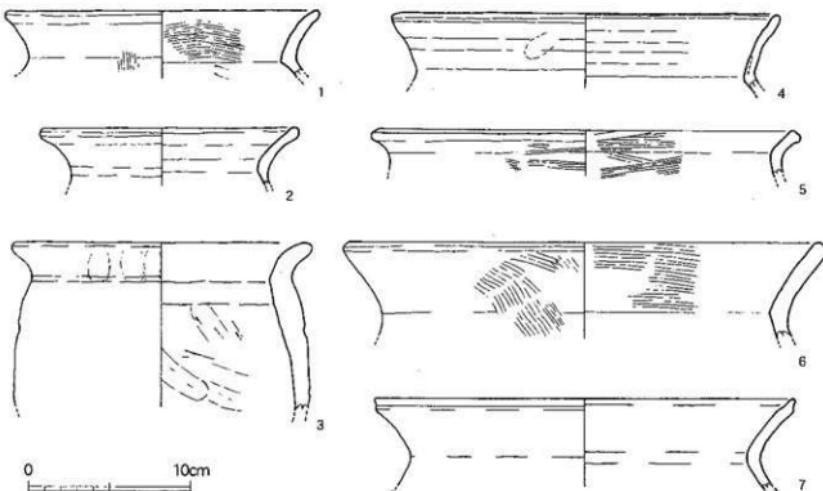


図50 遺構外出土土器 (1 : 3)

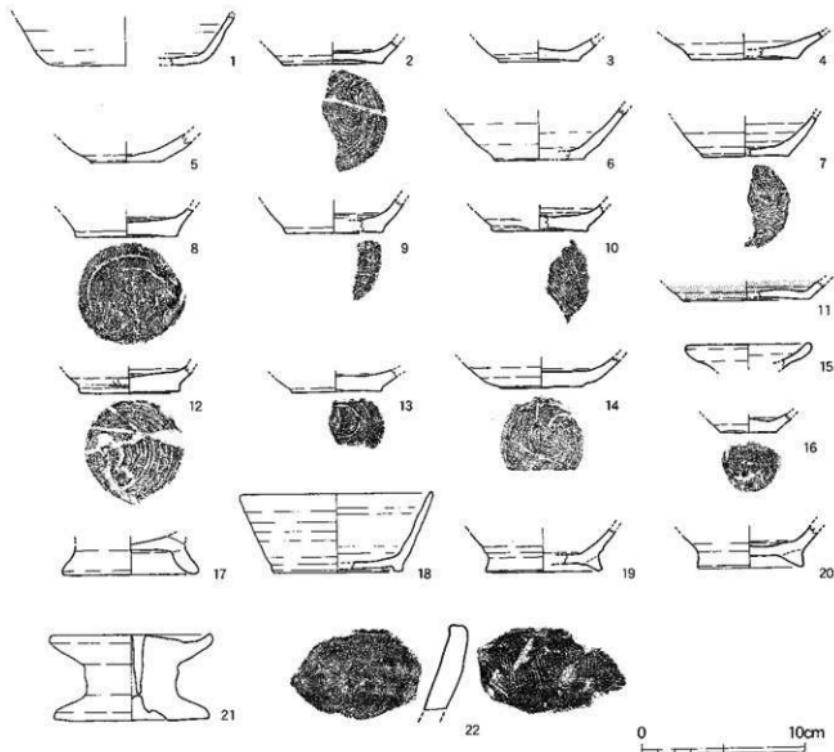


図51 遺構外出土土師器・土師質土器 (1 : 3)

51-1~22は土師器と土師質土器である。51-1~14は壺で、51-1の体部は底部からゆるやかに外傾して立ち上がる。51-2・3の底部は体部へ逆ハの字状に立ち上がる。51-4は底部と体部の境がややあまく外広がりに立ち上がるものである。51-5は51-4より底部と体部の境界が不明瞭。51-6・7の底部外面は明瞭な屈曲を呈しているが、内面はゆるやかに湾曲している。51-8の底部外面はやや内湾して立ち上がる。また、底部に対し体部の器壁が薄い。51-9・10・12・13の底部外面は内湾し、ゆるやかに立ち上がっている。51-11は器壁が薄手で底部から体部への立ち上がりがあまく、外面底部以外に朱塗りが施されている。51-14はやや厚手の底部から体部へ内湾気味に立ち上がる。51-15は小皿の口縁部で底部に向かってしまりをみせ、口縁部は厚手である。51-16の小皿の底部は回転糸切りで、体部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。51-17・19・20は高台付壺の底部付近で、51-17はやや足高ぎみのものである。51-18の高台付壺の体部は底部から鋭く屈曲し、直線的に立ち上がる。51-21は柱状高台皿で、皿部のほぼ中央に孔がある。51-22は土師質土器の擂鉢の口縁部で、内面に若干の槽目が観察される。

陶磁器類（図52）

52-1は青磁の碗で鎬連弁文がみられる。52-2は青磁の高台付碗で見込の釉が搔き取られ、高台内は削り出し。52-3~6は白磁で、52-5が碗、52-3・4・6が皿である。52-3は口縁部でゆるやに湾曲する体部をもち、口唇部は口禿である。52-4・6は底部とともに底部から体部への境は明瞭で、逆「ハ」の字状に体部は立ち上がる。また、52-4の底部外面に釉薬の搔き取り痕が観察される。52-5の底部は削り出し高台で、外面体部下位から底部にかけては露胎である。52-7~9は染付碗で、52-8は小振りの碗である。直立した高台が付き、墨付けは露胎である。染め付けは、体部外面に菊と思われる葉、体部下位と高台部に團線が施される。

52-10~12は瓦質土器である。52-10は奈良火鉢（浅鉢）のL字状に屈曲する口縁部で、外面に1条の

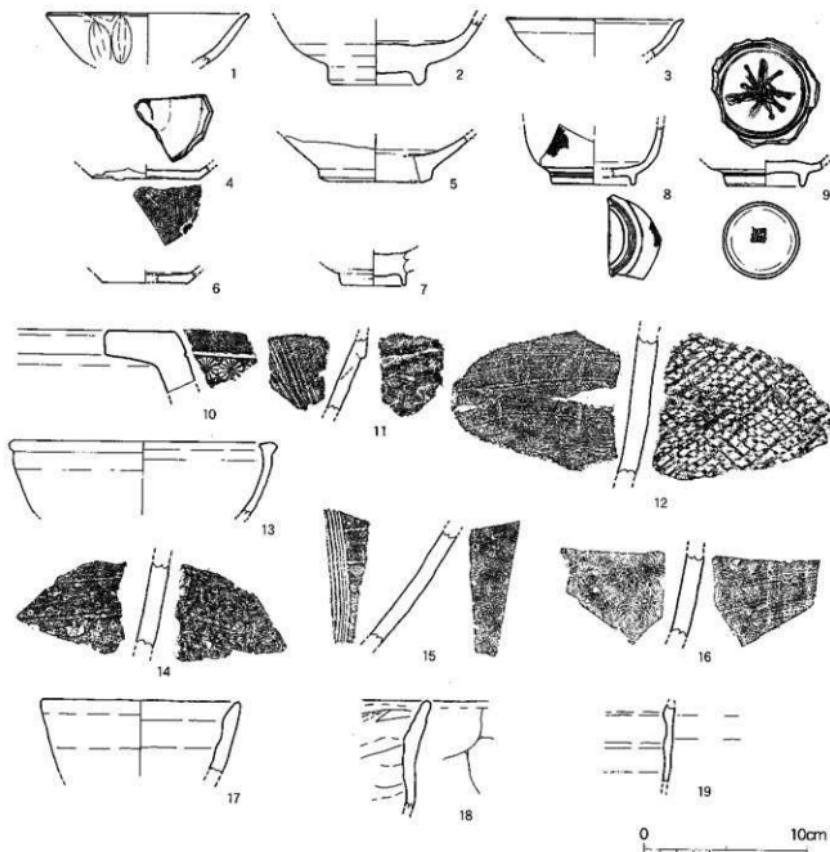


図52 遺構出土陶磁器類（1：3）

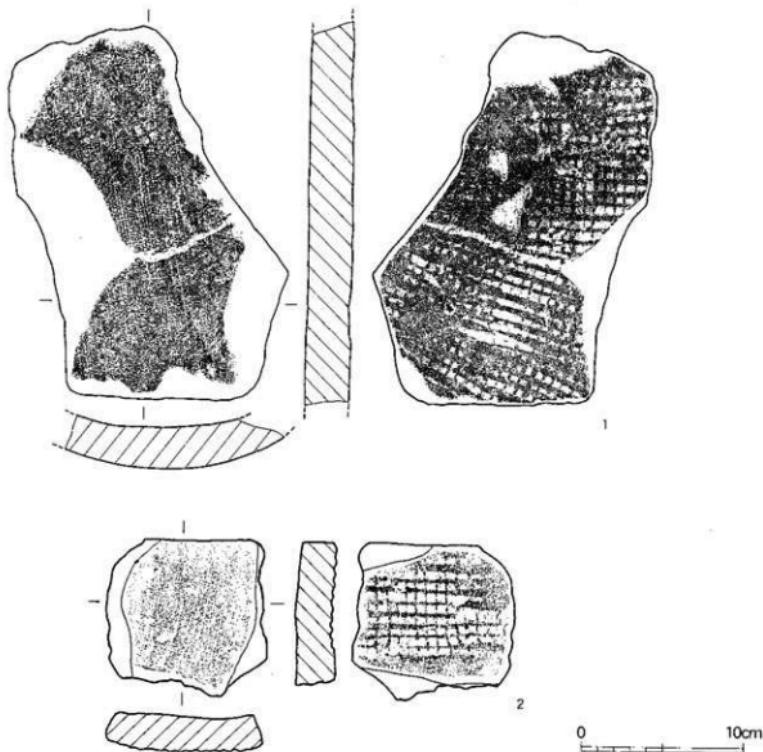


図53 遺構外出土瓦 (1 : 3)

沈線文下に菊花文を施している。52-11は擂鉢の口縁部付近で、口縁部は肥厚して帯状突帶となる。52-12は外面に格子状タタキ目を施す甕の胴部破片。

52-13～16は陶器で、52-14は備前焼の可能性をもつこね鉢の胴部破片である。52-15・16は備前焼で52-15は擂鉢の胴部破片、52-16は甕の胴部破片である。

52-17～19は製塙土器で、52-17・18の口縁は、やや外反し、端部は尖り気味におさまる。52-19は内外面共に横ナデで、口縁端部は欠損しているが端部に向けて細くなる。

瓦 (図53)

53-1・2は須恵質の平瓦である。外面は格子状の叩き、内面は布目痕が施されている。

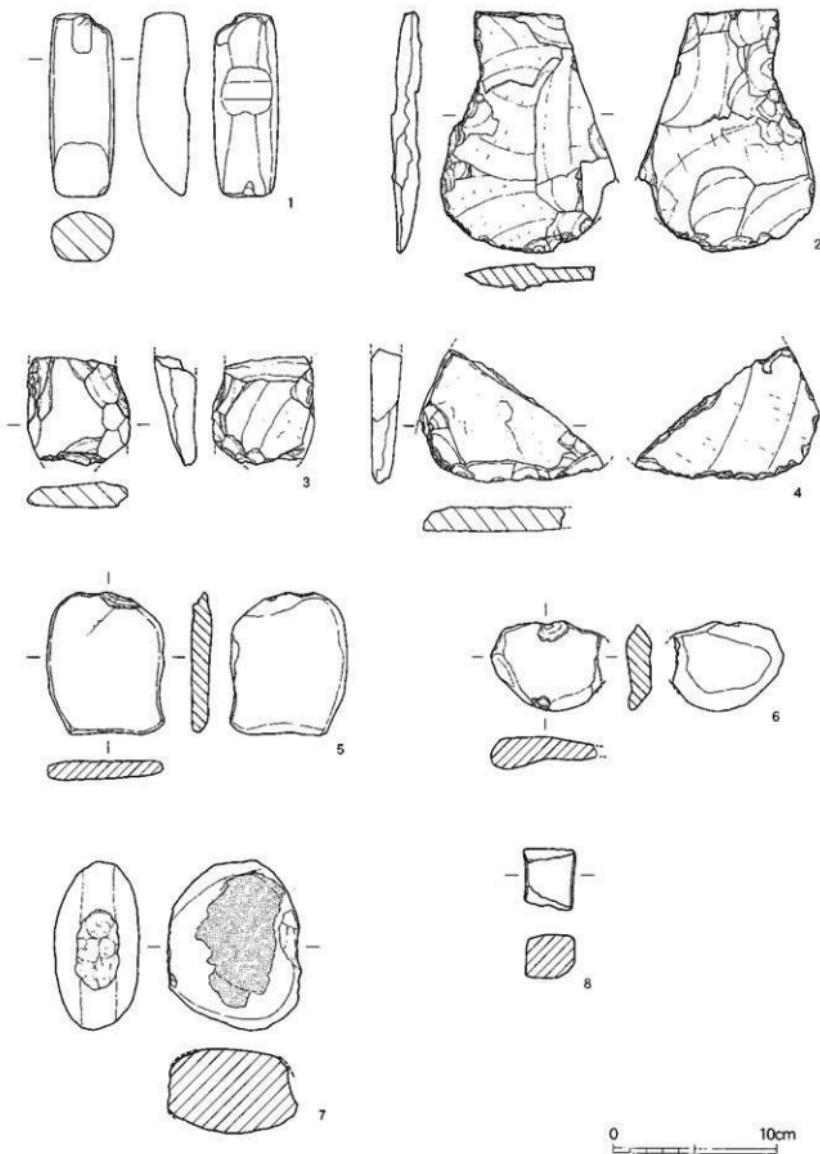


図54 遺構外出土石製品 (1 : 3)

石器（図54）

54-1は柱状片刃石斧で、抉りが小さく、刃部の陵も不明瞭である。また断面も丸みを帯びている。54-2~4は打製石斧で、54-2は調整剥離が縁辺部に行われているもので、体部中央から屈曲して刃部が幅広となり、刃部は若干尖頭型を呈する。左刃部縁辺に磨滅痕が観察される。54-5・6は石錘である。小蝶の上下に抉りを入れている。54-7は円礫を利用した磨石・敲石である。54-8は砥石で4面とも使用している。

鍛冶関連遺物（図55）

55-1~3は轆の羽口で、55-4~8は鉄滓である。55-1は轆羽口の先端部の破片である。55-2は羽口先端部の破片で、先端は黒色のガラス質滓。55-3も羽口先端部の破片である。先端は黒色のガラス質滓で、端部は小さく割れている。

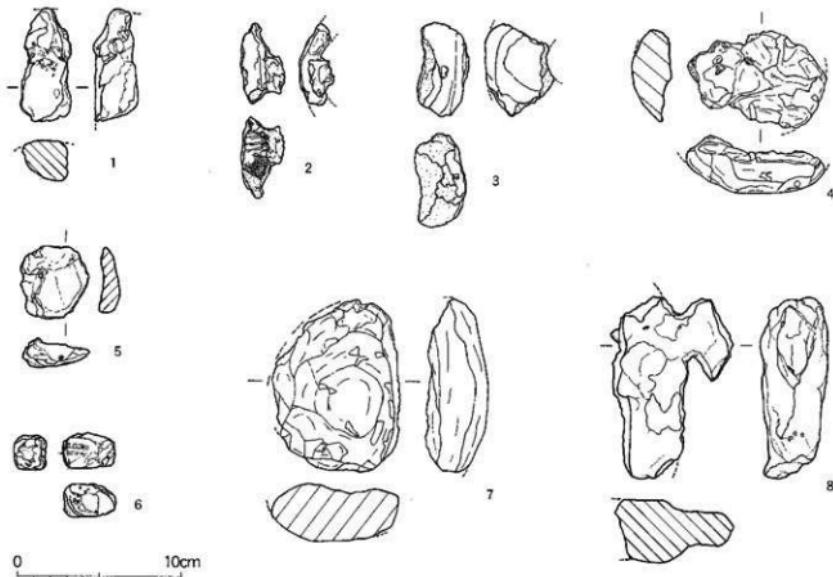


図55 遺構外出土鍛冶関連遺物（1：3）

註

- 1) 出雲市教育委員会『築山遺跡Ⅰ』2005参照。
- 2) 1) と同じ。
- 3) 角田徳幸「三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡」『島根考古学会誌』第20・21合併号2004参照。
- 4) 3) と同じ。
- 5) 1) と同じ。
- 6) 三浦 清「第1編 第1章 第1節 湖陵町の地学的自然」『湖陵町誌』湖陵町誌編纂委員会2000参照。
- 7) 小林謙一ほか「第5章 出雲市築山遺跡出土資料の¹⁴C年代測定」及び渡辺正巳「第5章 築山遺跡平成15年度1区発掘調査に係る自然化学分析」『築山遺跡Ⅰ』出雲市教育委員会2005参照。
- 8) かつて調査区東の大井谷に流れていたと考えられる川。

参考文献

- 松本若雄・正岡陸夫編『弥生土器の様式と編年』木耳社1992
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集1994
大谷晃二ほか『上石堂平古墳群』平田市教育委員会2001
中村 浩「和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—」柏書房1981
藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集1997
島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅰ』1999
島根県教育委員会『蔵小路西遺跡』1999
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995

第4章 自然科学分析結果

築山遺跡2区発掘調査に係る自然科学分析

文化財調査コンサルタント株式会社 渡辺正巳

はじめに

築山遺跡は島根県出雲市上塙治町地内に立地する。本報は、出雲市(文化企画部芸術文化振興課文化財室)が、遺跡近辺の古植生、堆積環境を推定することを目的として、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した調査報告の概報である。

試料について

図I、IIに示す6地点にて、分析試料を採取した。花粉分析用試料を、No1～3、5地点で採取した。各地点の模式柱状図および試料採取層準を、図IV～VIIの花粉ダイアグラム左側に示す。種実分析用試料は、No3地点の1層下部、およびNo4地点の断面図(図3)中B、B'付近で採取した。また、No6地点のハイカ層中より¹⁴C年代測定用試料を採取している。

分析方法および分析結果

(1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、および花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果は、表Iのとおりである(植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物硅酸体は、花粉分析処理の残渣を観察した)。

(2) 花粉分析

処理は渡辺(1995)に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村(1974)に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分している。

分析結果を図IV～VIIの花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に充分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「*」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、それぞれの分類群毎に累積百分率として示した。

(3) 種実分析

試料を0.25mm目の網で水洗、細粒物を除去した後、肉眼あるいは実体顕微鏡を用いて植物遺体を選別した。各分類群毎に記載を行い、分析結果を一覧として表IIに示す。

① ブナ科(Fagaceae)

果皮は1～4mm程度の微小な破片で、果皮構造は2層からなり、表裏ともに細い継の筋がはつきりしている。果実基部等の部位がないため、属までは同定できない。

② 不明(Unknown)

曲面を持つ破片で、果実か種子の皮の破片と見られるが、表面が風化されるなどして特徴がはつきりせず同定できない。外面には不明瞭な凹凸がある。

(4) ^{14}C 年代測定

年代測定はAMS法を用いて行った。測定結果を表Ⅲに示す。また年代算出にあたり ^{14}C の半減期には5568年を用いた。暦年校正にはINTCAL98を用いている。

花粉分帶

前述の分析結果で示したように、No 1～3地点では、木本花粉の含有量が少なく、統計処理ができなかった。またNo 5地点では、木本花粉の含有量が多かったものの2試料間で花粉組成に大きな差は無かった。これらのことから今回は、花粉分帶を行わなかった。

花粉化石含有量の少なかった原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

- 堆積速度が早いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- 堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- 土壤生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
- 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
- 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかつた。

今回分析した試料の多くは暗褐～黒色の粘土であり、プラント・オパールの含有量が多く、胞子の割合が低いもののキク科を中心とした草本の割合が高い。これらのことから、3が主因であったと考えられる。つまり、堆積速度が遅いために花粉が堆積物中に固定される以前に、紫外線の作用で分解したと考えられる。

^{14}C 年代測定（AMS）年代測定値について

築山遺跡内および近辺の三田谷Ⅰ遺跡などでは、従来より「第1ハイカ層」あるいは直下の土壌を対象としたAMS年代測定が行われており、3600～3800y B.P.の年代が得られている（渡辺、2005、中村・渡辺、2000など）。今回得られたAMS年代測定値もほぼ同年代を示し、従来の結果と矛盾の無いものであった。

第1ハイカ層堆積直前の古環境

(1) 層序

出雲平野西部に分布する「第1ハイカ層」は、三瓶火山の活動期第Ⅷ期の火碎流堆積物が神戸川沿いに流下・再堆積を行ったものと考えられている。近年の雲仙普賢岳噴火に伴う土石流災害のスケールをさらに大きくした災害が、出雲平野を襲った事になる。

(2) 周辺地域との対比

今回分析を行った4層は、「第1ハイカ層」下位の古土壤である。統計処理に充分な量の花粉化石が検出されており、マツ属（複維管束亞属）、コナラ亞属が卓越傾向にあり、マキ属、スギ属も特徴的に検出される。これらの特徴は中海・宍道湖地域の地域花粉帶シイ-カシ帯マキ亞帯の特徴（大西ほか, 1990）と類似するが、コナラ亞属とアカガシ亞属で卓越する種類が異なる。近隣の築山遺跡（H14年度調査区：渡辺, 2004）、三田谷I遺跡の分析結果（中村・渡辺, 2000）でもアカガシ亞属が卓越傾向にあり、今回の結果とは異なる。ただし三田谷I遺跡（中村・渡辺, 2000）では、「第1ハイカ層」直下のⅢ帯a亞帯より下位のⅣ帯でコナラ亞属が卓越傾向を示している。

(3) 古植生

今回の花粉組成の違いは層序（時期）の違い、あるいは局地的な植生の反映と捉えることが可能である。資料が不足していることから、層序（時期）については可否が不明であり、可能性の高い「局地的な植生の反映」と捉え古植生を推定する。

背後の丘陵にはカシ類を要素とする照葉樹林が分布し、丘陵縁辺など開けた場所にはアカマツや、ナラ類を要素とする遷移林が分布していたと考えられる。特に調査地点近辺ではナラ類が生育していた可能性が高い。調査地点近辺には、ガマ類やカヤツリグサ科、イネ科などの繁茂する湿地が広がっていたと考えられる。

(4) 古地形

H15年度1区（渡辺, 2005）では、10層がハイカ堆積前の「古土壤」と考えられている。ここでの標高は+9.4m程度で、花粉化石の含有量が少なく「土壤化」の影響が強かったと考えられている。一方、今回の分析では「古土壤」の標高が+8.7~8.8mであり、花粉化石の状況から、湿地での堆積が示唆される。2区では「古土壤」面が1区に向かって急傾斜をしていることから、両地点間に沖積谷の存在が推定できる。また、1区南（H14年度調査区）には丘陵より延びる尾根が存在する（渡辺, 2004）ことから、H15年度1区がこの尾根の延長上に位置する可能性がある。

古墳時代以降の古環境

(1) 古墳時代後期

花粉分析、種実分析を行ったNo3地点、種実分析を行ったNo4地点はともに、古墳時代後期の周溝より採取した試料であった。

種実分析では、ブナ科の果皮片などが得られたのみであったが、花粉分析では、草本を中心とした19分類群が検出された（木本花粉の検出量が少なかったために、花粉ダイアグラムでは「*」で示している）。ここではヨモギ属、タンボボ亞科、イネ科（40ミクロン未満）の出現率が高く、ソバ属が

わずかであるが出現する。

周溝近辺にはキク科やイネ科の草本が茂り、近隣の畑ではソバが栽培されていたと考えられる。

(2) 古墳時代後期以降中世まで

No 1、2 地点で分析を行ったが、前述のように土壤化の影響により木本花粉の検出量が少なかった。草本花粉ではヨモギ属、タンボボ亜科の他、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）の出現率が高かった。

遺跡近辺ではキク科やイネ科の草本が茂っていたことが分る。イネ科（40ミクロン以上）が少なからず検出されるが、上位の現代耕土（水田）からの生物擾乱などによる紛れ込みの可能性もあり、水田が近辺にあったか否かの判断はできない。

まとめ

縄文時代後期、古墳時代後期、古墳時代～中世の堆積物を対象に花粉分析を行ったが、縄文時代後期の試料のみから充分な量の花粉化石が検出できた。このことから、花粉分带を行わなかった。「土壤化」に伴い花粉が消滅したことが、花粉化石の検出量が少なかった主要因と考えられた。

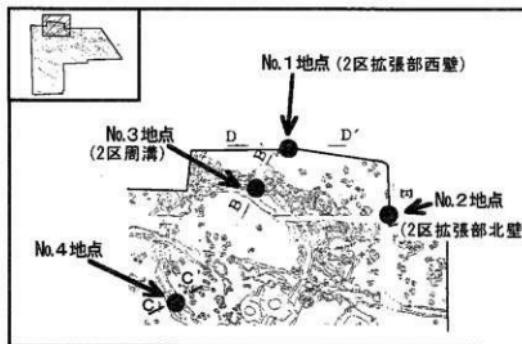
縄文時代後期（第1ハイカ層下位の土壤生成期）の、遺跡近辺の古植生、古地形について考察を行った。この結果、他地域と比べ調査地点近辺ではコナラ類の割合が高いことが分った。また、1区と2区の間に沖積谷が存在することが分った。

古墳時代後期には、遺跡内あるいは近隣でソバが栽培されていたことが分った。

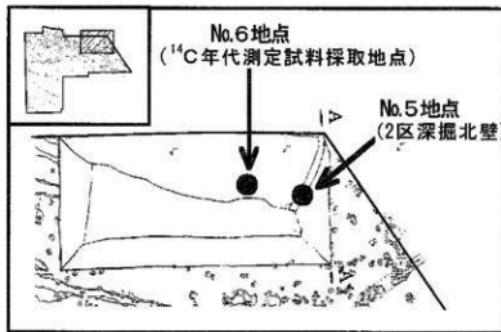
古墳時代以降中世の堆積物は薄く、土壤化が進んでいた。キク科やイネ科の草本が茂る草地が広がっていたと考えられる。一方で稲作が行われていた可能性が指摘できるが、真偽は不明である。

引用文献

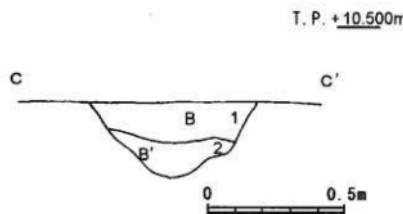
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.
- 中村唯史・渡辺正巳（2000）三田谷I遺跡の地下層序と地形発達史、斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—三田谷I遺跡(Vol.2)—, 116-127, 建設省中国地方建設局出雲工事事務所・島根県教育委員会.
- 大西部大・千場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖底下完新統の花粉群、島根大学地質学研究報告, 9, 117-127.
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法、考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳（2004）築山遺跡における自然科学分析、寿昌寺遺跡・築山遺跡－出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－, 1156-1166, 出雲市教育委員会・島根県.
- 渡辺正巳（2005）築山遺跡平成15年度1区発掘調査に係る自然科学分析、築山遺跡発掘調査報告書、出雲市教育委員会・島根県.



図I 試料採取地点1（2区西侧壁中央部）



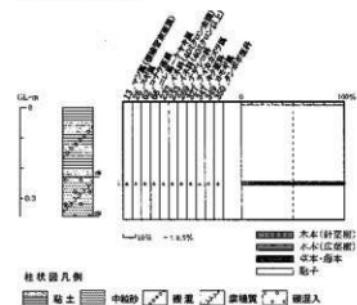
図II 試料採取地点2（2区西壁北部）



B、B'：試料採取地点
1：黒色砂礫混粘土 2：黒色砂混粘土

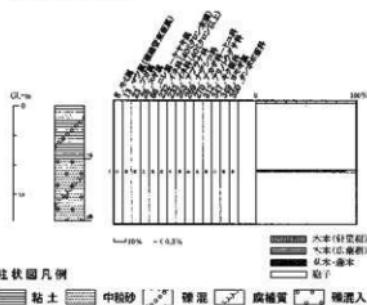
図III No 4 地点試料採取層準

泰山遺跡2区松原部西壁



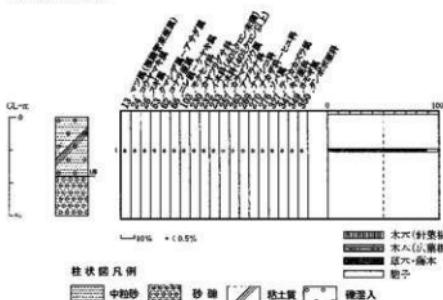
図IV No 1 地点の花粉ダイアグラム

泰山遺跡2区紅張部北壁



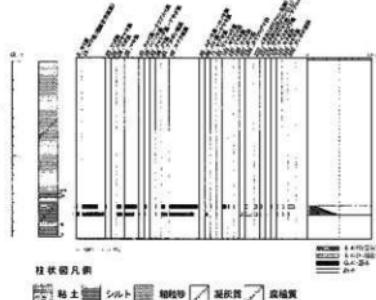
図V No 2 地点の花粉ダイアグラム

泰山遺跡2区周溝



図VI No 3 地点の花粉ダイアグラム

泰山遺跡2区周溝



図VII No 5 地点の花粉ダイアグラム

表I 微化石概査結果

地點	試料NO.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オーバー
1	1	△	○	△×	×	△	○
2	1	△	○	△	×	△×	○
3	1	△	○	△×	△×	△×	○
5	1	○	○	○	×	△	○
	2	○	○	○	×	△	△

凡例 ○: 十分な数量が検出できる

△: 検出されてまれに検出できる

○: 少ないが検出できる

△: 非常に少ない

×: 検出できない

表II 種実分析結果

地点名	試料名	樹種	部位	名	個数
NO. 3	NO. 2	ブナ科	果皮 (破片)		2
	不明	果実か種子の皮 (破片)			1
	B	—	—		—
NO. 4	B'	ブナ科	果皮 (破片)		2

表III 年代測定結果

試料NO.	測定年代 (yBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C (yBP)	曆年代 ^{a1} (cal y.)	測定番号 (PLD-)
IT2-1	3,905±40	-30.2	3,770±45	BC2,310~ 2,035	2966

築山遺跡出土縄文時代後期土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学院 白石 純

1. 分析目的

築山遺跡より出土した縄文時代後期の土器には、胎土中に三瓶山起源と考えられるデイサイトの岩石片が観察される（写真1）。そこで胎土中に含まれるデイサイトの岩石片を分析し、三瓶山のデイサイト（写真2）と比較することで、三瓶山起源のデイサイトかどうか検討した。

分析方法は、偏光顕微鏡観察法とEPMA分析法の2つの方法で分析した。偏光顕微鏡観察法では、土器の胎土に含まれる岩石、鉱物を観察し、EPMAでは、土器の胎土に含まれる岩石（デイサイト）の成分を調べ検討した。

2. 分析試料・結果

分析した試料は、築山遺跡から出土した縄文土器10点と三瓶山起源のデイサイトである。

(1) 偏光顕微鏡観察による分析結果

築山遺跡出土の縄文土器10点の観察を実施したところ、10点ともデイサイトの岩石破片が観察された（写真3）。

(2) EPMAによる分析結果

試料番号3縄文土器の分析結果について述べる。分析装置は、日本電子社製JSM-5410を使用した。測定条件は加速電圧15kV、照射電流1.0nAで、補正法はCoキャリブレーションのスタンダードとし、ZAF法により計算した。

測定は写真3（土器胎土中のデイサイト）と写真4の丸印部分を測定した。その結果を第1表に示しているが、両方の分析値は主要成分で比較すると、 SiO_2 が約75%、 Al_2O_3 が約13%で、その他の成分もほぼ同じ含有量であった。

3. まとめ

偏光顕微鏡観察とEPMA分析法により胎土中に含まれるデイサイトの成分を調べたところ、今回分析した築山遺跡出土の縄文土器に含まれるデイサイト岩片は、三瓶山起源のデイサイト成分に非常に近い分析結果であった。

この分析では以下の方々、機関にお世話になった。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

米田美江子氏、中村唯史氏、出雲市教育委員会、島根県立三瓶自然館

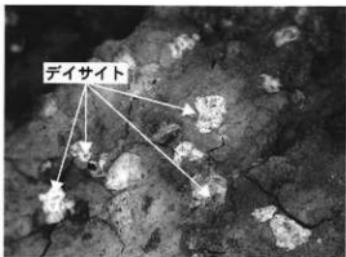


写真1：篠山遺跡出土縄文土器3

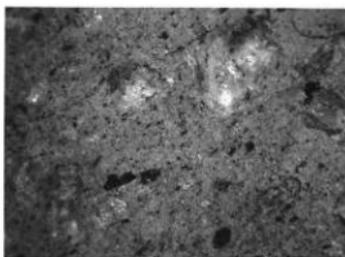


写真2：三瓶山デイサイト

実体顕微鏡写真

0 2mm

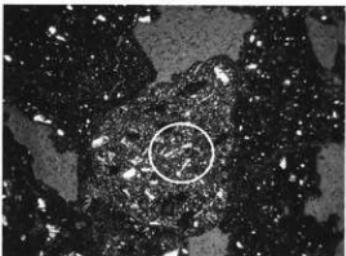


写真3：篠山遺跡出土縄文土器3

丸部分をEPMAで測定した

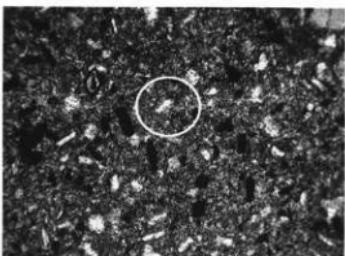


写真2：三瓶山デイサイト

偏光顕微鏡写真

0 0.5mm

第1表 EPMA分析結果一覧表 単位：(%)

試料番号	1	2	3	4
試料名	縄文土器3	縄文土器3	デイサイト	デイサイト
SiO ₂	77.39	75.07	79.26	75.49
Al ₂ O ₃	13.06	14.16	10.65	13.97
FeO	0.78	1.61	1.68	0.91
MgO	0.39	0.32	1.06	0.29
CaO	2.16	2.71	2.42	2.72
Na ₂ O	3.76	3.96	3.27	3.93
K ₂ O	2.46	2.17	1.66	2.69
Total	100.00	100.00	100.00	100.00

第5章 火葬墓について

火葬墓について

築山遺跡2区において検出された火葬墓はSK19のみである。SK19が築かれた時期の古代墓の検出例自体が山陰では希であるため、なぜ当該地にSK19(火葬墓)が築かれたのか若干の考察を試みることにしたい。

古墳時代には厚葬思想により大型の古墳が築かれてきたが、飛鳥時代以降全般的に墳丘の縮小傾向が進む。大化の薄葬令(646年)の後、文武天皇四年(700)には、僧道昭が初めて火葬されたことが『続日本紀』に記されている。その後、持統天皇が火葬により天武天皇陵に合葬された事例は、土葬を基本としながら火葬が採用される契機となり、官人・文化人・僧などに普及していくこととなる。

墳墓の立地する条件としては、内藤政恒氏が「山頂あるいは山腹に設営される例が少なからず見られる。」⁹⁾と述べ、黒崎直氏が「丘陵東南方の傾斜面上に立地する火葬墓が大多数であり」¹⁰⁾と記している通り、丘陵地に立地する場合が多いようである。

SK19検出状況 SK19は標高約10mに位置し、出雲平野中央部からみると南山へと続く微高地上有るが、決して平野を眺望できる位置ではない。同時期の官衙遺跡として注目を浴びている、神戸川左岸の平野部に立地する古志本郷遺跡G区¹¹⁾の標高が約7.5~8mであることを考慮すると、平野に立地した方が妥当である。前記した火葬墓の立地条件からみると、古代火葬墓の検出例はほとんどが平野部を見渡せる丘陵上であり、SK19は異質な感じを受ける。

SK19と同時期の遺構は隣接する性格不明遺構であるSX03・SX04のみで周辺調査区からもほとんど検出されておらず、単独で築かれた様相を呈する¹²⁾。また盛土の有無は、遺構の上面が包含層にパックされた状況であったため、元来なかったものか、盛土が築かれていたが後世にカットされたためにわからなくなってしまったものは、判断できなかった。近辺に関連するような遺構もなく、上屋構造は無かったようである。またSK19に埋葬された人物が荼毘に付された場所も検出されなかった。

納骨された骨片の重量は182g+oであることは前記した。たとえば、中山火葬墓¹³⁾では壮年男性かと比定されている人骨をほぼ1体分納骨し、総重量1690gを測る。それと比較するとSK19は約9分の1しか納骨されていないことになる。骨蔵器が小さいため拾骨は選択されたと思われるが、残りの大部分の焼骨はどのような処理がなされたものであろうか。搔き集めて一括廐棄、分骨埋葬、散骨埋葬など¹⁴⁾が考えられるが、想像の域にすぎない。

山陰地域出土の古代火葬墓 島根・鳥取両県内で発見された古代火葬墓は、発掘調査以外で出土したものが多く、詳細が不明なものが多い。前記した中山火葬墓記載の報告書に当時(平成6年(1994))の両県出土の古代火葬墓の集成が成されており、今回はそれに加筆修正する。よってそれに記載ある参考文献は省略する。その結果管見にふれたものは、島根県で当該遺跡を含めた13例、鳥取県で6例で¹⁵⁾、表3は1. 所在地(立地) 2. 骨蔵器の種類 3. 被葬者 4. 時期の概略、を記したその一覧表

である。

出雲古代史研究¹⁶⁾において内田律雄氏は1km内に位置する中山火葬墓と小久白火葬墓を久白廃寺との関わりから言及している。小久白火葬墓で出土した鉄鉢¹⁷⁾を僧具の一つであることに注目し、当該被葬者を久白廃寺に所属した僧尼であろうと想定している。また当該地域は、「出雲国風土記」では意宇郡野城駅家あるいは飯梨郷、『和名類聚抄』では能義郡能城郷に含まれ、付近には山陰道が通過して公的施設があったと考えられるところなどから、中山火葬墓は有力氏族で檀越の一人ではなかったかと想定している。

このように想定するならば、笠見第3火葬墓と三林火葬墓(約500m間)も加勢蛇川を挟んで2km強東に位置する斎尾廃寺との関わり、その付近には八橋郡衙の正倉と考えられる大高野遺跡があり、郡衙所在地として比定されていること¹⁸⁾などから、これらの火葬墓の被葬者は僧尼、有力氏族で檀越などと考えることもできるだろう。

出雲平野の火葬墓 出雲平野で見つかっている古代の火葬墓は前記した築山火葬墓(SK19)・光明寺3号墓・菅沢古墓・西谷古墓・小坂古墳・朝山古墓の6例で、島根県内で検出された半数がここ出雲平野で見つかることになる。築山火葬墓以外は丘陵地に立地し、そのうち4例は石櫃が使用されている。

これらは出雲平野でも斐伊川と神戸川に挟まれた丘陵地に点在しており、偏りが生じている。これら丘陵地から西方向には神門郡家の比定地のひとつである古志本郷遺跡が所在しており、一定の距離を保って火葬墓が築かれた様相も見受けられる。これらの丘陵地は、弥生時代(西谷墳墓群)から古墳時代(大念寺古墳・上塩治築山古墳・地蔵山古墳・小坂古墳・上塩治横穴墓群など)にかけて広域的な墓域となっており、古代でもその概念が継続していたものではないだろうか。

火葬墓以外の形態の古代墓の検出は、出雲平野では皆無に近い状況であったが、築山遺跡平成18年度調査にて土壙墓が複数検出されたことは、この地域が上記したように墓域を継続していた証左となると思われる。

SK19の意味するもの 築山火葬墓(SK19)と同様な立地にあるのは、丘陵裾野の砂丘地に立地している青山古墓と清水古墓である。他は全て比高10m以上の丘陵上に位置し、居住域から隔離され、その居住域を眺望できる場所に埋葬地を確保しているように見受けられる。前記した3遺跡がなぜ他の古墓と違い低地部に立地しているのだろうか。3遺跡とも骨蔵器として、石櫃のように大掛かりでもなく、銅椀のような奢侈品でもない須恵器を使用している。この相違は被葬者の地位や身分を反映していると考えられ、同時に古墓の立地にも反映されていると思われる。

表3 島根・鳥取両県出土古代火葬墓一覧表

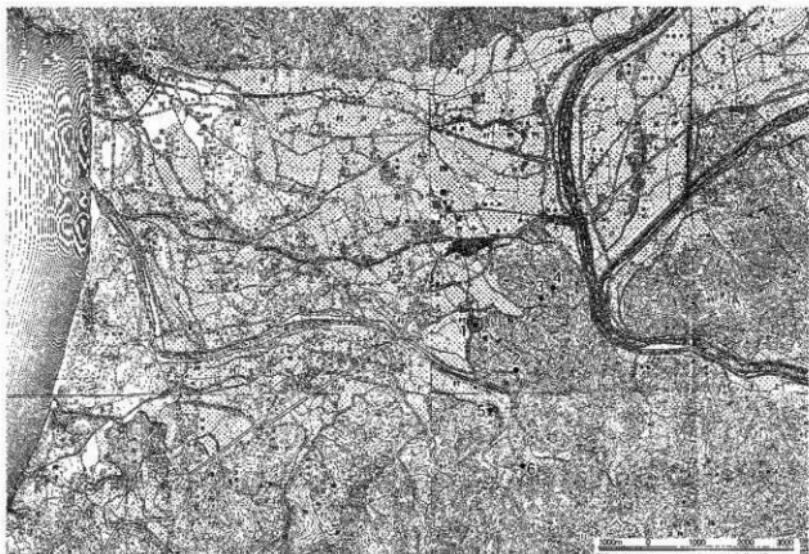
【青山古墓】
1. 江津市都野津町青山(丘陵裾野砂丘地) 2. 須恵器把手付短頭壺 3. 不明 4. 奈良時代後半
【清水古墓】
1. 江津市都野津町清水上(丘陵裾野砂丘地) 2. 須恵器短頭壺(蓋には須恵器高台付壺を利用) 3. 不明 4. 奈良時代後半
【波来浜火葬墓】
1. 江津市大字後地(標高10mの砂丘麓)土坑内、2基 2. 直納骨(火葬骨上副葬品として須恵器壺・皿、石帯、鉄製品) 3. 不明 4. 9世紀後半以降
【篠山火葬墓】(2区SK19)
1. 出雲市上塙治町(標高10mの微高地上)上坑内 2. 須恵器壺 3. 成人女性? 4. 8世紀前半
【光明寺3号墓】
1. 出雲市上塙治町(標高73mの丘陵斜面)後方斜面をもつマウンド 2. 石櫃(方形箱形、丸形納骨孔) 3. 熟年男性 4. 奈良時代
【皆沢古墓】
1. 出雲市上塙治町(標高40~50mの丘陵上) 2. 石櫃(半球状、半球状の納骨孔) 3. 不明 4. 中世以前
【西谷古墓】
1. 出雲市大津町(比高20~30mの丘陵上) 2. 須恵器壺 3. 不明 4. 8世紀末~9世紀前半
【小坂古墳】
1. 出雲市馬木町(水田より20m高い丘陵上)埴丘内 2. 石櫃(長方形箱形、丸形の納骨孔)銅輪骨蔵器の可能性 3. 不明 4. 8世紀初頭
【朝山古墓】
1. 出雲市朝山町(標高70~80mの丘陵斜面) 2. 石櫃(方形箱形、方形の納骨孔、蓋は四注式屋根形) 3. 不明 4. 不明
【杉沢Ⅲ遺跡】
1. 繁川郡斐川町(標高29mの丘陵上) 2. 須恵器壺(蓋には高壺を利用) 3. 不明 4. 8世紀末~9世紀初頭
【社日火葬墓】
1. 松江市竹矢町(標高22mの丘陵斜面) 2. 須恵器長頭壺(八稜鏡を蓋として利用?) 3. 不明 4. 10世紀末~12世紀前半
【中山火葬墓】
1. 安来市荒島町(標高48mの丘陵頂部)排水溝をもつ土坑内 2. 石櫃(方形箱形、方形の納骨孔、蓋は四注式屋根形) 3. 壮年男性? 4. 8世紀後葉~9世紀前半
【小久白火葬墓】
1. 安来市久白町(標高35.5mの丘陵斜面)土坑内 2. 須恵器壺(蓋には土師器壺と鉄鉢を利用) 3. 壮年男性? 4. 8世紀末~9世紀前半
【青木古墓】
1. 米子市青木(標高35mの丘陵斜面) 2. 石櫃(橢円形、方形の納骨孔) 3. 不明 4. 不明
【笠見第3火葬墓】
1. 東伯郡東伯町(標高71.5mの東南方向斜面)土坑内 2. 大型の土師器高台付壺(木櫃に納められていた可能性あり) 3. 不明 4. 10世紀
【三林火葬墓】
S X 1 1. 東伯郡東伯町(標高64mの丘陵斜面)石櫛 2. 土師器専用壺(入れ子状) 3. 不明 4. 9世紀中頃
S X 2 (火葬骨は未発見だがS X 1の東1m地点から発見され、周辺からは同時期の遺構が未発見のため) 1. 東伯郡東伯町(標高64mの丘陵斜面)土坑内 2. 須恵器長頭壺 3. 不明 4. 9世紀中頃
【長谷古墓】
1. 倉吉市向山(標高100mの丘陵斜面)石櫛 2. 土師器短頭壺(蓋には土師器壺・皿を利用)2個体 3. 壮年後期から熟年男性・成人女性? 4. 8世紀後半
【伊福吉郡徳尾足比充(いふきべのとこたりひめ)墓】
1. 岩美郡因府町宮下(丘陵)マウンド 2. 石櫃(方形箱形)銅製鉢(銅製の蓋上面には墓誌銘) 3. 従七位の女性 4. 和銅元年(708)死亡、和銅3年(710)火葬

註

- 9) 内藤政恒「古代・中世の墓制」『新版考古学講座6』1970
- 10) 黒崎直「近畿における8・9世纪の墳墓」『奈良国立文化財研究所学報 第38冊 研究論集VI』1980
- 11) 松尾充晶「古志本郷遺跡V」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X VI」2003島根県教育委員会
- 12) 北側に隣接する調査区(H18築山遺跡南区)を出雲市教育委員会で平成18年度に調査した結果、SK19より若干古い土壙墓が6基検出されており、周辺には当該期の墓域が形成された可能性がある(未報告)。また現在調査中のH18築山遺跡3区では同時期の建物遺構などが検出されつつある。
- 13) 原田敏照「中山遺跡」「一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区II」1994 島根県教育委員会
- 14) 「特輯 日本における古墳の終焉から古代の墳墓へ(1)・(2)」「古代文化 11・12」1999財團法人古代学協会
- 15) 参考文献
 - ・「墳墓」「新版考古学講座7」1984
 - ・片倉愛美「光明寺3号墓」「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II」2000 出雲市教育委員会
 - ・陰山真樹「杉沢Ⅲ遺跡」「斐川中央工業団地造成予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」2001 斐川町教育委員会(当該資料は人骨の可能性が高いため掲載する)
 - ・西尾克己ほか「社日古墳」「一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12」2000 島根県教育委員会
 - ・永見英「小久白遺跡詳細分布調査報告書」1984 安来市教育委員会
 - ・竹中孝治ほか「長谷遺跡発掘調査報告書」「倉吉市文化財調査報告書 第76集」1992 倉吉市教育委員会
 - ・牧本哲雄ほか「一般国道9号(東伯中山道路)の改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 島取県東伯郡東伯町笠見第3遺跡」「鳥取県教育文化財団調査報告書86」2004 鳥取県教育文化財団
 - ・家塙英詞ほか「一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV 島取県東伯郡東伯町三林遺跡」「鳥取県教育文化財団調査報告書88」2004 鳥取県教育文化財団
- 16) 内田律雄「いわゆる「久白廢寺」について」「出雲古代史研究 第12号」2002 出雲古代史研究会
- 17) 調査報告書では鉄鉢としているが、内田氏は鉄鉢と考えている
- 18) 註15の笠見第3遺跡・三林遺跡報告書による



(明治28年作成)



筑山火葬墓

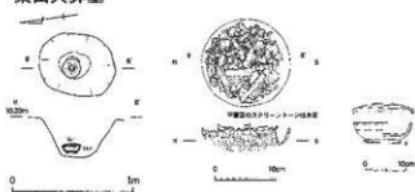
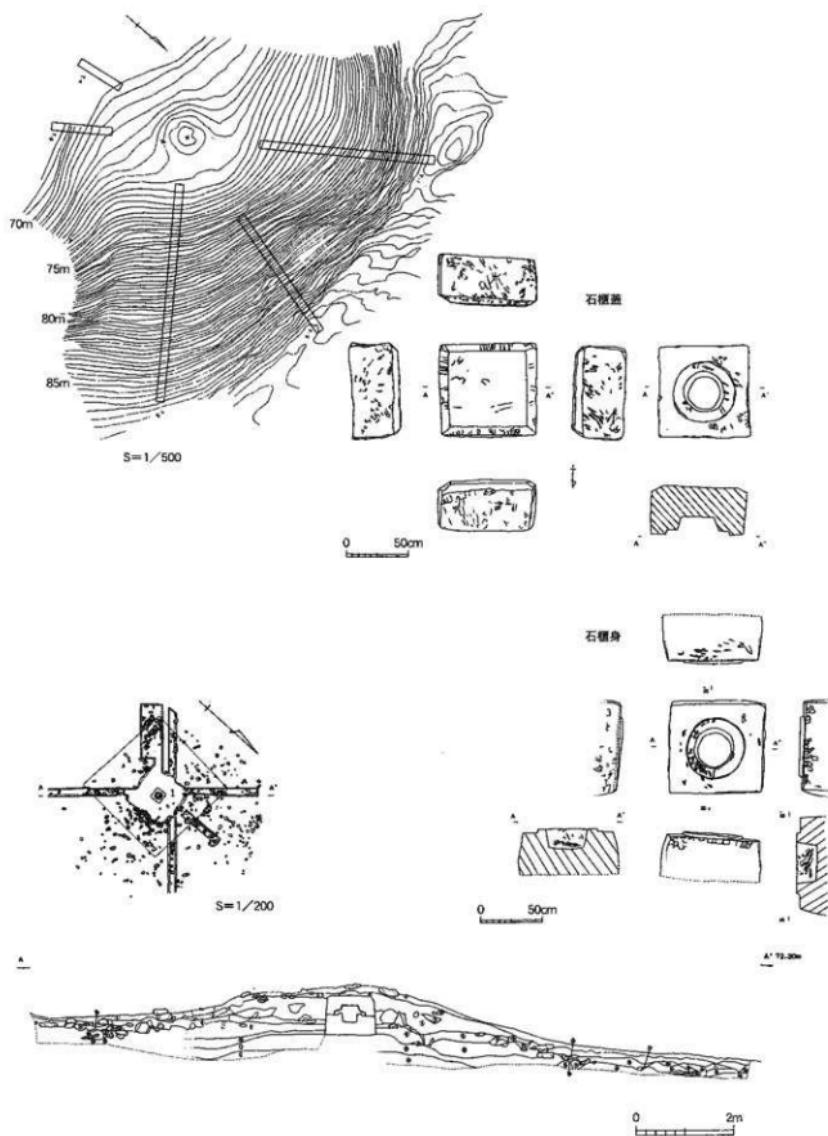


図56 島根県・鳥取両県出土火葬墓位置図及び島根県内出土火葬墓（1）

光明寺3号墓



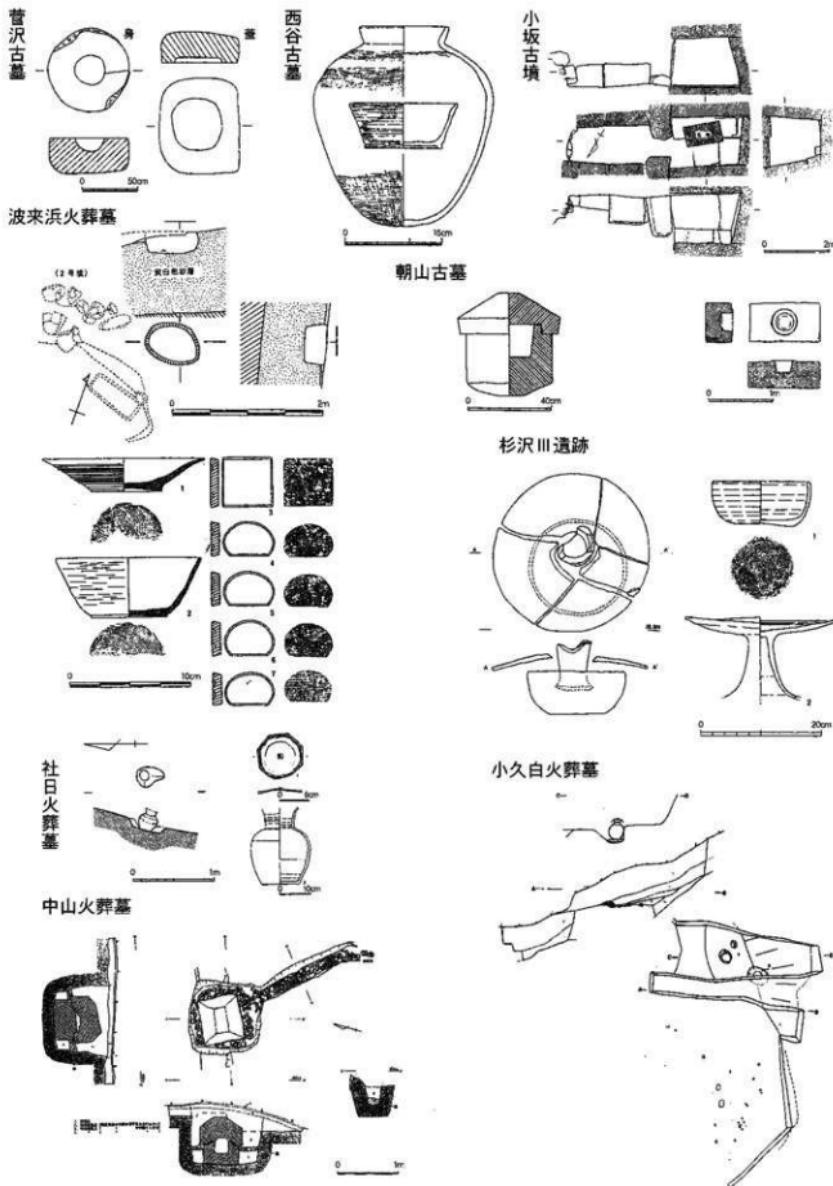
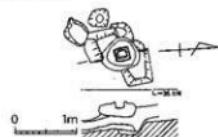
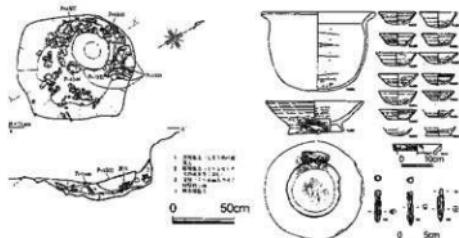


図58 島根県内出土火葬墓（3）

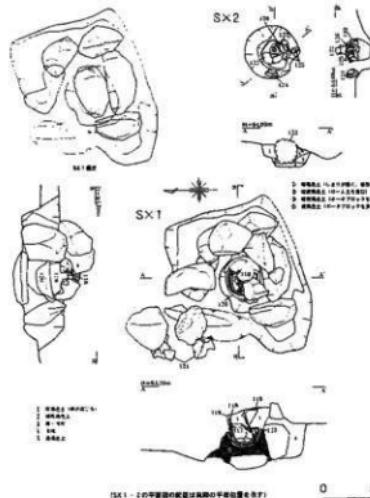
青木古墓



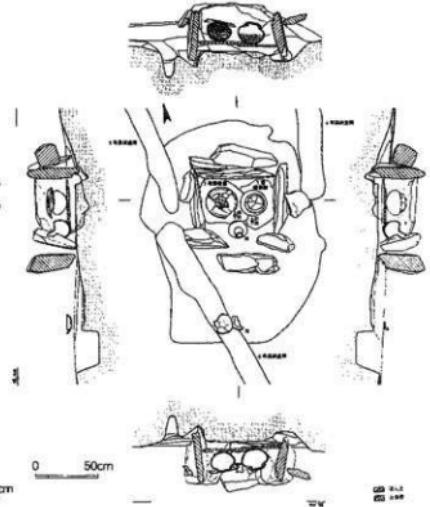
笠見第3火葬墓



三林火葬墓



長谷古墓



伊福吉部徳足比壳墓模式図

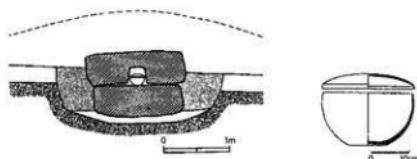


図59 烏取県内出土火葬墓

遺物觀察表

遺構内 土器

神奈番号	種類	出土地点	法長(cm)	形態・文様の特徴	主な調査	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
13-1	須恵器 耳皿	89gr SK19 3層	口径14.8 基点2.6 つまみ径 5.1	口縁部が垂直に下方に斜れ曲がる。 つまみは、形鉄化した低い輪状つまみ。	内面：回転模ナデ 天井部：ケズリのち回転模ナデ 内縁部：回転模ナデ	①1mmの大石英、長石などの 砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	8世紀前半
13-2	須恵器 耳皿	89gr SK19 2層	口径14.2 基点5.1 底径9.2	底端部に付く高台は、比較的高く脚部 間に面をもつ。 底部は平底で、体部はゆるやかに立ち 上がり、口縁部は丸く仕上げる。	体部内面：回転模ナデ 底面内面：ナデ 天井部：回転模ナデ 底面外縁：回転模ケズリ のち高台筋り付けのら同心 内ナデ	①1mmの大石英、長石などの 砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	8世紀前半
13-3	土器器 高台付环	89gr SK19 1層	高台径7.6	高台は底部に対しは斜度に付き、邊 部は丸い。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	①1mm以下の砂粒をや多く 含む ②普通 ③に bei 黄褐色	8世紀前半
16-1	土器器 环	89gr SK04 イ層(上段)	口径16.0	体下部から外縁しながら立ち上がる。 設上の屈折部よりほぼ直面に立ち上がり る、やや尖る気味でおさまる(口縁部 へと続く)。内外指とも朱絞り。	内面：ナデ 外裏上部：横ナデ 外裏中部：横ナデのちケズ リ	①1mm以下の石英、長石と若 干の角閃石などの砂粒を含む。 ②普通 ③浅黄色	古墳中一様 反転復元
16-2	須恵器 碗	89gr SK11	口径5.6	体部はやや内済気味に立ち上がり、丸 くおさめる口縁部へと続く。	内面：回転模ナデ 外裏：回転模ナデ	①石英などの微砂粒を含む ②良好 ③淡灰色	反転復元
16-3	須恵器 甕	89gr SK11	不明		内面：ナデ 外裏：猪子目(タキ目)	①1mm以下の石英などの微砂 粒を含む。 ②やや不良③灰白色	龜山系
18-1	土器器 环	89gr SK13	口径11.4 基点3.9 底径8.0	表部はやや済曲し安定性に欠ける。 赤色透青。	内面：回転ナデ 外裏：回転ナデ 底部：ケズリ	①2cm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③明黄色	底部に日本?庄 復あり。
18-2	須恵器 环身	d89gr SK22	口径10.8 基点3.5 底径6.0	たちあがりはやや内縮する。	内面：回転ナデ 外裏：回転ナデ 底部：ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	出雲3期
20-1	須恵器 蓋	g1-h4 SE01 上層	不明	天井部は、ほぼ平半で底部が上方に反 る。	内面：ナデ 外裏：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	
22-1	須恵器 甕	89gr SK05 1・2層	不明		内面：同心円のタキ目 外裏：平行のタキ目	泰良・平安時代 泰良	
22-2	土器器 环	89gr SK05 4層	口径12.5	体下部から内済しながら立ち上がり、 中ほどから進「ハ」の字状に開き丸く おさめる口縁部へと続く。内外指朱 絞り。	内面：回転模ナデ 外裏：回転模ナデ	①長石、石英、金星斑、角閃 石などの微砂粒を含む。 ②普通 ③に bei 黄褐色	8世紀後半 反転復元
22-3	土器器 环	89gr SK05 2・3層	底径6.0	底部は平底で、体部との境の接は明瞭 で少しシギりあり。体部は外傾する。	内面：不明	①1mm以下の石英、角閃石な どの砂粒と企畫けをや多く 含む。 ②やや不良に bei 黄褐色	13-14世紀 風化
22-4	土器器 环	89gr SK05 4層	口径14.0	体部は進「ハ」の字状に大きく述 き丸くおさめる口縁部へと続く。また、 体下部に段の筋部曲部なり。	内面：回転模ナデ 外裏：回転模ナデ	①石英、角閃石などの微砂粒 を含む。 ②普通 ③灰褐色	14世紀 反転復元
22-5	土器器 环	89gr SK05 1層	口径12.5 基点6.1 底径4.3	底部は平底で体部との境は明瞭。 体部は進「ハ」の字状に開き丸くおさめる 口縁部へと続く。	内面：回転模ナデ 外裏：回転模ナデ	①石英、金星斑、角閃石など の微砂粒を含む。 ②良好 ③に bei 黄褐色	14-15世紀 反転復元
22-6	土器器 小甕	89gr SK05 4層	不明	内済しながら立ち上がり、丸くおさめ る口縁部へと続く。	内面：回転模ナデ 外裏：回転模ナデ	①石英、角閃石などの微砂粒 を含む。 ②普通 ③に bei 黄褐色	13-14世紀 風化
25-1	須恵器 高台付环	89gr SK06 2層	底径6.9	高台部は貼り付け? 底部は中心に向って下がり気味。体部 は進「ハ」の字状に開く。	内面：回転模ナデ 外裏：回転模ナデ	①石英などの微砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	9世紀 反転復元
25-2	土器器 环	89gr SK06 3層	底径4.0	底部は平底で、体部との境の接は明瞭 でシギり度あり。 体部はやや内済気味に立ち上がる。	内面：不明 底面：回転条切りのち工具 ナデ	①石英、長石、角閃石などの 微砂粒をやや多く含む。 ②普通 ③に bei 黄褐色	12世紀 風化
25-3	土器器 环	89gr SK06 2層	底径4.4	底部は平底で、体部との境の接は明瞭 でシギり度あり。 体部はやや内済気味に立ち上がる。	内面：同心円ナデ 外裏：横ナデ 底部：回転条切り	①石英、角閃石などの微砂粒 を含む。 ②普通 ③に bei 黄褐色	12世紀

井筒番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調査	①輸入 ②焼成 ③色調	備考
25-4	土師器 环	gogr SK06 3層	底径6.3	底部は平底で体部との境の後は明瞭で、わずかにシギアリあり。 体部は外輪しながら立ち上がる。	内面：回転模ナデ 外面：ナデ 底部：回転糸切り	①2mm以上の石英、長石、角閃石などの微砂粒を含む。 ②普通 ③に bei 黄褐色	12世紀 反転復元
25-5	土師器 环	gogr SK06 3層②	底径4.9	底部は平底で体部との境の後は明瞭で、わずかにシギアリあり。 体部は外輪しながら立ち上がる。	内面：回転模ナデ 外面：回転模ナデ 底部：回転糸切り	①石英、角閃石などの微砂粒を含む。 ②普通 ③に bei 黄褐色	12世紀 反転復元
25-6	土師器 皿	gogr SK06 1・2層	底径3.3	底部は平底で体部との境の後はやや不明瞭。体部は逆「L」の字状に高く開き丸みのあるL字縁飾をと続く。	内面：不明	①石英などの微砂粒を含む。 ②やや小量 ③に bei 黄褐色	12世紀
25-7	青磁 碗	1 gogr SK05 1層 gogr SK05 2層	口径14.8	内面に弦文。	内面：施釉	①無青 ②良好 ③青褐色	12世紀後半 龍泉窯系1-4 類
25-8	土師器 不明	gogr SK06 3層	不明	高台付きの底部？	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の石英、企窓的な砂粒を含む。 ②良好 ③灰白色	中世
25-9	須恵器 壺	gogr SK06 3層	不明		内面：丁寧なナデ 外面：格子目のタタキ	①1mm以下の石英などの砂粒を含む。 ②やや不良 ③灰白色	12-13世紀 スヌ付着
25-10	白磁 碗	gogr SK06 3層	底径5.0	高台部は高く外向性に付き、突出し高台は、ほぼ垂直方向で、並付けは平坦。	高台：回転ナデ	①密 ②良好 ③灰白色	中世 青白
28-1	七輪器 皿	gogr SK07 5層	口径8.6 高さ1.8 底径4.2	体部は、底部から緩やかに内凹して立ち上がる。	内面：ナデ？ 底部：回転糸切り	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③青褐色	・鉛釉化 反転復元
28-2	土師器 皿	gogr SK07 5層	口径8.8 高さ1.8 底径3.7	口縁部はやや内凹している。 底部は凹む。	内面：ナデ 外面：ナデ 底部：回転糸切り	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③青褐色	13世紀
28-3	土師器 皿	gogr SK07 5層	口径8.5 高さ2.0 底径4.0	口縁部はやや内凹している。	内面：ナデ 外面：ナデ 底部：回転糸切り	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③褐色	13世紀
28-4	土師器 皿	gogr SK07 5層	口径8.8 高さ2.0 底径4.0	底部と体部の境が不明瞭。また、外面に縦縞をもつ。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③白褐色	13世紀？ 青白
28-5	土師器 皿	SK07 サブトレ	口径9.0 高さ2.1 底径4.2	体部はやや内凹する。 底部は凹む。	内面：ナデ 外面：ナデ 底部：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③白褐色	13世紀 反転復元
28-6	土師器 皿	gogr SK07 5層	口径9.3 高さ1.9 底径4.1	口縁は「ハ」の字状に開き、縫合は丸い。 底部は凹む。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③明褐色	13世紀
28-7	土師器 皿	gogr SK07 5層	口径9.0 高さ1.7 底径4.4	体部はやや内凹する。	内面：ナデ？	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③明褐色	13世紀
28-8	土師器 环	gogr SK07 2・3層	口径15.0 高さ4.4 底径5.2	体部はやや内凹して立ち上がり、外面に縦縞をもつ。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③明褐色	13世紀 青白
28-9	七輪器 环	gogr SK07 1-3層	口径15.0 高さ4.3 底径5.3	口縁部はつまんで腰くし、やや外反して立ち上がる。	内面：ナデ？	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③白褐色	13世紀
28-10	土師器 环	gogr SK07 神燈	口径15.7 高さ5.1 底径4.7	体部は底部からやや内凹して立ち上がるが、口縁部では外反する。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③青褐色	12世紀-13世紀？
28-11	土師器 环	gogr SK07 5層 サブトレ	口径16.4 高さ4.3 底径5.6	体部は、ほげ直線的に立ち上がり、外間に縦縞をもつ。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	11世紀 反転復元
28-12	土師器 环	gogr SK07 3層	口径15.4 高さ5.1 底径5.4	体部は、底部からやや内凹して立ち上がる。口縁部は外面にやや肥厚して丸くおさまる。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③灰褐色	12世紀-13世紀？

辨別番号	器種	出土地点	法長(cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①底土 ②焼成 ③色調	備考
28-13	土師器 环	♂gr SK07 6層	口径15.2 底径6.4	口縁部はつまんで縮くし、縁部はやや外反する。	内面：ナデ？ 外面：凹軸ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰褐色	12~13世紀？
28-14	土師器 环	♂gr SK07 5層	底径6.4	全体に明瞭な波線をもつ。	内面：横ナデ 外面：凹軸ナデ 底部：凹軸系切り	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③明褐色	12~13世紀？
28-15	土師器 环？	♂gr SK07 6層	底径6.4	底縁部に強いナデをしている。	内面：凹軸ナデ 外面：凹軸ナデ 底部：凹軸系切り	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③明褐色	12~13世紀？
30-1	土師質土器 鉢？	♂gr SK08 2層	小鉢	口縁端間に凹部あり。	内面：ハケナメ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③黄褐色	
30-2	土師器 皿	♂gr SK20 上層	口径6.4 器高1.8 底径4.0	底部と縁部の境が不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。 底部は弧曲。	内面：凹軸ナデ 外面：凹軸ナデ 底部：凹軸系切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③明褐色	反転復元
33-1	須恵器 高环	♂gr 周溝	口径15.8 器高14.3 底径12.2	外部は直状を呈し、造りは2段で2条の沈線を施す。 脚部は、ほど下垂している。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期 反転復元
33-2	須恵器 高环	♂gr 周溝	口径10.9 器高11.5 底径7.7	環部は平らな底面から体部が直立し、2条の沈線を施す。造りは2段で2段で上段造りには切れ込み狀で下段は方形。脚部の面は直立する。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期 反転復元
33-3	須恵器 高环	♂gr 周溝	底径14.0	造りは2段で上段は三角、下段は方形。脚部の面はやや内傾し、縁部は垂下する。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰色	
33-4	須恵器 皿	♂gr 周溝	口径22.0 器高4.3	大口部は全体的に丸みを帯び、かえりが付く。つまみは輪状。	内面：ナデ 外面：ケズリのちナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期 反転復元
33-5	須恵器 环茎	♂gr 周溝	口径12.8 器高4.0	火垂部と体部の端に沈線・火核もなく丸みを帯びているが、口縁端部で僅かに下へと向いて見える。	内面：横ナデ 外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期 内面に赤色顔料が付着。
33-6	須恵器 环茎	♂gr 周溝	口径12.8 器高4.0	天井部と体部の端に沈線・火核もない。口縁端部で僅かに下方へ向きを変えて、丸くおさまる。	内面：横ナデ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期
33-7	須恵器 环身？	♂gr 周溝		体部に2条の沈線がある。	内面：ナデ 外面：ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	
33-8	須恵器 环身	♂gr 周溝	口径12.0 器高4.8 底径4.0	たちあがりは直く内傾し、先端に向て先振りになる。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期
33-9	須恵器 笠板	♂gr 周溝	器高14.7	口縁部は直線的に外傾する。また、把の痕跡は見られない。	内面：ナデ？ 外面：カキ目調整	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲5期？
33-10	須恵器 直口壹	♂gr 周溝	口径6.6 器高9.1 底径4.7	口縁は真上に直線的に立ち上がり、肩部がやや張る。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	
33-11	須恵器 長颈壹	♂gr 周溝	高台径8.6	基部二方に、3つの円形浮文が付き、肩部がやや張る。また脚部は丸くおさまり。	内面：横ナデ 外面：ナデ、カキメ、ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲6~7期？
33-12	須恵器 环身？	♂gr 周溝	高台径7.0	脚部はつまみナデで先端を細くしている。	内面：ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	
35-1	須恵器 壹？	♂gr SD01 1層		口縁下端部の断面は三角状に肥厚し、基部との境に段をもつ。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②やや不良 ③黄白色	
38-1	須恵器 环身	♂gr SD09 1層	口径12.0 器高3.8 底径4.0	たちあがりは、やや内傾する。	内面：凹軸ナデ 外面：凹軸ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲4期？ 反転復元
38-2	土師器 皿	♂gr SD09 1層		口縁端部が内面に肥厚する。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①3mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③黄褐色	
40-1	土師器 皿	♂gr SD13 1層	口径11.6	口縁端部が外反し、丸くおさまる。 赤色斑紋	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③黄褐色	反転復元

遺構内 その他

探査番号	種 別	出土位置	法量(cm)	備 考	博出数	種 別	出土位置	法量(cm)	備 考
13-4	磨石	Bgr SK09 1層	最大長8.8 最大幅7.5 最大厚9.3		28-16	土器	gogr SK07 1層	最大長4.8 最大幅4.6 口徑0.4	錐錐形土器
13-5	器	Bgr SK09 1層	最大長18.0 最大幅13.9 最大厚6.4	磨純面があるが人工的なものは不明。	28-17	砥石	gogr SK07 2層	残存長5.7 残存幅0.4 残存厚8.7	族器の砥石片で、磨き面を2面もつ。
22-7	打製石斧	Bgr SK05 4層	残存長9.7 残存幅7.1 残存厚2.8	表面の平頭部は刃傷痕が観察されるので、砥石として再利用されたものと思われる。	29-1	羽口	gogr SK07 5層	残存長1.7 残存幅0.9	羽口の先端が内側に残っていた羽形沿の残骸に付着。
22-8	砥石	Bgr SK05 3・4層	残存長10.3 残存幅0.9 残存厚6.5	被熱痕らしき黒色部あり。	29-2	鐵治海	gogr SK07	残存長7.2 残存幅10.3 残存厚5.4	上面、下面、側面とともに木炭をかんでいる。
22-10	磨石	Bgr SK05 2層	残存長12.8 残存幅7.7 残存厚5.3	ほぼ全面を使用。	29-3	鉢形漆	gogr SK07 3層	残存長6.0 残存幅6.2 残存厚5.4	中央上下方向に複数の直状くびがある。
22-13	板状木製品	Bgr SK05 4層	残存長14.7 残存幅5.1 残存厚8.0		29-4	鐵治海	gogr SK07 2・3層	残存長4.4 残存幅3.5 残存厚1.8	小さな気泡状孔多数。
22-14	角材	Bgr SK05 3・4層	残存長12.4 残存幅7.6 残存厚4.5	欠損部分が多い。	29-5	羽口	gogr SK07 2・3層	残存長4.4 残存幅1.7 残存厚2.0	
22-15	角枕	Bgr SK05 4層	残存長24.1 残存幅3.5 残存厚2.7		43-1	瓦石	cogr SX02	残存長2.4 残存幅1.4 残存厚1.6	4面とも使用
23-9	瓦石	Bgr SK05 4層	残存長24.7 残存幅13.6 残存厚18.4	被熱痕らしき黒色部あり。	43-2	瓦石	hogr SX02 4層	残存長2.4 残存幅10.0 最大厚4.7	
23-11	台石	Bgr SK05 1層	残存長26.3 残存幅15.2 残存厚9.3	残存長26.3 磨輪側面に敲打した痕跡あり。					
23-12	台石	Bgr SK05 4層	最大長20.0 最大幅11.9 最大厚7.9	最大長20.0 表裏面とともに使用。					
25-11	砥石	Bgr SK06 4層	残存長4.4 残存幅2.9 残存厚3.7						
25-16	曲物	Bgr SK06 3層	残存長16.1 残存幅3.6 残存厚0.8	残存長16.1 内面に墨色塗り(津塗り?)					
25-17	漆板材	Bgr SK06 4層	残存長28.2 残存幅4.9 残存厚0.4						
25-18	丸枕	Bgr SK06 3層	残存長15.5 残存幅6.2						
26-12	台石	Bgr SK06 3層	最大長23.8 最大幅23.0 最大厚10.3	ほぼ全面使用しているが、特に表裏の中央付近は研磨されている。					
26-13	台石	Bgr SK06 3層	最大長15.6 最大幅15.9 最大厚9.6	表面を中心に全面使用している。また、表面を中心にスグ付着している。					
26-14	台石	Bgr SK06 3層	残存長16.7 残存幅14.3 残存厚8.7						

辨別番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調査	①粘土 ②焼成 ③色調	備考
44-1	陶土土器 底?	cigr 3層	不明	肩部に1条の弦紋が施されている。	内面:ハケ 外側:ナデ	①1mm以上の石英などを含む。 ②良好 ③淡黄褐色	弥生中期
44-2	陶土土器 裏	figr 2層	口径34.0	口縁部に凹巻がある。	内外面:ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②や不良 ③黄褐色	Ⅲ-1 or 2 反転復元
44-3	土師器 底跡坏	b4gr 2層	不明	肩部は「ハ」の字状に小さく開く。	内外面:不明	①2mm以下の石英・長石・角 閃石などを含む。 ②普通 ③灰白色	古墳初期 古墳復元
44-4	土師器 环	f4gr 2層	口径13.0 器高4.4	口縁部はつまんで幅くし、やや外反 している。赤色像形。	内面:ナデ 外側:ハケ目	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③白褐色	古墳中期? 反転復元
44-5	土師器 环	f4gr 2層	不明	底部と体部の境に段をもつ。赤色像形。	内面:不明 外側:ハケ目	①砂粒をあまり含まない。 ②や良好 ③明褐色	古墳中期? 反転復元
45-1	須恵器 环茎	b7gr 3層	口径12.4 器高3.8	口縁部を段状にし、肩部に1条の弦 紋を施している。	内面:回転ナデ 外側:回転ヘラケメリ 回転ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	出来3期 反転復元
45-2	須恵器 环茎	b7gr 3層	口径13.0	口縁部に1条の腰をもち、肩部に2条 の弦紋を施している。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	出来4期 反転復元
45-3	須恵器 环身	f2-f3 セクション ベルト3層	口径12.8	たちあがりが、やや内傾している。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①2mm以下の砂粒を僅に含む。 ②良好 ③灰白色	出来4期 反転復元
45-4	須恵器 环身	二角区 直サブトレ	口径12.8	たちあがりが、ほぼ直立する。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	出来5 or 6期 反転復元
45-5	須恵器 环茎	cigr 地山直上	口径11.6	かえりは内傾する。	内面:ナデ 外側:回転ナデ	①4mm程度の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	出来6期? 反転復元
45-6	須恵器 环茎	st-15gr 側傾	口径12.6 器高3.0	かえりが付き、つまみは輪状。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	出来6-7期
45-7	須恵器 环茎	15gr 復出時	口径24.0	口縁部が垂下せず、「ハ」の字状に 開く。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②不良 ③灰褐色	9世紀? 反転復元
45-8	須恵器 环茎	f4gr 地山直上	口径15.0	尖井部と体部の境がやや角張り、口縁 部等は垂下する。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②不良 ③白褐色	反転復元
45-9	須恵器 茎	d2gr 2b層	口径12.2 器高1.8	尖井部は中心に向かってややくぼみ、 肩部から「ハ」の字状に大きく開きな がら下落し垂直に折れ、肥厚し丸みの ある肩部へと致く。	内面:不明	①1mm以下の石英・角閃石な どを含む。 ②不良 ③灰白色	反転復元 8世紀
45-10	須恵器 环茎	b6gr 3層	口径15.0	口縁部に段を有し、口縁部は垂下す る。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰白色	8-9世紀? 反転復元
45-11	須恵器 环茎	b3gr 3層	口径13.0	尖井部がほぼ水平で、端部はほとんど 垂下しない。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	④ほとんど砂粒を含まない。 ②良好 ③灰褐色	8世紀? 反転復元
45-12	須恵器 环身	b6gr 3層	口径15.8	口縁部がやや外反する。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰褐色	反転復元
45-13	須恵器 环身	f5-f6 セクション ベルト2c切	口径16.4	口縁部は、ほぼ直立する。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	反転復元
45-14	須恵器 环身	f5gr 3層	口径17.6	口縁部は、やや外反する。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰褐色	反転復元
45-15	須恵器 环身	f5gr 2層	口径11.4 器高3.8 底径6.2	体部は底部から外傾してたちあがる。 底部は回転糸切り。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰褐色	8-9世紀 反転復元
45-16	須恵器 环身	c4gr 2b層	口径11.7 器高4.0 底径7.0	体部は底部より緩やかにたちあがる。 底部は回転糸切り。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰褐色	8世紀? 反転復元
45-17	須恵器 鉢?	c4gr 3層	底径10.2	底部は平坦で、内面に明確な段をもつ。	内面:回転ナデ 外側:回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰褐色	反転復元

件番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①筋土 ②焼成 ③色調	備考
45-18	須恵器 高台付环	i4-15gr 舞浜	口径13.2 器高4.7 高台径7.6	口縁は内溝してたちあがり、高台は高く「ハ」の字状に聞く。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲7-8期 反転復元
45-19	須恵器 高台付环	17gr 3号	口径12.0 器高4.0 高台径10.0	底部は底盤から腰やかに立ち上がり、口縁端部は外反する。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③灰色	8世紀 反転復元
45-20	須恵器 高台付环	12gr 3号	高台径9.4	底盤部に低い貼り付け高台が付く。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデのちナデ	①3mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰色	反転復元
45-21	須恵器 高台付环	15gr 3号	高台径9.4	底盤部に低い窓高台が付く。	内面：ナデ 外面：回転ナデ	①3mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰白色	反転復元
45-22	須恵器 高台付环	45gr 2d-3b層	高台径8.0	低い貼り付け高台は丸みをびびり、舞済面に1条の溝がある。 全体は内溝しながら立ち上がる。	内面：回転模ナデ 外面：回転模ナデ 底部：へきるしのち高台 貼り付けのち回転模ナデ	①1mm以下の石英、長石などを含む。 ②良好 ③灰色	8世紀前半 反転復元
45-23	須恵器 高台付环	65gr 2d-3b層	高台径8.1	貼り付け高台は、やや内凹向きに付き脚踏部は平坦。 全体は底盤から器體へ内曲して立ち上がる。	体高内面：回転模ナデ 底面内面：回転模ナデのちナデ 体高外面：回転模ナデ 底面外面：回転ヘラ起こしのちナデ	①石英、長石などの微砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	8世紀 反転復元
45-24	須恵器 高台付环	62gr 2b層	高台径9.0	貼り付け高台は、やや内溝気味に付き、脚踏部は平坦。 全体は内溝しながら立ち上がる。底盤は中央部に向って傾く。	内面：回転模ナデ 外面：回転模ナデ	①石英、長石などの微砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	8世紀 反転復元
45-25	須恵器 高台付环	67gr 3号	高台径8.8	貼り付け高台で、脚踏部の面は少し内傾する。 全体は内溝しながら立ち上がる。	内面：回転模ナデ 体高外面：回転模ナデ	①石英、長石などの微砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	8世紀 反転復元
45-26	須恵器 高台付环	61gr 2b層	高台径8.4	体高は追「ハ」の字状に外傾して立ち上がる。高台は低く「ハ」の字状に傾き、脚踏部は斜削の面。	内面：回転模ナデ 外面：回転模ナデ	①長石、石英などの微砂粒を少量を含む。 ②やや不直 ③灰色	8世紀 反転復元
45-27	須恵器 高台付环	15gr 4号	高台径8.6	底部内側に「X」字状の模刻あり。	内面：回転ナデのちナデ 外面：回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	反転復元
45-28	須恵器 高台付环	調查区外 舞浜付近	高台径5.2	貼り付け高台は、外向向きに付き、脚踏部に1条の溝がある。 全体は内溝しながら立ち上がる。	内面：同心円ナデ 体高外面：回転模ナデ 底面外面：回転ヘラ起こしのちナデ	①石英、長石などの微砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	8世紀 反転復元
45-29	須恵器 皿か盤	13gr 1号	口径14.5 器高1.8 底径9.0	口縁端部はつまんで、圓錐状になっている。	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰白色	反転復元
45-30	須恵器 皿	61gr 2b層	口径16.0	体高は、追「ハ」の字状に外反して立ち上がり、やや先細りになり、口縁端部はおさまる。	内面：回転模ナデ 外面：回転模ナデ	①石英、長石などの微砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	8世紀 反転復元
45-31	須恵器 皿か盤	不明	口径13.4	口縁端部は外反している。	内面：回転ナデのちナデ 外面：回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰白色	反転復元
45-32	須恵器 皿	12gr 2層 中・下層	不明	内面：ナデ 外面：ナデ	①3mm以下の砂粒を僅かに含む。 ②良好 ③灰色	反転復元	
45-33	須恵器 脚部	14gr 検出時	不明	横ナデの後に波状文が施されている。	内面：ナデ 外面：ナデ	①3mm以下の砂粒を僅かに含む。 ②良好 ③灰白色	反転復元
46-1	須恵器 長颈甕	14gr 2-4層	口径11.8	肩部に沈文と柄突文を施している。	内面：回転ナデのちナデ、タタキ 外面：回転ナデ、横ナデ、タタキのちミガキ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲4-6期 反転復元、16-2と同・個体の可能性有り。
46-2	須恵器 長颈甕	14gr 2-3層	高台径14.4	脚部は内傾し、明瞭な面をもつ。	内面：タタキのちナデ 外面：タタキのちナデ、ミガキ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	出雲5-6期 反転復元
46-3	須恵器 盤類	66gr 3号	口径16.2	口縁は極く外反している。	内面：ナデ 外面：ナデ	①3mm以下の砂粒を若干含む。 ②良好 ③灰白色	反転復元
46-4	須恵器 甕	12イン サブトレ	口径22.0	口縁端部がやや肥厚し、丸く仕上げている。	内面：横ナデ 外面：格子目タタキ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰白色	反転復元

件名番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調査	①船上 ②既成 ③色調	備考
46-5	須恵器 壺	bigr 横出時	口径22.4	口縁端部から外反している。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①1mm以下の砂粒を僅かに含む。 ②良好 ③灰色	反転復元
46-6	須恵器 壺	bigr 3層	口径17.8	口縁端部で肥厚し丸く仕上げている。	内面：タキのちカキ貝 外面：青海波文	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③灰色	反転復元
46-7	須恵器 壺	bigr 2B層	口径30.6	外側しながら立ち上がり、斜面上に 延長し、丸くおさめる口縁端部へと接する。	内面：ナデ 外面：同軸横ナデ	①石英、長石などの微砂粒を 含む。 ②良好 ③灰色	古墳後期 反転復元
46-8	須恵器 壺	bigr 2B層	口径33.0	口縁部はラバ式に開き、突唇をもち、 突り気味の縁部へと接する。	内面：同軸横ナデ 外面：同軸横ナデ	①石英、長石などの微砂粒を 含む。 ②良好 ③褐色	古墳後期 反転復元
46-9	須恵器 壺	bigr 2D層	口径6.0	口縁端部は丸く、肩部へ向けて「ハ」 の字状に大きく開く。	内面：同軸横ナデ 外面：不明	①1mm以下の石英などを含む。 ②良好 ③灰色	自然接着 反転復元
47-1	須恵器 壺	bigr 2層 3層	口径60.0	口縁部に沈線と波状文が施され、口縁 端部は丸く仕上げている。	内面：ナデ 外面：ナデ	①ほとんど砂粒を含まない。 ②良好 ③黄褐色	反転復元
47-2	須恵器 壺	bigr 2B層	口径58.0	口縁部に沈線と波状文が施されている。	内面：ナデ 外面：ナデ	①ほとんど砂粒を含まない。 ②良好 ③黄褐色	反転復元
48-1	円筒埴輪 体部	bigr 埴山廻上	不明	タガはやや下向き。	内面：ナデ 外面：ハチのちナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-2	円筒埴輪 体部	bigr 2B層	不明	タガは直接に突出し、端部は平坦。	内面：ナデ 外面：不明	①2mm以下の砂粒を含む。 ②やや不良 ③橙色	反転復元 一部風化
48-3	円筒埴輪 体部	bigr 2層下層	不明	タガはやや下向きで、端部は平坦。	内面：ナデ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-4	円筒埴輪 体部	bigr 2層中層	不明	タガは直接に出ている。	内面：ナデ 外面：ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-5	円筒埴輪 体部	bigr 2層中層	不明	タガは直接に出て、端部はほぼ平坦。	内面：ナデ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-6	円筒埴輪 体部	bigr 2層	不明	タガは直接に出て、端部が凹む。	内面：ナデ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-7	円筒埴輪 体部	bigr 2B層	不明	幅広く高いタガを有する。	内面：ナデ 外面：ナデ	①5mm以下の石英、長石、角 閃石などの砂粒を含む。 ②普通 ③にふい褐色	古墳後期 反転復元
48-8	円筒埴輪 体部	bigr 3層	不明	タガは直角に出て、端部は平坦。	内面：ナデ 外面：ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-9	円筒埴輪 体部?	bigr 2B層	不明	タガは直角に出て、高い。	内面：ナデ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②やや不良 ③にふい褐色	古墳後期 風化 反転復元
48-10	円筒埴輪 底部	bigr 埴山廻上	底径16.0	底部は丸くおさまっている。	内面：ナデのち指腹压痕 外面：ナデのち指腹压痕	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	反転復元 一部風化
48-11	円筒埴輪 体部	bigr 2B層	不明	円形のスカンの部分と思われる。 体部は直立して立ち上がり、皿盤状の 凹みはタガの下端と考えられる。	内面：粗縫なナデ 外面：横ハケ	①1mm以下の石英、長石、角 閃石などの砂粒を含む。 ②普通 ③にふい褐色	古墳後期
48-12	円筒埴輪 体部?	bigr 2B層	不明	ほぼ直立して立ち上がり、断面方形の タガを有する。タガの端部は斜材に中 央が凹むもののほぼフラットで、ほぼ 水平に突出する。	内面：ナデ、指腹压痕 外面：ナデ	①1mmの大石英、長石などの 砂粒を含む。 ②普通 ③にふい褐色	古墳後期
48-13	円筒埴輪 体部?	bigr 2B層	不明	突唇の刺離部がある。	内面：ナデ 外面：ナデ	①1mmの大石英、長石などの 砂粒を含む。 ②やや不良 ③褐色	古墳後期
48-14	円筒埴輪 体部	bigr 2A・2B層	不明	断面方形で奥出張1.5cmのタガを有し、 タガの端部は斜材に半屈曲をもち、ほ ぼ平手に突出し下方が出る。	内面：凸柱状工具と指によ る圧痕 外面：ナデ、指印え	①1mmの大石英、長石などの 砂粒を含む。 ②普通 ③褐色	古墳後期
48-15	須恵器 子持杯	ライン サブトレ	不明	突唇の刺離部あり。	内面：ナデ、指腹压痕 外面：ハケ	④4mm程度の砂粒を含む。 ②良好 ③褐色	
50-1	土器器 壺	bigr 2層下層	口径19.0	口縁端部はやや丸い。	内面：ハケメ、ケズリ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②やや不良 ③褐色	反転復元

施番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な測定	①軽上 ②横 ③色調	備考
50-2	土師器 甕	14gr 3層	口径16.0	口縁部の内面は肥厚する。	内面：ナデ 外面：横ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②やや不良 ③暗褐色	反転復元
50-3	土師器 甕	ekgr 2d層 施山室上	口径18.4	体部はやや内凹気味に立ち上がり、大きく開いて、丸くおさめる口縁部は続く。	口縁部内面：ナデ。指印 体部内面：ケズリ 口縁部外面：横ナデのち指印 体部外側：ナデ	①3mm以下の石英、長石などの砂粒をやや多く含む。 ②やや不良 ③暗褐色 ④に赤い褐色	反転復元
50-4	土師器 甕	h7gr 焼出跡	口径24.0	口縁部は薄手で端部は丸い。	内面：ナデ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②やや不良 ③明褐色	反転復元 一部風化
50-5	土師器 甕	c10gr 3層	口径25.6	口縁部外表面が更厚して、丸くおさまる。	内面：ハケのちナデ 外面：ハケのちナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③明褐色	反転復元 スス付層
50-6	土師器 甕	g7gr 2層	口径29.0	口縁部に剛直な面をもつ。	内面：ハケのちナデ 外面：ナデのちナケ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③暗褐色	反転復元
50-7	土師器 甕	g6gr 3層	口径26.0	口縁部の法線状の凹みは、容器を厚くするための裏地のinezと見思われる。	内面：ナデ、ケズリ 外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を多く含む。 ②良好 ③明褐色	反転復元 一部風化
51-1	土師器 甕	15gr 3層	底径8.0	底部からゆるやかに外反して立ち上がる。 赤色彫刻	内面：ナデ 外面：ナデ	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③灰白色	反転復元
51-2	土師器 甕	b1gr 2B層	底径6.2	平底で底部と体部との境界は後頭で、体部は逆「ハ」の字状に開いて立ち上がる。	内外面：不明 底部：圓軸系切り	①1mm以下の石英、長石、角閃石と若干の金雲母の砂粒を含む。 ②良好 ③浅黃褐色	12世紀 風化
51-3	土師器 甕?	gl-111gr サブトレ	底径5.2	底部と体部の境がやや内済している。	内面：圓軸ナデ 外面：圓軸ナデ 底部：圓軸系切り	①砂粒をほとんど含まない。 ②良好 ③赤褐色	
51-4	土師器 甕	c1gr 2D・2H層	底径6.0	平底で底部と体部との境界の縁が甘く、底部から体部への立ち上がり部分がややくぼむ。 体部は逆「ハ」の字状に開いて立ち上がる。	内外面：不明	①角閃石、石英などの微細砂粒を少々含む。 ②普通 ③淡黄色	13世紀 風化
51-5	土師器 甕?	f6gr 3層	底径4.5	体部と底部の境が不規則で、底部にはほぼ平底。	内外面：不明	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③明褐色	風化
51-6	土師器 甕?	h6gr 3層	底径5.4	底部と体部の縁がやや内済し、体部はやや外傾しながら立ち上がる。	内面：不明 外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③明褐色	風化
51-7	土師器 甕	b6gr 2A層	底径5.4	平底で底部から体部への立ち上がり部分が僅かにしょぼり、「ハ」の字状にやや内済気味に立ち上がる。	内面：圓軸ナデ 外面：不明 底部：圓軸系切り	①1mm以下の石英、角閃石、金雲母などの砂粒を含む。 ②普通 ③浅黃褐色	11-12世紀 一部風化
51-8	土師器 甕	d1gr ②B層	底径6.4	底部は僅かにくぼり度で、体部との境は僅かにしょぼり。「ハ」の字状にやや内済気味で、しばり有り。 体部は底面に逆なり逆「ハ」の字状に開く。	内外面：不明 底部：圓軸系切り	①2mm以下の赤鐵、磁子、石英と僅かな金雲母などを含む砂粒。 ②やや不良 ③浅黃褐色	12-13世紀 風化
51-9	土師器 甕	a1gr 2B層	底径6.0	平底で底部から体部への立ち上がり部分が僅かにしょぼり、やや内済気味に、「ハ」の字状に開いて立ち上がる体部へと続く。	内面：同心円ナデ 外面：不明 底部：糸切り	①石英、長石、若干の金雲母などの砂粒を含む。 ②普通 ③浅黃褐色	12世紀 反転復元 一部風化
51-10	土師器 甕	a2gr 2B層	底径6.0	平底で底部から体部への立ち上がり部分が僅かにしょぼり、やや内済気味に、「ハ」の字状に開いて立ち上がる体部へと続く。	内面：同心円ナデ 外面：不明 底部：糸切り	①石英、長石、若干の金雲母などの砂粒を含む。 ②普通 ③灰青色	12世紀 反転復元 一部風化
51-11	土師器 甕	b1gr 2B層	底径7.6	平底で底部と体部との境は甘く、立ち上がりの立ち上がり部分が僅かにしょぼり、「ハ」の字状に開いて立ち上がる。底部以外は赤色伴存。	内面：不明 外面：圓軸ナデ	①石英、長石などを少量含む砂粒。 ②普通 ③灰青色	8世紀 反転復元 一部風化
51-12	土師器 甕	a1gr 2B層	底径6.2	平底で底部から体部への立ち上がり部分が僅かにしょぼり、やや内済気味に、「ハ」の字状に開いて立ち上がる。体部と底は黒。	内面：不明 底部：粗粒な圓軸系切り	①1mm以下の石英、金雲母、長石などの砂粒を含む。 ②やや不良 ③黃褐色	13世紀 一部風化
51-13	土師器 甕	d1gr 2B層	底径5.6	底部は平底で、体部との境は後頭で、体部は逆「ハ」字状に大きく開く。	内面：同心円ナデ 外面：不明 底部：圓軸系切り	①1mm以下の石英、金雲母、長石などの砂粒を含む。 ②普通 ③浅黃褐色	12-13世紀 一部風化

辨別番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調査	①勘定 ②焼成 ③色調	調考
51-14	土師器 环	b2gr 2B層	底径5.2	やや大きめの底部と体部の境はごく浅くしばり、体部は内沟気味に立ち上がる。	体部内面：縦彫横ナデ 底部内面：右回り状の回転ナデ 底部外面：回転糸切り	①1mm以下の石灰、長石、角閃石などを含む砂粒。 ②普通 ③淡青緑色	13世紀 一部風化
51-15	土師器 小皿	d4gr 2A・2D層	口径7.5	邊「ハ」の字状に立ち上がり、やや厚気味で丸みのある口縁部へと続く。	内面：ナデ、指張直痕 外面：ナデ	①岩石の石灰などを含む微砂粒 ②普通 ③淡青色	12世紀 反転復元
51-16	土師器 小皿	c1gr 2B層	底径3.4	平底で底部と体部との境界の棱は明瞭、底部内面中央部はやや盛り上がる。	内外面：不明 底部：回転糸切り	①石灰、長石、角閃石などの微砂粒を含む。 ②普通 ③黄褐色	12世紀 一部風化
51-17	土師器 高台付环?	d3gr 2D・2B層	高台径8.6	高台脚部は「ハ」の字状に開き丸くおきめる腹部へと続く。 底部は中央に向って下降する。	内外面：不明	①10mmの大いな一点と石英などの微砂粒を含む。 ②やや不良 ③淡青緑色	10-11世紀 風化
51-18	土師器 高台付环	b3gr 3B層	口径12.0 高4.9 底径8.0	底部部に凹合が付く。体部は窓窓的に立ち上がる。	内面：横ナデ 外面：横ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③内面：赤褐色 外面：灰青緑色	9世紀? 反転復元 模倣品
51-19	土師器 高台付环	c3gr 2B層	高台径7.2	高台の断面は二角形状で、内側は「ハ」の字状に開く。外側はほぼ直立して立ち上がる。体部は邊「ハ」の字状に開いて立ち上がる。	内外面：不明	①1mm以下の石灰、長石などの砂粒を少量含む。 ②やや不良 ③淡青緑色	10-11世紀 反転復元 風化
51-20	土師器 高台付环	b2gr 2B層	底径6.6	ほぼ直立して立ち上がり、断面三角形の高台をもち、体部は邊「ハ」の字状に開いて立ち上がる。	内外面：不明	①3mm以下の石灰、長石、金星石や若干の角閃石などを含む砂粒。 ②普通 ③淡青緑色	10世紀 風化
51-21	土師器 柱状高台皿	d15gr 3層	LJ径9.8 高5.3 底径9.6	底部中央に孔をもち、底部の孔は製作時に生じたもの。	外観：ナデ	①5mm以下の砂粒を含む。 ②やや良好 ③灰白色	13世紀?
51-22	土師器 檻跡	d4gr 2A・2D層	不明	体部は内溝しながら立ち上がって肥厚し、半圓周のみられた口縁部へと続く。	内面：ナデ 外面：ハケ	①石灰、長石などの微砂粒を含む。 ②普通 ③にぼい黄色	14-15世紀
52-1	陶器器 碗	a1gr 後削時	口径12.6	口縁部でやや外反する。 縁断弁文鏡	内外面：施釉	①素 ②良好 ③淡緑色	羅京燒系鏡群? 反転復元
52-2	陶器器 高台付碗	b5gr 3層	高台径6.2	見込みの釉は剥き落れ、高台内は崩りだし、青白。	内外面：施釉	①素 ②良好 ③淡緑色	反転復元
52-3	白磁 皿	b2gr 2B層	口径11.0	体部は内溝して立ち上がり、上方にてゆるい段差もつ。口縁部は外反し、底部に重ってはより強まる。口縁部は口丸。	内外面：施釉	①酸青 ②良好 ③灰白色	13-14世紀 復元?
52-4	白磁 皿	b2gr 2B層	底径6.6	平底で底部と体部との境界の棱は明瞭。底部は底部と体部の接觸部まで垂れ、底面の釉漬にはかき取れたり。 また、内側の底部と体部の境界に沈線状の切り込みを入れているが、見込み部分が欠錆切れの可能性あり。	内外面：施釉	①素 ②良好 ③灰白色	13-14世紀
52-5	白磁 碗	b2gr 2B層	底径7.0	高台の受け付け部分は、やや斜広で斜面に平坦面をもつ。高台は低く厚い。	内外面：施釉	①酸青 ②良好 ③灰白色	11世紀-12世紀 初期 白磁群
52-6	白磁 皿	c4gr 2D・3B層	底径5.2	平底で底部と体部との境界の棱は明瞭。体部は邊「ハ」の字状に開いて立ち上がる。 見込み部分と体部との境界にかるく段があり。	内外面：施釉	①酸青 ②良好 ③灰白色	13-14世紀
52-7	陶器器 染付碗	表上	高台径4.0	高台外面上に3重の團織がある。	内外面：施釉	①素 ②良好 ③淡白色	
52-8	陶器器 碗	b1gr 南壁側溝	底径5.2	高台端部はやや小さく凹取りし、体部は内側したのち直立形に立ち上がる。 高台上方に2重の團織と体部下方に1重の團織を施付けして施す。体部には帯が描かれていたのか縞のみ認識られる。	内外面：施釉	①酸青 ②良好 ③灰白色	17世紀以降 反転復元
52-9	陶器器 染付碗	b1-j1 ライン サブトレ	高台径4.7	高台は、ほぼ直立して立ち上がる。 見込み部の、体部と見込みとの境界に3重の團織を巡らし中央は花文?	内外面：施釉	①素 ②良好 ③灰白色	染付群E群

編番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	主な調査	①船上 ②焼成 ③色調	備考
S2-10	瓦質土器 浅鉢	e4gr 2A-2D層	不明	「L」字状に屈曲する口縁部。 外裏に1条の沈澱文と菊花文を施す。	内面：ナデ 外裏：ナデ	①3mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③黄褐色	奈良火鉢
S2-11	瓦質土器 深鉢	44gr 2A-2D層	不明	口縁部付近と思われ、肥厚して茶状突出となる。	内面：不明 外裏：横ナデ	①1mm以下の砂粒を若干含む。 ②やや不良 ③暗褐色	
S2-12	瓦質土器 甕	a1gr 南側周辺	不明		内面：ハケ目 外裏：格子状タタキ目	①1mm以下の砂粒を僅かに含む。 ②良好 ③黄褐色	12-13世紀
S2-13	陶磁器 碗？	IIライン サブトレイ	口径16.6	口縁端部は内外側に肥厚している。周部	内外面：回転ナデ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③黄褐色	反転復元
S2-14	陶磁器 こね鉢	b4gr 2A層	不明	やや内湾気味に立ち上がる。陶器	内面：回転横ナデ 外裏：回転ナデ	①1mmの大石英砂粒と、3-4mmの砂粒子 ②良好 ③暗オリーブ褐色	14-15世紀
S2-15	陶磁器 擂り鉢	e5gr 西壁構造	不明	外側しながら立ち上がる。	内面：ナデ 外裏：ハケのちナデ	①石英、長石などの砂粒を含む。 ②良好 ③明褐色	撲滅焼
S2-16	陶磁器 甕	e4gr 2A-2D層	不明		内面：ナデ 外裏：無ナデ	①3mm以下の石英などの砂粒と、4mmの大砂粒子を若干含む。 ②良好 ③にぼい赤褐色	撲滅焼
S2-17	製陶土器 表土	口径12.4	体部は造「ハ」の字状に開き、口縁部はやや肥厚して尖る。	内外面：不明	①1mm以下の石英、長石、角閃石などの砂粒を含む。	反転復元 風化	
S2-18	製陶土器 2層	47gr	不明	口縁端部はやや外傾し尖くおさまる。	内面：横ナデ 外裏：横ナデ	①1mm以下の砂粒を含む。 ②良好 ③黄褐色	
S2-19	製陶土器 3層	h7gr	不明		内面：横ナデ 外裏：横ナデ	①3mm以下の砂粒を少し含む。 ②良好 ③黄褐色	

遺構外 その他

件目番号	種 別	出土位置	法量(cm)	備 考	標示番号	種 別	出土位置	法量(cm)	備 考
49-1	土器	gigr 2層	残存長6.9 残存幅2.6 孔径0.7	大型の筋延形土器	55-4	鉄滓	11gr 2層上層	残存長6.0 残存幅2.5 残存厚3.4	小型の筋形漆
49-2	土器	12gr 2層上層	残存長4.3 残存幅1.4 孔径0.4	管状土器	55-5	鉄滓	d3gr 2D・2B層	残存長4.6 残存幅4.2 残存厚1.1	小型の筋形漆
49-3	土器	a2gr 2B層	残存長4.7 残存幅1.6 重量1g	両端に向けてややすばまる形状 ほぼ球形の孔で、筋溝形。	55-6	鉄滓	d2gr 2B層	残存長3.2 残存幅2.1 残存厚2.0	遺治陶製品?
49-4	土器	b1gr 3層1.面	残存長2.9 残存幅0.9 孔径0.2	管状土器	55-7	鉄滓	不明	残存長10.0 残存幅8.0 残存厚3.9	中央に浅い窪みをもつ筋形漆
49-5	十翼筋延草	13gr 2B層中層	最大幅1.0 最小幅1.0 口径0.7	土器片を加えたもの。	55-8	鉄滓	d2gr 2A・2B層	残存長11.2 残存幅7.5 残存厚4.4	筋形漆
53-1	瓦	c4gr 2B層	残存長25.7 残存幅17.5	内面に布目、外面は格子目のタキ文					
53-2	瓦	17gr 3層	残存長9.7 残存幅10.1	内面に布目状模、外面にタタキ目。 スヌ付着					
54-1	磨製石器	d1gr 3層	最大幅11.3 最小幅4.0 最小厚3.2						
54-2	打製石器	b1gr 3層	最大幅14.9 最小幅10.8 最小厚1.8	使用による磨滅がみられる。					
54-3	打製石器	b1gr 3層	最大幅6.7 最小幅6.3 最小厚2.6	刃部と基部欠損。					
54-4	打製石斧	h3gr 2層中層	残存長6.2 残存幅1.5 残存厚1.9	大型斜平打製石斧					
54-5	石錐	d4gr 2A・2B層	最大幅8.8 最小幅7.3 最小厚1.3						
54-6	石錐	a5gr 東壁沿岸層	残存長5.6 残存幅6.8 残存厚1.9						
54-7	磨石?	d4gr 2B層	最大長10.5 最小幅8.1 最小厚5.2						
54-8	砾石	12gr 2層下層	残存長3.8 残存幅3.0 残存厚2.7	側とも使用。					
55-1	窓口	d1gr 2B層	残存幅2.0 残存幅2.0 残存幅2.5	ガラス質が接着している。					
55-2	窓口	g7gr 2層	残存幅2.7 残存幅5.0 残存幅2.2	窓口の先端部の破片で、先端は黒色のガラス質。 油風孔内側が缺く。					
55-3	窓口	b6gr 3層	残存長3.2 残存幅0.8 残存厚2.4	窓口の先端部。先端は黒色のガラス質で、一部は小さく割れている。					

写 真 図 版

図版1

築山遺跡2区



全景（南から）



2区と築山古墳（右上・東から）

図版2

築山遺跡2区



1-11gr (上が北)



17-19gr (南から)

図版 3

築山遺跡 2区



5-11gr (上が北)



1-10gr (上が北)



骨蔵器出土状況（左が北）



火葬骨

築山遺跡 2 区



周溝完掘状況（南から）



周溝遺物出土状況（東から）

図版 6

築山遺跡 2 区



f1—g1 ライン土層（北西から）

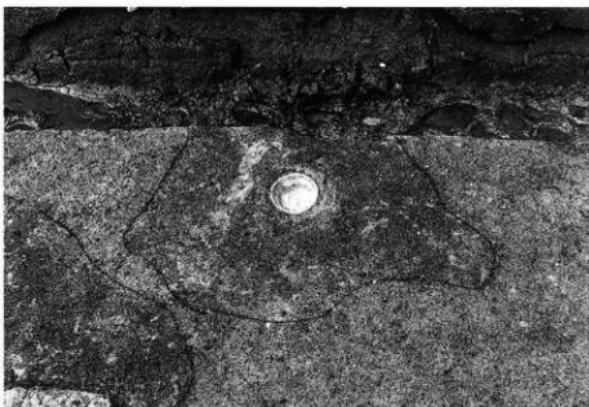


h7—h9 gr深掘り（南から）

築山遺跡 2 区



SK09 完掘状況（東から）



SK13 検出状況（東から）



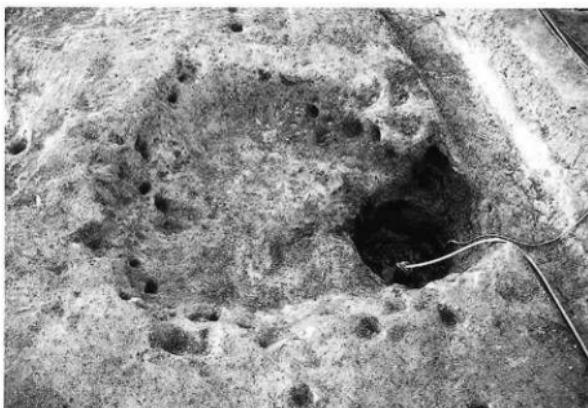
SK14 完掘状況（南東から）

図版 8

築山遺跡 2 区



SK22 調査状況 (南西から)



SE01 完掘状況 (南東から)



SE02 完掘状況 (北東から)